

江南村文化財調査報告 第3集

塩前遺跡発掘調査報告書

(塩古墳群と集落の調査)

1 9 8 2 年

埼玉県大里郡江南村教育委員会

江南村文化財調査報告 第3集

塩前遺跡発掘調査報告書

(塩古墳群と集落の調査)

1 9 8 2 年

埼玉県大里郡江南村教育委員会

序

江南村塩地区には、帆立貝式古墳ともいわれている前方後円墳2基のほか、沢山の方墳円墳が群集して居り、昭和35年3月県史跡に指定され保存されて居ります。昭和52年2月には、この塩地区に隣接する板井地区の土地改良圃場整備事業を進めるうち、岩比田遺跡を発見、当時県立歴史資料館副館長兼調査研究部長金井塚良一先生を主任調査員にお願いし、調査団を編成、緊急発掘調査を行い、貴重な出土品を発見大きな成果をあげた。

今回大字塩の南面を通る農道改修工事を進めるにあたり、県教育委員会のご指導を受けながら、県立歴史資料館の学芸員梅沢太久夫氏を主任調査員とし、法政大学OBの岡本範之氏及び本村教育委員会文化財担当者新井端主事をもって調査団を編成、地元関係者のご協力を得ながら発掘調査を行った。

その結果、道路の拡幅という限られた範囲での調査であったが、一部分の遺構と出土品によって、祖先の築いた貴い遺産を推察することが出来、学術上から見ても極めて価値ある成果をおさめることが出来た。この貴い先人の築いた偉大な文化を長く地域社会のために、活用して参りたいと存じます。

この発掘調査にあたり、ご多忙中にもかかわらずご指導ご協力下さいました県教育委員会を始め、直接発掘調査にあられた調査員並びに、地元関係者に心から感謝申し上げます。

昭和57年3月31日

大里郡江南村教育委員会

教育長 小 島 孫 一

例 言

1 本書は、昭和55年、56年度団体営農道整備事業（村道10号線）に伴う。56年度工期分にかかる埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2 発掘調査は江南村長が主体となり、江南村教育委員会が実施した。

3 調査遺跡は、塩前遺跡、塩古墳群第Ⅰ群一狸塚24、30号墳であり、大里郡江南村大字塩字正木618～字狸塚337-2に所在する。

調査期間は、昭和56年6月20日より同年8月31日まで実施した。調査終了と同時に整理・報告書作成作業が行なわれた。

4 発掘調査及び報告書作成に要する諸経費には、村費、文化庁からの国庫補助金、埼玉県教育委員会からの県費補助金があてられた。

5 本書の編集は新井が行い、監修は梅沢が行った。

6 本書に掲載した挿図類の縮尺は原則として次のとおりであるが、一部については特に規制を設けなかった。

遺構 住居跡（1/60・1/30）、土壌（1/60・1/30）古墳（1/300）、古墳周溝（1/60・1/30）、全測図（1/1000・1/300）

遺物 土器実測図（1/3）、土器拓本図（1/2・1/3） 石器実図（1/3）

遺構実測図、古墳測量図は、新井・岡本が中心となり学生諸氏の補助を得て作成した。遺物の実測図はすべて新井が行った。なお挿図の方位は磁北を示している。

7 発掘調査から本書作成に至るまで下記の方々より御指導、御協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。

石岡憲雄 金子真土 杉崎茂樹 井上尚明 宮島秀夫 金井塚厚志 植木 弘 萩原富吉
千野恒信 小林種松

8 発掘調査の組織、参加者は次のとおりである。

調査主体者 江南村教育委員会教育長 小島 孫一

事務局 江南村教育委員会次長（前任） 永田三千里

江南村教育委員会次長（後任） 高橋 正

江南村教育委員会社会教育主事 岡田 恒雄

調査担当者 日本考古学協会員 梅沢太久夫

江南村教育委員会囑託 新井 端

調査員 法政大学卒業生 岡本 範之

調査参加者 （一般）飯島健介 増田与助 中島儀一 鈴木マキ 飯島ヒロ 利根田あい 萩原富吉 小林広子 吉野むら 佐藤かね 蔵本イチ子 木持重子 久保田美代 飯島里子

（学生）蔵本正雄 柴田学 橋本正夫 橋本守治 持田尚志 船橋隆憲 宇治川克己 小坂一美 小島一浩 篠崎崇文

9 本遺跡の出土遺物はすべて江南村教育委員会が保管している。

目 次

序 言

例 言

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査にいたるまでの経過	1
第2節 調査の方法と遺跡の概要	2
第3節 発掘調査の経過	4
第4節 層位	6

第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

第1節 立地および地理的環境	7
第2節 歴史的環境	10

第Ⅲ章 遺構と遺物

第Ⅳ章 結 語

第1節 小結	63
第2節 古墳群の分布について	69

第 I 章 調査の概要

第 1 節 調査にいたるまでの経過

秩父山地に発した荒川が、その流路を東方より東南方へ変えようとするやや手前の右岸に位置する江南村は現在も田園と叢林の広がる恵まれた自然を継承している。1960～1970年代の開発ブームの圏外にあった当地域も、ゆっくりだが確実に開発の波は及びつつある。台地を切り崩す土砂採取や田圃を埋め立てる造成、静林を走り抜ける道路など、土地は緑の衣を剥ぎとられ、褐色の地膚を晒している。こんな様子は小さな村の中では日常の風景になってしまった。

昭和54年～56年度に、塩地区の農業用道路拡幅改良事業が実施されることになった。第 1 期は路線東半部に縄文～奈良・平安時代の集落跡（塩西遺跡、65—60）が近接していた。拡幅部分に遺跡の存在が予想されていたが、試掘の結果、道路区域部分に遺跡の存在を確認できなかったので工事を実施した。第 2 期は埼玉県指定史跡塩古墳群^{註1}の位置する丘陵を縦断している現道部分の拡幅が計画された。この路線に沿った頭初の工事計画には、古墳 3 基と重複するため、この古墳を避ける路線に変更した。しかし、0.8 km に及ぶ路線中には、集落跡などの存在が予想されたので発掘調査を実施することになった。このため昭和56年度に国庫補助金の申請を行い、国庫補助事業として発掘調査を行うはこびとなった。塩前（しおまえ）遺跡の名称は、第 1 期工事部分の字地名を冠したのだが、第 2 期工事部分にも便宜的に塩前遺跡の名を採った。調査^{註2}に先きだち江南村長より文化財保護法第57条の 3 の規定に基づく発掘通知を、江南村教育委員会より同法第98条の 2 に基づく発掘調査通知を文化庁長官あて提出した。その後、調査担当者と現地確認をしたところ、未登録の古墳裾部を削平する箇所があることがわかり、県文化財保護課との協議により、県指定文化財現状変更許可申請を行い、許可を受けて（指令教文第214号）、軽微の変更ですむよう工事指導することになった。文化庁からは昭和56年 8 月18日付け委保記第 2 —1463号の指示通知を受けて、調査を開始した。（事務局）

註 1 昭和55年10月埼玉県立歴史資料館の指導により試掘調査を実施した。道路拡幅部分は、土層断面の観察の結果、自然な傾斜をもって水田に移行しており、遺物（土器片）の流入が多少あっただけで遺構の存在は確認されなかった。

註 2 その後、塩前遺跡は位置と名称を確定し、江南（65—136）、塩前遺跡として登録した。

第2節 調査の方法と遺跡の概要

調査区域は、幅8m、総延長0.8kmに及ぶ路線であって、既存道路部分や新設部分を含めている。この路線部分は谷津を上下、惰行している。便宜上、大まかな地形区分によってA、B、C、Dの4区域に分けた。以下区域によって地形と調査の方法を概述する。

A区は、調査区域中の最高位置にあり（海拔高度72～73mであり、正木谷津沖積地との比高9～10m、滑川沖積低地との比高19～20mを測る）、塩古墳群第Ⅰ群を載せる狸塚丘陵の南東緩斜面に位置している。縄文、土師器等の散布が見られ、集落の存在が予想されたので、全面履土を除去し、遺構の精査を行った。土壌、埋没谷の他は何も検出されなかった。履土からは縄文土器、石器、土師器等が多数出土しており、調査区上方の緩斜面に集落跡の存在をうかがわせる。またA区西端部（区域外の南側斜面）には狸塚23号墳、同26号墳が所在している。また東寄、狸塚丘陵と諸ヶ谷丘陵との接続部には狸塚22号墳、同25号墳が所在している。

B区はA区の東側、狸塚丘陵の東裾を下る切り通し道となっており、残存部の状況からも遺構の存在は予想しにくい状態にあったので、要所に8ヶ所のトレンチを設定するにとどめた。遺構、遺物は検出されなかった。

C区はA区の西側より狸塚丘陵の南側に侵入する小谷津の開口部へ下るやや急な斜面に位置しており、現道側溝には谷津を流れる湧水が真夏でも枯れずにあった。遺構の存在を予想しにくく、斜面への移行部分にトレンチを設定するにとどめた。遺構、遺物は検出されなかった。

D区は狸塚丘陵が滑川沖積低地に延びようとする緩やかな斜面から、さらに進んだ沖積地に臨む微高地上に位置する。比高は0.8～2mである。

この微高地には集落跡の他に、古墳跡2基（狸塚27号墳、同28号墳）が確認された。また、丘陵斜面変換点に円墳2基（狸塚24号墳、同29号墳）が確認され、その1基（24号墳）の南裾を現道がかすめていた。調査は路線拡幅部分の全面と現道の一部分を表土除却し精査した。古墳跡、住居跡が検出され、多く擦糸文土器、石器等が出土した。

座標の設定には、調査区の近傍にある4等三角点芹第7号一塩（ $x=10,693,549$ 、 $y=46,491,435$ 、 $h=57.21$ ）を基準点とし、水準座標を設定した。（第1図）

検出された遺構、遺物の概要

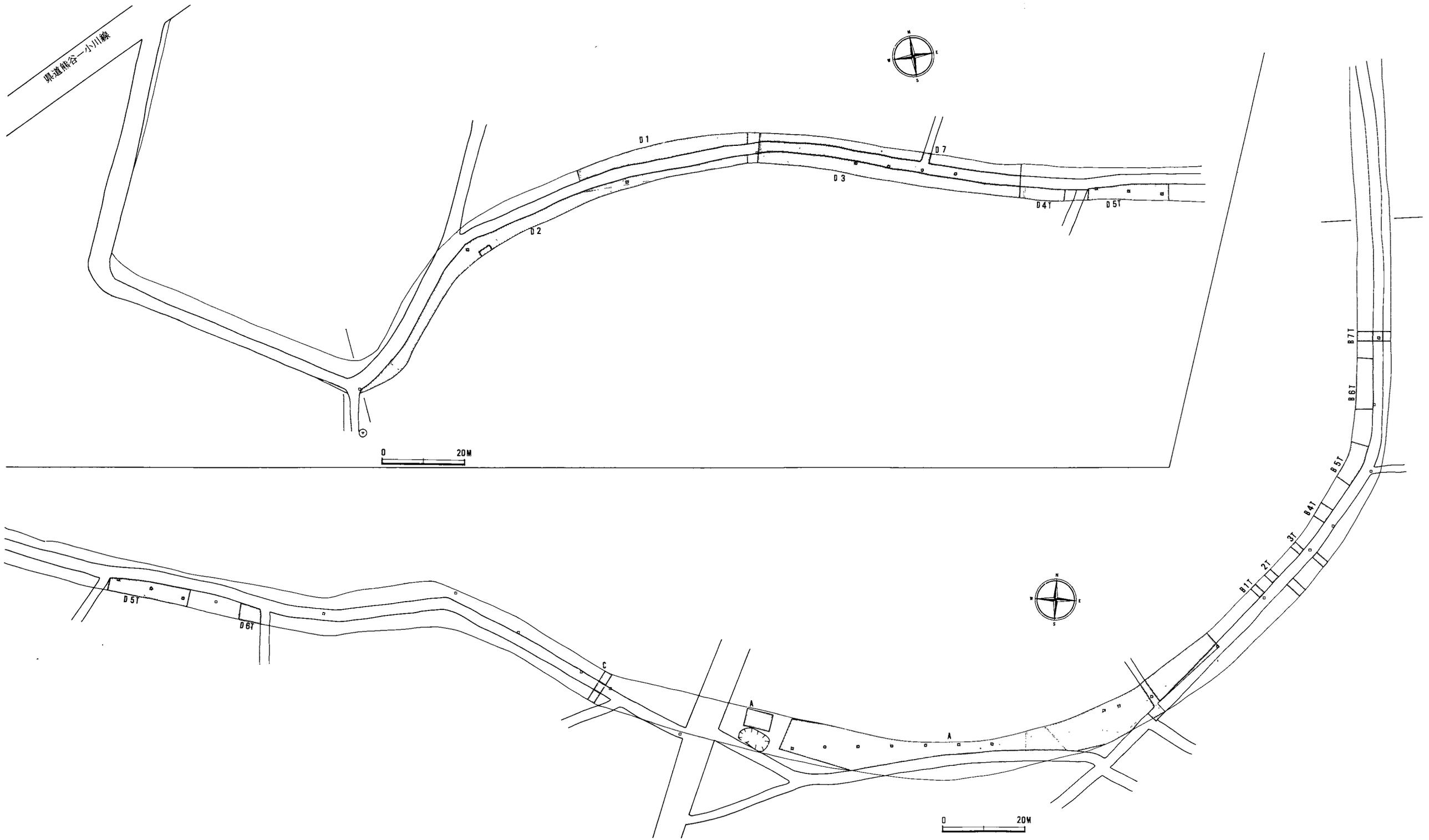
○A区

時代不詳の土壌 43基 埋没谷、縄文時代早期、中期の土器と石器、剣型石製模造品1点

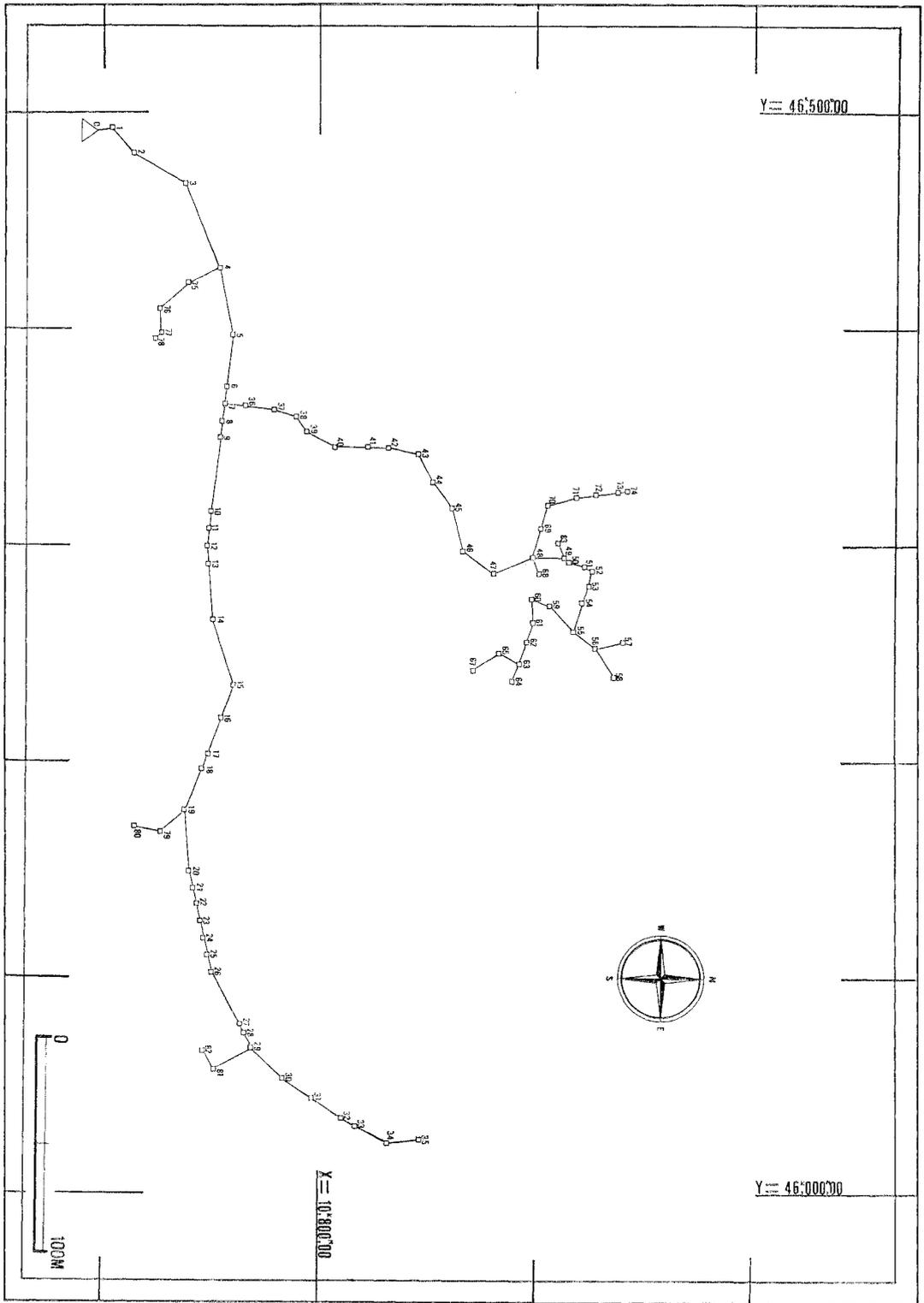
○B区 無し

○C区 無し

○D区 古墳跡2ヶ所、炉跡1、古墳時代 初頭の住居跡1軒 縄文時代早期の土器と石器



折込図版 塩前遺跡トレンチ配置図



第 1 图

第3節 発掘調査の経過

6月20日～31日 器材の準備搬入に追われ後半は、調査区の草刈を行う。

7月1日 A区より重機による表土の除去を開始する。

7月6日 調査員、作業員がそろい、遺跡の概要を説明し調査の充実をはかる。

7月10日 A区、B区の表土剥ぎを終える。

7月13日 D区の拡幅部分の表土除去を始める。

7月15日 D区の表土除去、トレンチ部を終える。検出された遺構は古墳跡2ヶ所が検出された。遺物は縄文土器が多い。

7月16日 表土除去を終えたので、水準座標の杭打ちを開始する。A区遺構確認のため精掃を行う。多数の土壌を検出し、半割する。

7月17日 埼玉県知事、ふるさと歩道を散策するため、塩古墳群を来訪、古墳と周辺の清掃におおわらわ。

7月20日 水準座標杭の設定を終える。

7月21日 A区杭27～28周辺に黒土の分布があり、ボーリングの結果1m以上も堆積が確認できた。この部分の南方には諸ヶ谷津が入り込んでおり、現在は平坦となっている黒土部分は、旧谷頭に当ると考えられた。ここを埋没谷とし、東西トレンチ、南北トレンチを設定した。

7月22日 調査と並行して全測を始める。

7月24日 A区全測終了。43号土壌を完掘。

7月27日 A区土壌の実測を始める。B区トレンチ精査、全測を始める。

7月28日 B区の精査に加え狸塚22号墳、同25号古墳の測量を始める。

7月30日 A'区を設定する。狸塚23号墳の測量を始める。古墳はみな雑林中にあり、さらにひどいブッシュで被われており、蜂の襲撃もあって清掃には苦勞した。同古墳の南側に崩壊している古墳を見つけ、26号墳とした。

8月4日 C区を終え、狸塚24号墳周辺の踏査を行う。桑が切り取られ、古墳と思われる箇所を見つけ、狸塚28号墳とした。また石室用材と思われる凝灰質砂岩片、人頭大の河原石が散布する箇所もあり、狸塚27号墳とした。狸塚24号墳の周溝を精査する。東側は途中で削平され南側に検出された周溝と連続しない。また南側と東側もボーリング探査により連続しないことが確認された。南西側に周溝が途切れ、ブリッジになっていると推定された。しかし、南側に検出された周溝は別の古墳に伴うものであることがわかった。

8月5日 24号墳測量を終える。同古墳西北のブッシュの中に小円墳を見つけ狸塚29号墳とした。

8月6日 狸塚24号墳東周溝を完掘した。西側周溝掘部を溝り上げる。南側周溝とは連続しない。また西側周溝より規模が大きく同一古墳の周溝か問題が残る。

8月7日 24号墳東側周溝土層面図作成。盗掘部分より墳丘の調査を始める。

8月10日 墳丘を掘り進むと、焼土が多量に検出でき、ほぼ同一面で土師器高坏が出土した。住

居跡の存在が確認できた。この面で住居跡プランを追求した。

8月11日 住居跡は古墳周溝に切れ、区域外に延びるが、ほぼ方形を呈するものと思われる。焼土の検出箇所が2ヶ所あり、カマド2基を持つ住居跡と推定された。

24号墳南側周溝を掘り始める。

8月12日 住居跡を掘り始める。多数の遺物の他、カマドと炉の存在することが判明した。遺物は実測、写真撮影を終え即日取り上げた。

8月14日 西側周溝、南側周溝を完掘する東西の周溝推定プランは、南側周溝に合わず、南側周溝はさらに南方に延びる別の古墳の周溝である可能性が強くなり、ボーリング探査によって、南方の畑を調査したところやはり推定周溝部分に黒色土を検出した。これを1基の古墳と考え狸塚30号墳とした。また、住居跡の床面の精査を行う。

8月17日 墳丘残存部を調査する。松、くぬぎの根に苦しんだが、須恵器片、縄文土片が出土した。

8月19日 前日夜半より雷雨があり、周溝に溜水しプールになった。遺物の洗浄作業を行う。

8月20日 24号墳西周溝平面図を作成。調査区域はすべて終了した。半日を写真撮影に費やす。

8月21～31日 補足調査とし、調査区域外に位置する古墳の測量を行う。未実測古墳が数基残ってしまった。

9月1日～7日 実測図面の証合、再確認後かたづけ、あいさつまわりをする。

(岡 本)

第 II 章 遺跡をとりまく環境

第 1 節 立地および地理的環境

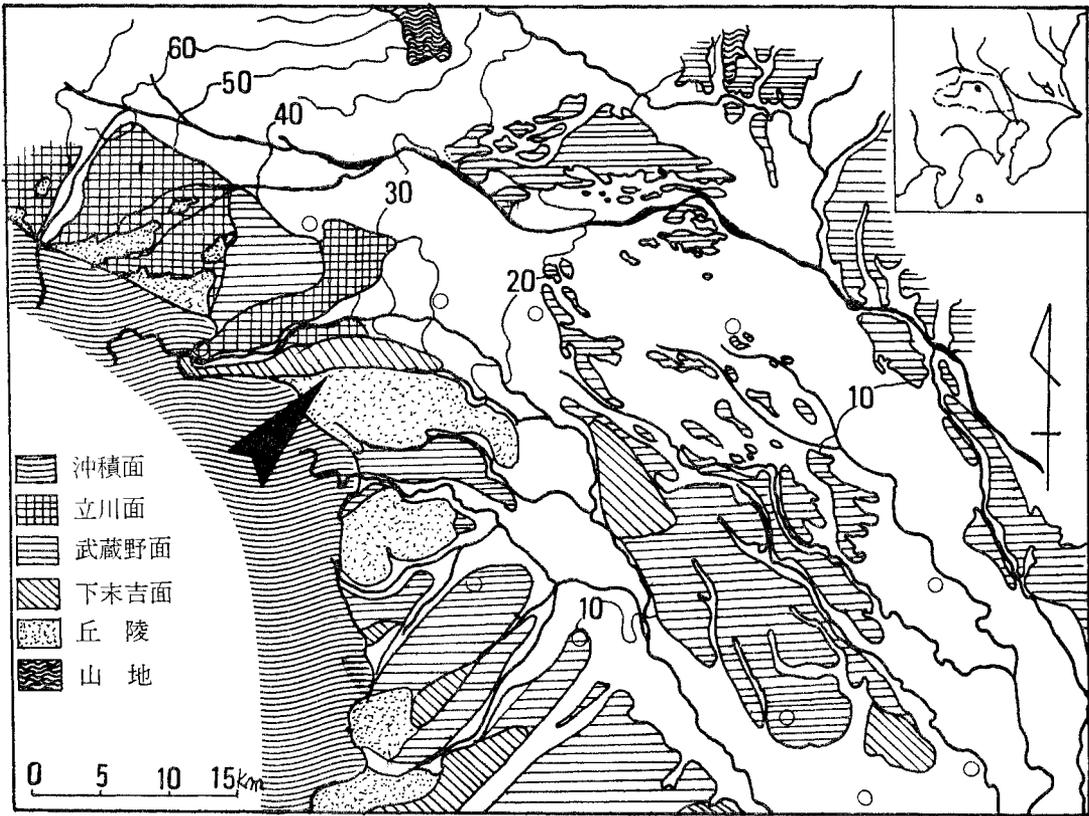
江南村を載せる土地は大きく 3 つの地形に区分される。和田川以南は、比企丘陵に含まれ、滑川村和泉へ連絡する開析谷と嵐山町古里～吉田へ連絡する開析谷が見られ、水田が集中している。この丘陵には、小規模で多数の侵食谷が発達している。これらの侵食谷の奥部や開口部には溜池が構築されているのが通例である。江南側では 18 を数える。丘陵中の最高位は海拔 105.1 m の高根山で、他は 70～90 m ほどの平坦な丘陵、緩かな傾斜面を持つものが多い。高根山周辺は白色凝灰質砂岩の露頭が見られ、かつては福田石、小江川石等の名で石材に切り出された。また、丘陵の西側には高根横穴墓群、東側には天神山根穴墓群^{註1}がつくられている。丘陵には、赤松、杉、クスギ等の 2 次林が発達しており、南向きの緩斜面は、桑、栗等の畑地として開墾されていることが多い。

村域の 2 分の 1 以上を占める土地は、荒川の中位段丘で、江南台地と呼ばれる。江南台地は荒川の右岸に残る旧扇状地の一部であり、左岸に広がる櫛引台地より高位にある。東西は約 17 km、寄居町鉢形より熊谷市楊井まで、南北は最大幅 3 km を測る。海拔高度は西側から東側へなだらかに低下し、100～40 m で起伏の少ない平坦な地形を呈している。江南村付近では 70～45 m である。台地の北側、東側は下位段丘、沖積底地に面しており 10～20 m の急崖で界される。この境界部には吉野川が流れている。台地上にはいくつかの開析谷が発達し、奥部には溜池が構築され、谷部分は水田となっている。各時代の集落跡はこの谷に南面するように分布している。他の部分は、畑地が発達しており、豆、陸稲、麦等の耕地と赤松、杉、クスギ等の 2 次林が占めている。近年、この森の伐採、開墾が目立ってきている。

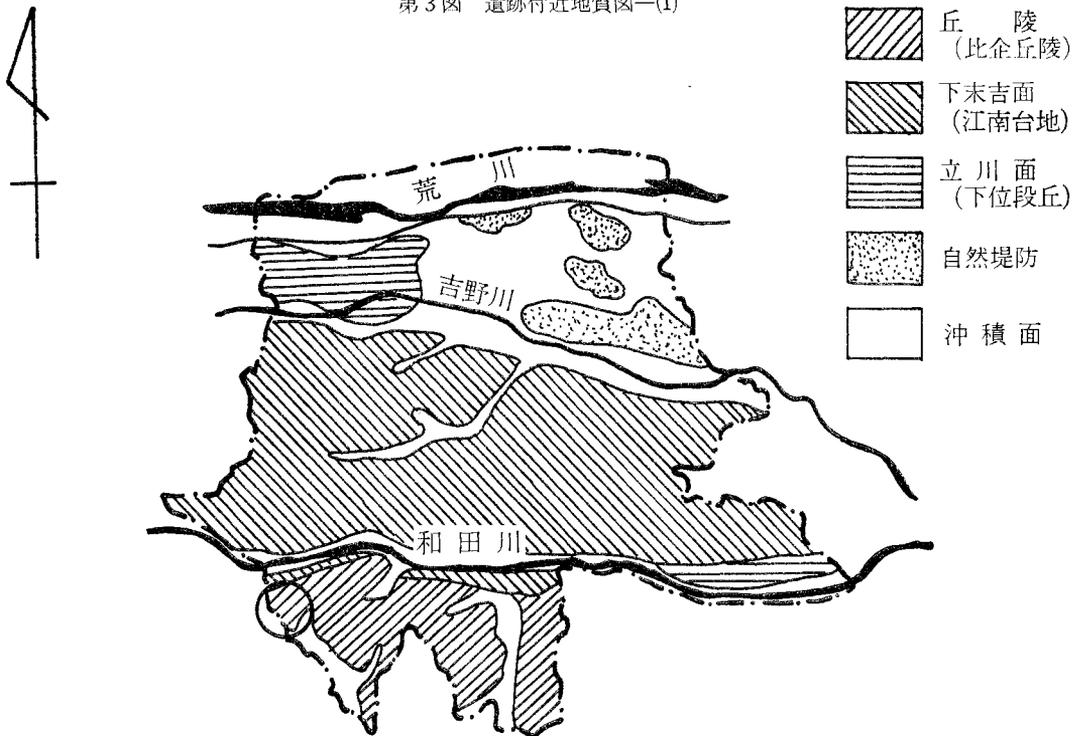
江南台地については、最近になってようやく立正大学等の研究機関による調査が進められ、その成果を見るようになった。ここではその成果を借りた。地質については、新第 3 紀層中新世の砂岩と泥岩を主とする荒川層、福田層、楊井層^{註2}が基盤となる。この上層には、江南砂礫層と呼ばれる 8～20 m の厚さの洪積世の扇状地砂礫層がある。本層中には粘土層を挟むことがある。構成礫は 20～50 cm の円礫で主に砂岩、粘板岩、チャートで秩父古成層を起源としている。この土層に下末吉ローム層に比定可能な川本粘土層と呼ばれる火山灰質粘土層があり、2～5 m の厚さを測る。本層は色調などから灰白色 (Ig)、黄褐色 (yb)、褐色 (b)、赤褐色 (rb) の 4 種類に区分できる。なかでも凝灰質の灰白色粘土層厚が 0.5～3 m と、発達が良く、台地全域にわたって追跡ができる。この上層にはローム層が整合している。ローム層は南関東地域に比して薄く 0.8～1.5 m で、新期ローム層と大里ローム層に区分される。大里ローム層は立川ローム層上部に比定されている。

台地下位は、部分的に下位段丘が残る。これは川本町畠山から江南村三本付付近まで見られ以後は沖積低地へ埋没しているといわれる。沖積底地との比高は 1 m 前後で、段丘礫層で構成されておりローム層に被覆されていない。

沖積低地は、台地東北方に広がり水田地帯になっている。その中に自然堤防状の微高地がいくつ



第3図 遺跡付近地質図一(1)



第4図 遺跡付近地質図一(2)

も認められ、現在の集落がつくられている。海拔高度が46～34mほどである。荒川との比高は9～12mである。過去においてこの地域はたびたび荒川の氾濫に会っている。

(岡本)

註1 この石材は、古墳石室の構築材に利用されることが知られている。塩古墳群第Ⅱ群一荒井15号墳、野原古墳群中の前方後円墳、熊谷市楊井薬師寺古墳は、みなこの切石を用いて横穴式石室が構築されている。

註2 高村弘毅・寺田稔・山口雅功・千沢祐之・池本啓一・樋口政男・高橋建・辻本一美・上原富二男・雨宮優・植田芳郎・保坂邦之・1979「北埼玉地域の自然環境について(第1報)」立正大学北埼玉地域研究センター年報第2号 同「(第2報)」第4号

参考 堀口万吉 1980「埼玉の地形と地質」埼玉県市町村誌 第20号

埼玉県 1974「土地分類基本調査・熊谷」

第2節 歴史的環境

江南村の遺跡分布は台地上を中心に各時代に渡って、数多くの特徴ある遺跡が存在している。1982年2月末現在までに所在の確認されている遺跡数は201である。以下、性格の判明している遺跡、遺跡の現状、出土遺物など時代順に概述する。これは、「埼玉県遺跡地名表」、立正大学古代文化研究会の調査成果、地元研究家関口和夫氏調査資料や自身の現地踏査に基づく。ただ、これらは互に補完し合っているため、さらに正確な分布調査を必要としていることはいうまでもない。

旧石器時代（第5図参照）

本期の遺跡は発掘調査された例がなく、はっきりした遺跡はまだ確認されていない。だが、数箇所の遺物散布地が知られている。宮脇遺跡（31）ではナイフ型石器が、萩山南遺跡（23）・金山遺跡（11）では有舌尖頭器が向原遺跡（34）では両面加工の石槍が表採されている。他にも4ヶ所（24、35、4、6）で搔器等の器種が見つかった。これらの遺跡地及び周辺には、縄文時代早期の礫器や撚糸土器も散布していて、縄文時代に継続する遺跡があるかもしれない。位置はみな台地上で、和田川・吉野川の開析谷に南面しているようだ。



第5図 遺跡分布図（旧石器～縄文時代）

縄文時代（第5図参照）

○草創期・早期

発掘調査によっては、今のところ遺構は確認されていない。塩前遺跡（15）のように撚糸文土器を出土した遺跡や、散布地には宝光寺北裏遺跡（13）、上前原遺跡（24）などがある。立地は台地上、舌状台地先端に位置しているようだ。

○前期・中期

前期の遺跡ははっきりしないが、塩前遺跡、押出遺跡（21）、姥ヶ沢遺跡（4）、本田東台遺跡（26）等で、関山、黒浜式土器の散布が認められた。

中期は遺跡の増加、大集落の出現を見る。

東原遺跡（22）は、加曽利Ⅴ期の大集落跡であったが、何んの調査もされぬまま消滅してしまった。工事中には石組炉、埋甕、住居跡等と共に多量の遺物が出土し、完形の物は多く持ち去られてしまったという。他に押出遺跡（21）、天神谷遺跡、中島遺跡、万吉西浦遺跡（36）などがある。^{（註1）}遺跡は丘陵台地上を中心とするが、本期には、下位段丘、沖積低地の自然堤防上にも遺跡の進出を見るようになる。^{（註2）}

○後期・晩期

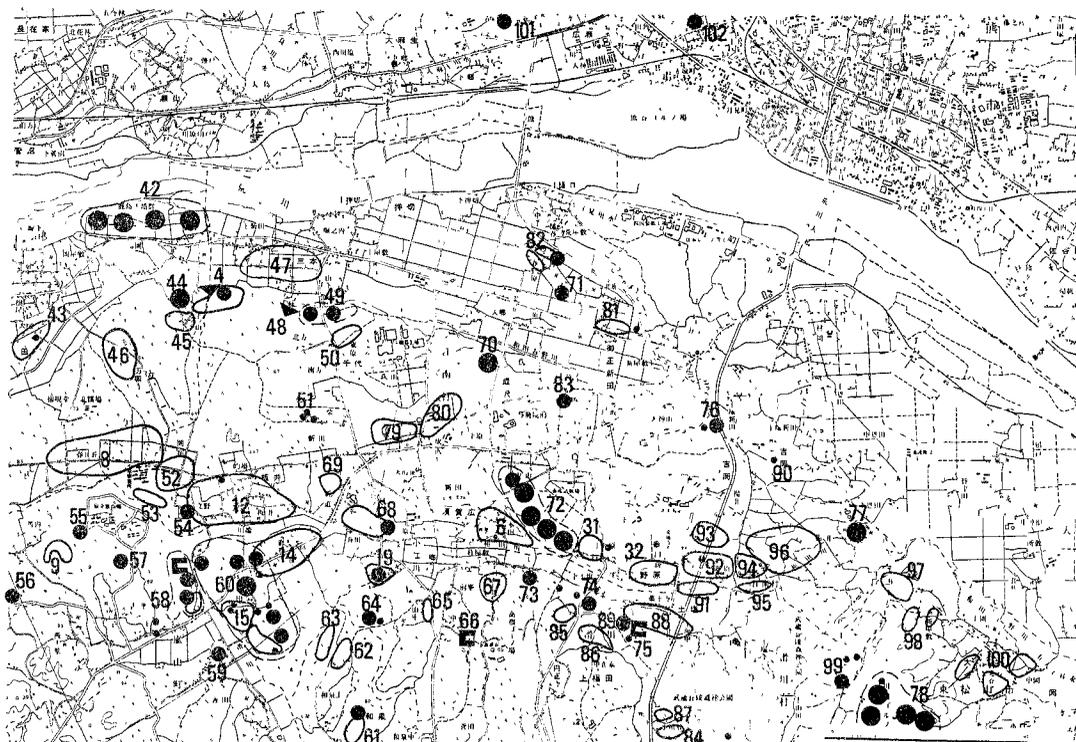
本期の遺跡は不明だが、後期の土器を出土した塩前、姥ヶ沢遺跡がある他、あまり例を見ない。

弥生時代（第6図参照）

弥生時代の遺跡もきわめて少く、荒川右岸域では、ほとんど発見されていない。しかし姥ヶ沢遺跡^{（註3）}では、吉ヶ谷式の土器が出土している。本地域での水田開発が進展を見るのは古墳時代へ移行変ろうとする時期に当るようであり、江南台地上の万吉下原遺跡^{（註4）}（76）に方形周溝墓の出現を見るようになる。

古墳時代（第6図参照）

古墳時代は縄文時代以来の遺跡数の増大する時期に当たっている。五領期の集落は確認されていないが、本田東台遺跡^{（註5）}（6）、板井・氷川遺跡^{（註6）}（12）、塩西遺跡（14）等に散布が認められる。これらは和田川の沖積低地に面している。和泉期の集落は塩前遺跡で住居跡1軒が検出された。また原谷遺跡（79）でも遺物の散布を見る。鬼高期は前代に引き続き遺跡数の増加が窺われ、明賀遺跡、諸ヶ谷遺跡、桜山遺跡（52）、金山遺跡（53）、宮下遺跡（50）、久保遺跡（32）、丸山浦遺跡（94）などがある。岩比田遺跡では住居跡2軒が検出されている。これらの遺跡は、和田川流域、滑川沖積低地周辺、吉野川に開析される台地上の谷津周辺に立地している。これらの遺跡は、谷津の流水を利用する小規模の水田耕作だったと考えられるがそれでは生産基盤の脆弱性は否めず集落の増加は、純粋に集落の発展なのか、転居移動によるのか、生産基盤の実態などと関係して問題となる。^{（註8）}



第6図 遺跡分布図（古墳時代）

またこれらの集落に近接して古墳の築造が見られる。第6図の黒丸ドットは古墳の所在が確認された場所で、鹿島（42）、千代（49）、尾根（58）、塩（60）、野原（72）等の古墳群の他、中小規模の古墳群が15ヶ所以上に分布している。時代的に先行するのは前方後円墳を有する塩、円照寺、野原の古墳であり、6C前半～後半と考えられている^(註9)。その後、野原、塩、尾根、千代、鹿島と群集墳と呼ぶにふさわしい古墳墳が6C末～7C後半形成される。これらの古墳の中で調査されたのは、熊谷市場井伊勢山古墳^(註10)、同薬師寺古墳^(註11)、同万吉下原遺跡、野原古墳群中の前方後円墳、鹿島古墳群がある。横穴墓群は、丘陵地の南面に築造され、天神山（75）、高根（66）、尾根（58）に数基ずつ確認されている^(註13)。

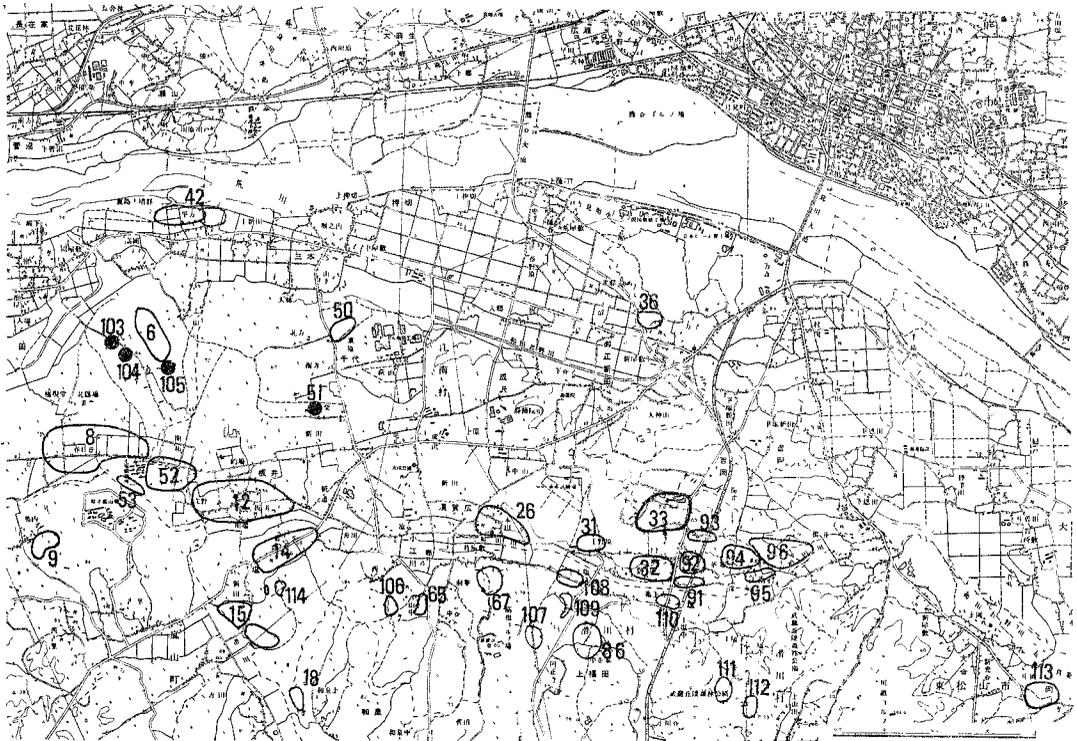
高岡（44）鹿島、尾根、小江川（68）、姥ヶ沢、野原、円照寺の古墳群中には埴輪を樹立する古墳がある。埴輪を生産した工房、窯跡の追求も問題のひとつである。現在、埴輪窯跡は江南台地の段丘崖に発見され、権現坂、姥ヶ沢の2群が確認されている^(註14)、^(註15)。

従来、塩古墳群（狸塚群の21基）は造営者の基盤を考える時、和田川（旧地名小江川）の沖積低地が注目されているが、この沖積低地は狭長で、台地面の畑作を考慮に入れてとしても、不十分であるように思われる。これは塩地区の古墳群と周辺の古墳群の実態について現状の把握が不十分であったことが障害となったようだ。塩古墳群（前方後円墳の所在する狸塚群だけでなく、狸塚の丘陵から周囲に延びる支丘陵上、斜面に位置する古墳を含めた支群の集合体）は、和田川の沖積低地

だけでなく滑川沖積低地を望むことができる。その丘陵緩斜面には集落が形成されている。塩1号、2号の前方後円墳は6C前半代に築造が考えられ、6C中～7C代にかけて、尾根、神山、陣屋等の、いわゆる古里吉田古墳群とされる小円墳群が滑川沖積低地周辺に形成されると考えられている。^(註16)塩古墳群の被葬者の集団の基盤を、従来考えられる和田川沖積低地と滑川沖積低地を含めた周辺地域に想定して良いように考えられる。古代には、この周辺は男衾郡の郡域に含まれることも考慮して良いと思われる。

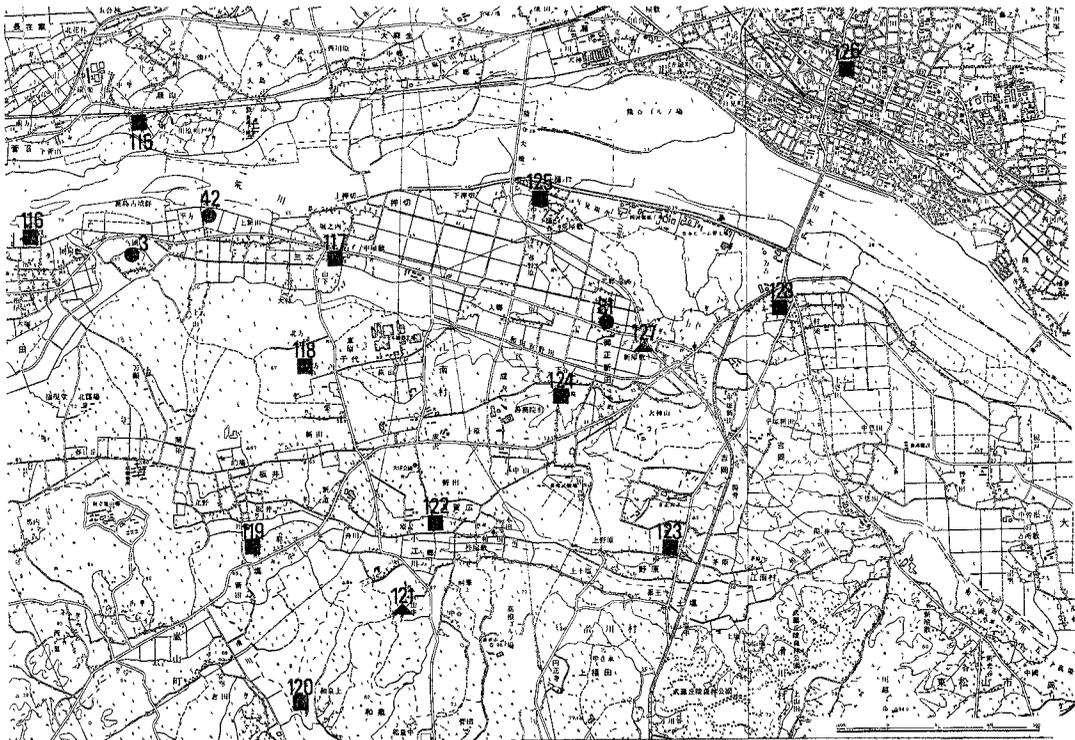
奈良・平安時代（第7図参照）

前代の集落地に引き続き集落の形成を見ることができる。これは前代からの生産基盤の保持と鉄器や治水の普及による生産性の進展に加え、荒川下位段面、荒川沖積低地面への進出や台地上での畑作等による可耕地の拡大が背景と考えられる。下位段丘、沖積低地には、上新田遺跡（47）、堂ヶ島遺跡（82）、宮前遺跡（82）宿遺跡（81）、万吉西浦等の集落が確認される。^(註17)台地上では前代の集落に加え、春日丘遺跡（8）、西遺跡、熊野遺跡（91）、荒神脇遺跡（92）、鹿島遺跡（33）等がある。熊野、荒神脇、岩比田、鹿島では住居群が検出されている。^(註18)他に川本町春日丘、高岡遺跡、熊谷市一108遺跡等がある。これらの集落跡の分布から当時の政治領域（郡域）を考える研究



第7図 遺跡分布図（奈良・平安時代）

もされている。江南周辺は郡域の交錯する地域で大里、横見、比企、男衾の各郡、郡家、郷の比定地が問題となっており、なかなか定まらないが、江南村野原一熊谷市楊井周辺と江南村板井一川本町春日丘周辺は郡域を異にするらしいことは研究者の一致を見ている。また該期の寺院跡も何ヶ所か推定されており、寺内廃寺跡（51）では布目瓦の散布、基壇状遺構が確認されている。他に万願寺跡（105）、諦光寺跡（104）や布目瓦の散布地（103、6）が知られる。経塚遺物の出土も川本町側に伝えられる。江南村野原地域でも平安期の小金銅仏の出土が知られている。今後、板井、野原周辺地域での調査知見は、奈良、平安時代の問題に重要な資料を提示するに違いないと考えられる。



第8図 遺跡分布図（中世）

平安時代後半より鎌倉時代にかけては、公地公民制の衰退、荘園制の進展といった生産基盤の公有から私有に移行し、生産力や、武力を蓄えた田堵、名主の抬頭を促し、やがて武士へ転換していく。律令制の社会から封建制の社会への模索の段階に位置づけられている。多くの問題が埋没している時期であり、考古学の方法を用いると有効な場合も多い。生産跡、集落跡、墓制など実態の追求が進められている部分もあり、さらに研究の進展が期待される。江南村でも、城館跡、中世寺院跡の伝承、板石塔婆出現の問題解明などがある。本時期以降の歴史的背景は、御正新田宿遺跡の報文に譲りたい。

（新井）

第1表 遺跡地名表

番号	名称	所在地	種別	時期その他
1		川本町菅沼下菅沼	集 落 跡	縄文
2		〃 本町丹阿弥	〃	〃
3	舟 山 遺 跡	〃 本田高岡	〃、墳 墓	〃 中世墳墓
4	姥ヶ沢 〃	〃 本田姥ヶ谷 ～江南村千代姥ヶ沢	集落、古墳群 埴輪窯跡	旧石器、縄文、弥生、古墳
5		川本町本田清水山	集 落 跡	縄文、古墳、奈良平安
6		〃 本田荷鞍ヶ谷戸	〃、窯 跡	〃 〃 〃
7		〃 本田北條場	集 落 跡	〃 〃 〃
8		〃 本田春日丘	〃	〃 〃 〃
9		嵐山町古里	〃	〃 〃 〃
10	上耕地 遺 跡	〃 古里上耕地	〃	〃
11	金 山 〃	江南村板井金山	〃	旧石器、縄文、古墳
12	板井氷川 〃	〃 板井氷川	〃	縄文、古墳、奈良平安
13	宝光寺北裏 〃	〃 板井下板井	〃	縄文
14	塩 西 〃	〃 塩西	〃	〃 古墳、奈良平安
15	塩 前 〃	〃 塩	〃	〃 〃 〃
16		〃 塩	〃	〃
17		滑川村和泉	〃	〃
18		〃	〃	縄文、古墳
19	切久保遺跡	江南村小江川西、切久保	集落跡、古墳群	〃 古墳
20		〃 小江川	集 落 跡	〃 古墳
21	押 出 遺 跡	〃 千代押出	〃	〃
22	東 原 〃	〃 千代東原	〃	〃
23	萩山南 〃	〃 千代萩山南	〃	旧石器、縄文
24	上前原 〃	〃 千代上前原	〃	〃 〃 古墳
25		〃 成沢	〃	縄文、古墳
26	本田・東台遺跡	〃須賀広本田、東台	〃	〃 〃、奈良平安
27		滑川村土塩	〃	〃 〃
28		〃	〃	〃
29		〃	〃	〃
30		〃	〃	〃
31	宮 脇 遺 跡	江南村野原宮脇	〃	旧石器、縄文、古墳、奈良平安
32	久 保 〃	〃 野原久保	〃	縄文 〃 〃

番 号	名 称	所 在 地	種 別	時 期 そ の 他
33	鹿 島 遺 跡	江南村野原鹿島	集 落 跡	縄文、奈良平安
34	向 原 “	“ 御正新田向原	“	旧石器、縄文
35	天神山 “	“ 御正新田天神山	“	“ “
36	万吉西浦 “	熊谷市万吉西浦	“	縄文
37		東松山市	“	“
38		“	“	“
39		“	“	“
40		“	“	“
41		“	“	“
42	鹿 島 古 墳 群	川本町本田鹿島	古 墳 群	古墳 県史跡
43		“	“	“
44	平方前古墳群	“ 本田平方、前林	“	“
45		“	集 落 跡	“
46		“	“	“
47	上 新 田 遺 跡	江南村上新田	“	“
48	権現坂埴輪窯跡	江南村千代	埴 輪 窯 跡 群	“ 県選定重要遺跡
49	千 代 古 墳 群	“ 千代前大林	古 墳 群	“
50	宮 下 遺 跡	“ 千代宮下	集 落 跡	古墳、奈良平安
51		“ 千代久保	“	“ “
52	桜 山 遺 跡	“ 板井桜山	“	“ “
53	金 山 “	“ 板井金山	“	“ “ No.11と同じ
54	立 野 古 墳 群	“ 板井金山	古 墳 群	“
55		嵐山町古里	“	“
56		“ 古里	“	“
57		嵐山町古里	“	“
58	尾 根 古 墳 群	“ 古里尾根駒込	“	古墳、横穴墓 県選定重要遺跡
59	陣 屋 “	“ 吉田	“	“
60	塩 “	江南村塩	“	“ 県史跡
61		滑川村和泉	“	“
62		“	集 落 跡	“
63		“	“	“
64	釜 場 古 墳 群	江南村小江川	古 墳 群	“
65	山 中 遺 跡	“ 小江川山中	“	“

番 号	名 称	所 在 地	種 別	時 期 そ の 他
66	高根横穴墓群	〃 小江川谷向	横 穴 墓 群	古墳 県選定重要遺跡
67		〃 小江川	集 落 跡	〃
68	小江川古墳群	〃 小江川	古 墳 群	〃
69		〃 小江川	集 落 跡	〃 奈良平安
70	行人塚古墳群	〃 成沢行人塚	古 墳 群	〃
71	堂ヶ島 〃	〃 樋春	〃	〃
72	野原 〃	〃 野原	〃	〃
73	円照寺 〃	滑川村土塩	〃	〃 県選定重要遺跡
74		〃	〃	〃
75	天神山横穴墓群	〃 土塩	横 穴 墓 群	〃 県選定重要遺跡
76	下原古墳群	熊谷市万吉	古 墳 群	〃
77	瀬戸山 〃	〃 楊井	〃	〃 県選定重要遺跡
78	三千塚古墳群	東松山市	〃	〃 県選定重要遺跡
79	原谷遺跡	江南村	集 落 跡	〃
80	大原 〃	〃	〃	〃、奈良平安
81	宿 〃	〃 御正新田	〃	〃 〃
82	宮前 〃	〃 樋春	〃	〃 〃
83	静簡院古墳群	〃 成沢	古 墳 群	〃
84		滑川村	集 落 跡	〃
85		〃	〃	〃
86		〃	〃	〃
87		〃	〃	〃
88		〃	〃	〃
89		〃	古 墳 群	〃
90		熊谷市	〃	〃
91	熊野遺跡	江南村野原	集 落 跡	古墳、奈良平安
92	荒神脇 〃	〃 野原	〃	〃 〃
93	下新田 〃	〃 野原	〃	〃 〃
94	丸山浦 〃	〃	〃	〃 〃
95	丸山 〃	〃	〃	〃 〃
96		熊谷市楊井	〃	〃 〃
97		東松山市	〃	〃 〃
98		〃	〃	古墳

番 号	名 称	所 在 地	種 別	時 期 そ の 他
99		滑川村	古 墳 群	古墳
100		東松山市	集 落 跡	〃
101	宮 塚 古 墳 群	熊谷市広瀬	古 墳 群	〃 国史跡
102		〃	〃	〃
103		川本町本田北條場	集 落 跡	奈良平安
104	諦 光 寺 跡	〃 本田北條場	寺 院 跡	〃
105	万 願 寺 跡	〃 本田万願寺	〃	〃
106		江南村	集 落 跡	〃
107		滑川村	〃	〃
108		〃	〃	〃
109		〃	〃	〃
110		〃	〃	〃
111		〃	〃	〃
112		〃	〃	〃
113		東松山市	〃	〃
114		江南村	〃	〃
115		川本町	城 館 跡	中世
116	本 田 城 跡	〃 本田	〃	〃 県史跡
117	三 本 館 跡	江南村三本	〃	〃
118	上 杉 館 跡	〃 江南村千代南方	〃	〃
119	塩 館 跡	〃 塩荒井	〃	〃
120	三 門 館 跡	滑川村和泉	〃	〃
121		江南村小江川	畜 銭	〃
122	須 賀 広 陣 屋 跡	〃 須賀広	近 世 陣 屋	江戸
123	増 田 館 跡	〃 野原	城 館 跡	中世
124	成 沢 館 跡	〃 成沢	〃	〃
125	平 山 館 跡	〃 樋春	〃	〃 重文・平山家住宅
126		熊谷市熊谷	〃	〃
127		江南村御正新田	畜 銭	〃
128		熊谷市村岡	城 館 跡	〃
	西 遺 跡	江南村	集 落	縄文、奈良平安
	天神谷 〃	〃	〃	〃
	中 島 〃	〃	〃	〃

- 註1 関口氏による、また同遺跡の破壊時に表採された土器や石器が教育委員会に保管されている。加曽利EⅡ～Ⅳ式が多い。
- 註2 熊谷市に入る万吉西浦遺跡は、江南村宿遺跡より連続する自然堤防上に位置する。同遺跡では加曽利EⅡ式の埋甕、集石炉等が検出されている。
 寺社下博 1980『万吉西浦遺跡』熊谷市教育委員会
- 註3 姥ヶ沢遺跡は、土砂採取を避けることができず、1982年2月に緊急調査を行った。古墳跡、住居跡が検出された。
- 註4 菅谷浩之・駒宮史郎『熊谷市万吉下原遺跡の調査概要』「第7回遺跡発掘調査報告会発表要旨」
- 註5 本田・東台遺跡は、須賀広東台遺跡とされ、1968年3月に奥田直栄氏を担当者に学習院高等科が主体者となって学術調査が行なわれたが報告はされていない。
 「埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧Ⅱ」埼玉県教育委員会・参考
- 註6 板井・氷川遺跡は、大字板井、字桜山、上板井、金山、鹿島、岩比田、下板井に広がる大集落跡である。1978年に緊急発掘調査された岩比田遺跡は本遺跡の一部分である。
- 註7 関口氏表採資料（高坏・埴）が教委に保管されている。
- 註8 岩崎卓也 1979『古墳と地域社会』「日本考古学を学ぶ（3）」のなかで、関東地方では、和泉期の集落内の住居跡は、あまり重複しないで分布するが、鬼高期に入ると、住居跡の重複が顕著になってくる説明として、生産力の向上や、人口の増加だけでは不十分とされた。これを補強され「私は、宅地の私的占取が進行したことを意味すると考えたい。すなわち、ムラ構成員内の格差が進行するなかで、ムラうちの宅地が固定されるようになり、その結果限られた宅地内での建替えがおこなわれるようになった……。首長から相対的に自立性を強めつつ、後期古墳を生みだす母体となったといわれる、「家父長家族」の析出と重なり合う現象といえよう。」と説明された。これは住居跡の単位群と群集墳の単位群に及ぼされた規制と同質と考えられ、集落や墓域等のムラの構造を解明一端になるとと思われる。
- 註9 金井塚良一 1979『比企地方の前方後円墳—北武蔵の前方後円墳の研究（1）』「埼玉県立歴史資料館研究第1号」
- 註10 熊谷市史編纂委員会 1963「熊谷市史 前編」
- 註11 田部井功、他 1979「楊井薬師寺古墳」熊谷市教育委員会
- 註12 1. 柳田敏司 1962『おどる埴輪を出土した前方後円墳について』「埼玉研究 第6号」
 2. 坂詰秀一・久保常晴・野村幸希 1965『埼玉県野原古墳の調査—北武蔵における群集群の一樣相について』「日本考古学協会 第31回総会研究発表要旨」
 3. 坂詰秀一、他 1969『埼玉県大里郡野原古墳群』「日本考古学年報—17」
 4. 亀井正道 1977『踊る埴輪出土の古墳とその遺物』「ミュージアム310号」
- 註13 塩野博、他 1972「鹿島古墳群」埼玉県埋蔵文化財調査報告第1集
- 註14 権現坂埴輪窯跡は著名な遺跡であり、埼玉県選定重要遺跡に指定されている。埋没総数は不明だが、過去に何度か発掘調査が行なわれたが小沢氏による略報以外に報告されていない。県内各地で埴輪窯跡が目ざされている時期でもあり、報告が切望される。
 1. 埼玉県教育委員会 1973「埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧」
 2. 小沢国平 1964『江南・現権山埴輪窯跡』『台地研究 No.14』
- | 調査歴 | 担当者 | 調査年 |
|-----|------|---------|
| | 小沢国平 | 1962.8 |
| | 大川 清 | 1964.10 |
- 註15 姥ヶ沢遺跡の破壊は1980年ころから頻繁に行なわれるようになった。工事区には4基ほどの窯跡があったようであり、うち1基は半壊のまま埋め戻され、他はすべて消滅した。姥ヶ沢遺跡の東1kmには現権坂埴輪窯跡がある。これらの埴輪窯跡は、江南台地の段丘崖に位置する。粘土は崖面の川本粘土層露頭に、採風は崖面を吹き上げる季節風に、水は麓下の吉野川に依拠し、最良の操業条件を有している。周辺は大小の古墳群が密集しており、今後周辺の古墳群との関係から、そしてなによりも姥ヶ沢遺跡のような目覚ませ方をし

ないためにも、この段丘崖は注意する必要がある。

- 註16 金井塚—前掲註9
金井塚良一 1976『比企地方の古墳群の形成』「吉見百穴横穴墓群の研究」
- 註17 塩野博 駒宮史郎 1972「県営本島ほ場整備事業地内、埋蔵文化財の発掘調査」江南村文化財調査報告第1集
- 註18 中島利治 小林重義 野部徳秋 1974「下新田遺跡・荒神脇遺跡・熊野遺跡」埼玉県遺跡調査会報告第22集
- 註19 前掲註18に同じ
- 註20 鹿島遺跡は、大字野原字鹿島、下原、下能万寺、八軒前、下原に広がる遺跡で、立正大学熊谷校地と重なるため、同大学の手によって調査が進められている。
坂詰秀一 野村幸希 1979、1981「遺跡調査室年報Ⅰ、Ⅱ」立正大学熊谷校地内遺跡調査室
- 註21 検出住居跡一覧
荒神脇遺跡 44軒 熊野遺跡 15軒
鹿島遺跡 2軒 岩比田遺跡 29軒
- 註22 栗原文蔵 1981『古代集落と神々』「埼玉考古第19号」
- 註23 1. 原島礼二 1978「東松山市と周辺の古代」東松山市市史編纂調査報告第13集
2. 「埼玉県史 第1巻」1931年
3. 金井塚良一 1976『北武蔵の古墳群と渡来系氏族吉志氏の動向』「北武蔵考古学資料図鑑」
4. 梅沢太久夫 高橋一夫 石岡憲雄 浅野晴樹 1980『埼玉における古代窯業の発達(2)―Ⅳ男衾郡を中心とした地理的・歴史的検討、Ⅴ問題点の整理と今後の課題』「埼玉県立歴史資料館研究紀要第2号」
- 註24 「埼玉県史 第2巻」1931
- 註25 野原古墳群より出土
林宏一 1978『埼玉の仏像』「埼玉の文化財 第18号」
- 註26 埼玉県下での中世遺跡の知見は、館跡、城郭跡、墳墓跡等の調査例が知られている。しかし、集落、荘園遺構、牛馬牧等の実態はほとんど知られていない。江南村域では、春野原荘、篠場荘、数釜荘などの実態の解明や、板石塔婆の出現に関係を推定させる寺院勢力の動向。(能満寺、長命寺等現在は廃寺となっている寺院)今後これらは注意されていかなければならない。
1. 角川書店「江南村 地誌」埼玉県地名大辞典
2. 知々和実 1974『首都圏内板碑の爆発的大量初現のその誘因』「文化 創刊号」駒沢大学

※ 寺内廃寺跡は踏査によって本文中に記した状況を観察することができた。詳細については稿を改めて紹介したいと考えている。稿正後、県遺跡台帳を何気なく見ていると、寺内廃寺とされる遺跡の位置が、確認した場所と異なっていることに気づいた。以前の調査カードを調べてみると、別の遺跡が寺内廃寺となっていた。しかし、この遺跡も寺院跡の伝承を持っている。

この混乱を正し、整理すると、以下の如くなる。

番号	提正前	提正後	小字	備考
51	寺内廃寺	金胎寺跡	久保	遺跡名の提正
	未見	寺内廃寺	寺内	新登録

金胎寺は、新編武蔵風土記稿に記載される天台宗の寺院で、現在は廃寺となっている。近傍家にコンタインジの屋号を持つものがある。

正しい寺内廃寺の位置は、第7図、No.51の位置より西へ0.5 kmほど入った地点である。本文中で提正できなかったことをおわびしたい。

第Ⅲ章 遺構と遺物

土 壙 群

土壙は、すべてA地区から検出され、他の区域では見出されていない。総数は43基を数え、直径40～50cm前後の楕円形を呈する小規模のものが大半を占めていた。これらの土壙はⅢ層上に検出されたもので、掘り込み面がどこにあったかは確認できない。土壙の分布はまばらであり、その位置、配列に規則性や規制等を窺うことはできなかった。土壙の覆土は、全く遺物を含まない黒色土や暗褐色土が自然堆積の状態で見入れていることが多く、時期、性格を知る遺物は皆無に近かった。

1～41号土壙

不整形、楕円形を呈する土壙が多く、まれに方形の土壙もある。独立して掘り込まれているが2～3基が切り合った土壙もある。11～13号、15～17号は規模の近接した土壙が切り合っており、時期的に近いのかもしれない。18号土壙より出土した土器は、本土壙に埋設されたのではなく、破片の流込であった。1～41号の土壙は4カ所の集中地域があるように見られる。

42号土壙

検出された土壙の中で最も規模が大きく、覆土中に多量の円礫を包含していた特異な土壙であった。長さ2.5m、幅1mで主軸方向はN-73°-Wを測る。確認面は埋没谷3層上であり、掘り込み面は確認できなかった。確認面からすでに礫が露出していた。この礫は上層～中層にかけて集中しており、ほとんどがこぶし大～人頭大の円礫であった。礫をまじえた覆土は黄白色粘土、褐色土であり、本土壙が埋没谷の覆土、黒色土層中に窺たれているだけにきわだって見えた。遺物は全く検出されず、時期、性格は不明である。

43号土壙

不整形な長方形を呈し、長さ1.9m、幅0.8m、深さ18cmを測る。主軸方向はN-75°-Eである。遺物は土師器細片の他には検出されていない。

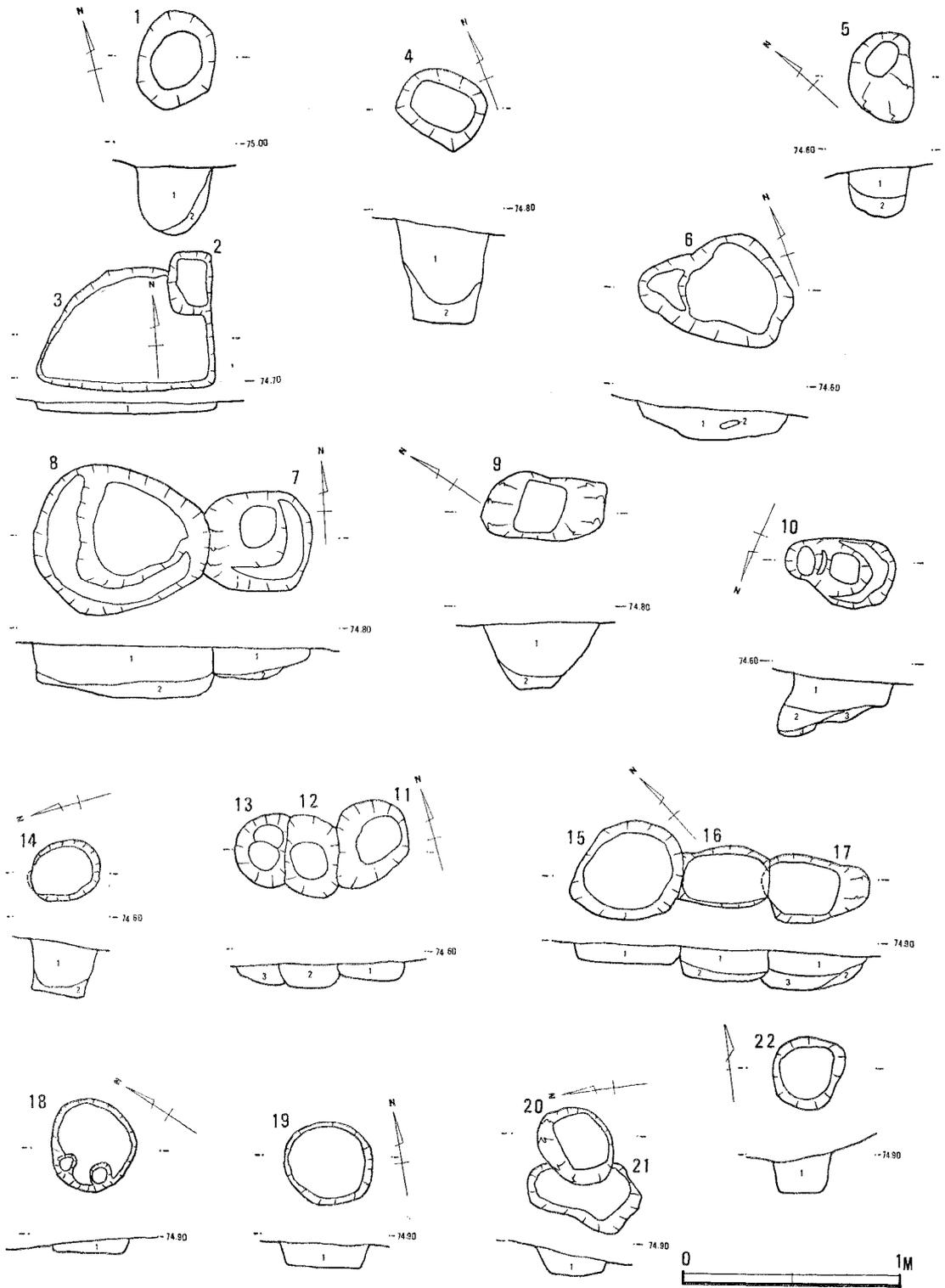
註 これらの時期、性格の不明な土壙は、よく報告例を見るが、江南村では、野原鹿島遺跡（立正大学校地内遺跡）に好例がある。鹿島遺跡の土壙は、円形のプランを主体とし直径120cm、深さ40cmとほぼ近似した規模を有し、直線的な配列を見せるなど規測性を持って分布している。土壙の時期は不明だが、規模が類似すること、規測的な配列をすること、切り合いが少ないことなど、時間的に近い掘削になると考えられ、墓墳的な性格が想定されている。

本遺跡の場合は、鹿島の例に比すれば土壙というより小ピットと呼んだ方が良いかもしれない。それにプラン、深さ、底部の様子など共通要素がほとんど無い。

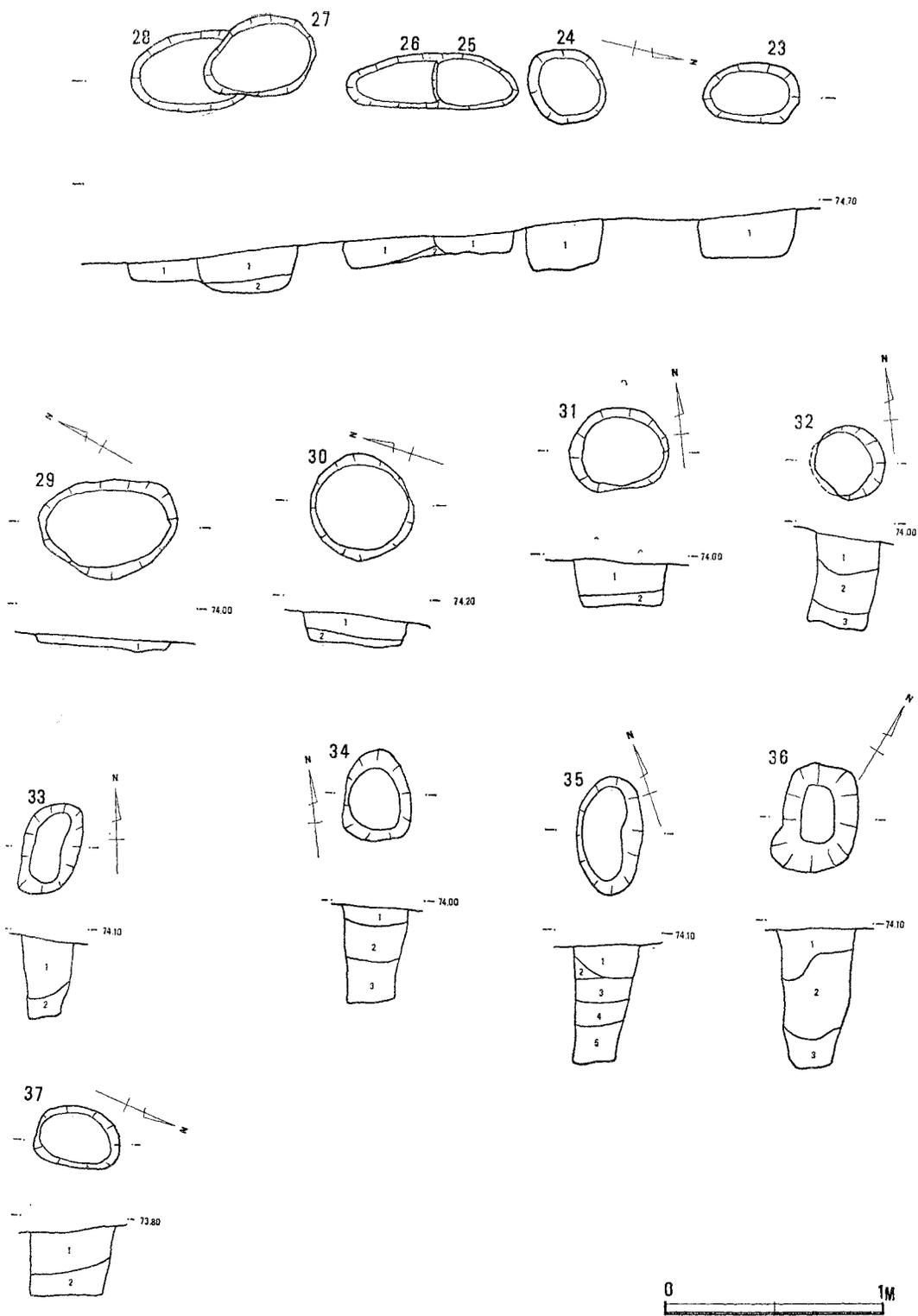
参考文献

1. 坂詰秀一 野村幸希 1979、1980「遺跡調査室年報Ⅰ・Ⅱ」立正大学熊谷校地内遺跡調査室
2. 中島利治、他 1974「下新田・熊野・荒神脇」埼玉県遺跡調査会報告第22集

下新田遺跡は野原地区に所在するが、ここでも、1.6～1.8×0.6～1.0mの長方形土壙が12基検出されており墓墳と考えられている。



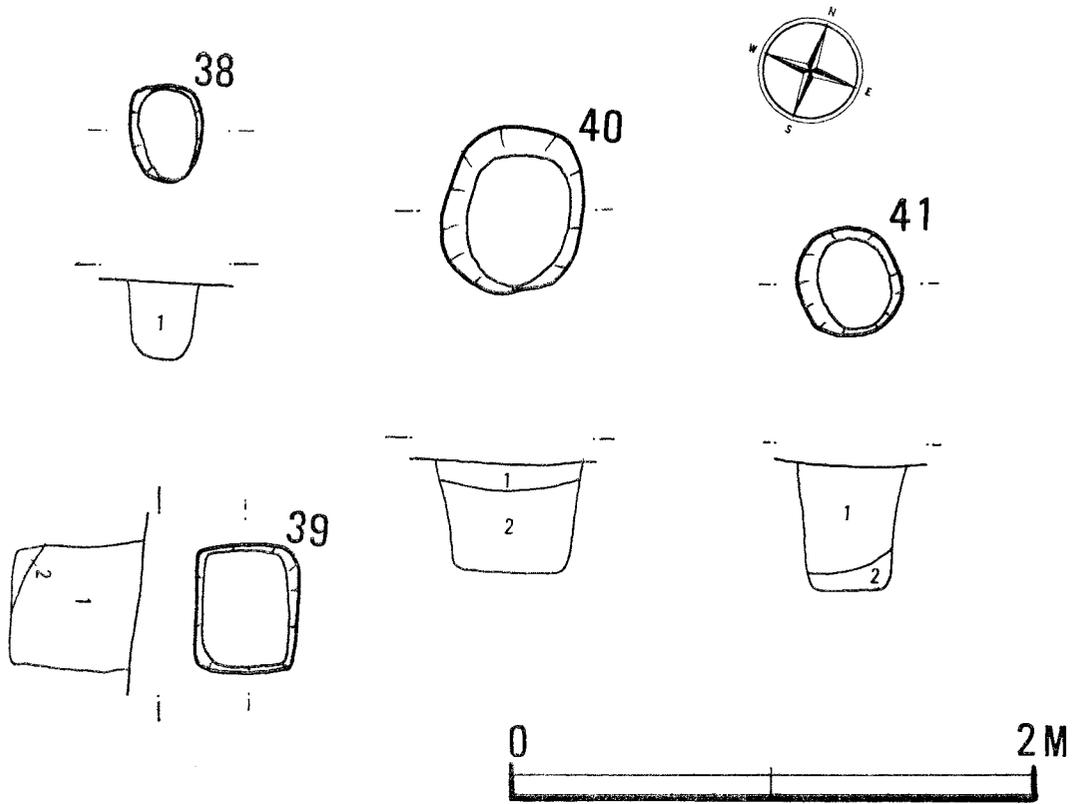
第9图 A区土壤实测图 (1/30)



第10图 A区土壤群实测图

(A区1～41号土壌土層断面説明)

- 1号土壌
1. 黒色土、砂質、パサパサ、細粒である
 2. 褐色土、ロームまじり
- 4号土壌
1. 黒色土
 2. 黄褐色土
- 3号土壌
1. 黒色土
- 5号土壌
1. 黒色土
 2. 暗褐色土
- 6号土壌
1. 黒褐色土
- 7号、8号土壌
1. 黒褐色土
 2. 暗褐色土、ロームまじり
 3. 黒色土、ローム粒子まじり
4. 暗褐色土、2に類似
- 9号土壌
1. 黒色土
 2. 暗褐色土
- 10号土壌
1. 黒色土
 2. 暗褐色土
 3. 暗褐色土、ローム粒子を含む
- 11、12、13号土壌
1. 黒褐色土、しまりは良い
 2. 黒褐色土
 3. 黒色土、ローム粒子を含む
- 14号土壌
1. 黒色土
 2. 暗褐色土
- 15、16、17号土壌
1. 黒色土
 2. 黒色土、ローム粗粒を多く含む
 3. 黒褐色土、ローム粒子を含む
 4. 褐色土、粘性、よくしまる
 5. ローム塊
 6. 黒褐色土、焼土粒子を含む
- 18号土壌
1. 黒色土、ローム粒子を含む
- 19号土壌
1. 黄褐色土、砂粒を多く含む、土器混入
- 20、21号土壌
1. 黒色土
- 22号土壌
1. 黒色土、ローム粒子を多く含む
- 23号土壌
1. 黄褐色土、よくしまる
- 24号土壌
1. 黒色土、ソフト状、ローム粗粒を含む
- 25、26号土壌
1. 黒色土、ローム粒子を含む
 2. 黄褐色土、砂質
 3. 黄褐色土、2層より粗粒
- 27、28号土壌
1. 黄褐色土
 2. 暗褐色土、ローム粗粒を含む
 3. 黄褐色土、1層に比してローム粒子が顕著
- 29号土壌
1. 黒色土
- 30号土壌
1. 暗褐色土、ローム粒子を含む
 2. 黄褐色土、ローム塊を含む
- 31号土壌
1. 黒色土、砂質
 2. 褐色土、砂質
- 32号土壌
1. 黒褐色土、ローム粒子を含む
 2. 黒色土
 3. 暗褐色土、土器細片を含む
- 33号土壌
1. 黒褐色土、ローム粒子を含む
 2. 暗褐色土、ローム粗粒を含む
- 34号土壌
1. 黒色土
 2. 黒褐色土、ローム粒子を含む
 3. 暗褐色土、砂質
- 35号土壌
1. 黒色土
 2. ロームブロック
 3. 黒色土、よくしまり、細粒である
 4. 暗褐色土



第11図 A区土壌群実測図

36号土壌

1. 黒色土、ローム粒子、小石を多く含む
2. 黒色土、細粒
3. 暗褐色土

37号土壌

1. 黒褐色土
2. 黒褐色土、ローム塊をまばらに含む

38号土壌

1. 黒色土

39号土壌

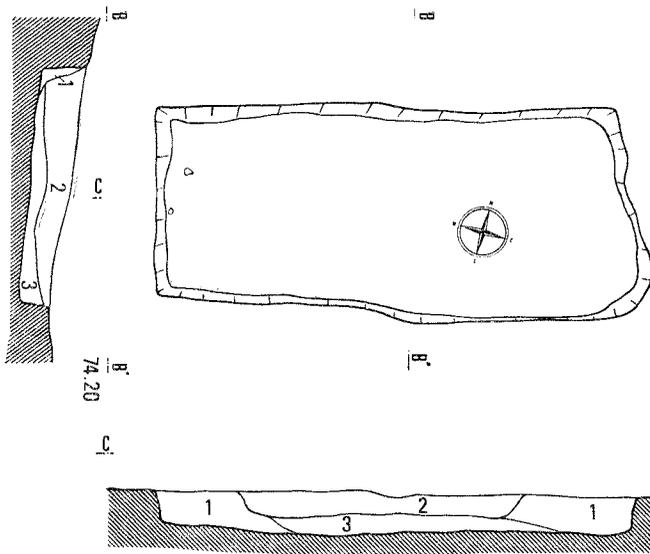
1. 黒褐色土、ローム粒子を含む
2. 黄褐色土、ロームを主体とする

40号土壌

1. 黒色土
2. 黒褐色土

41号土壌

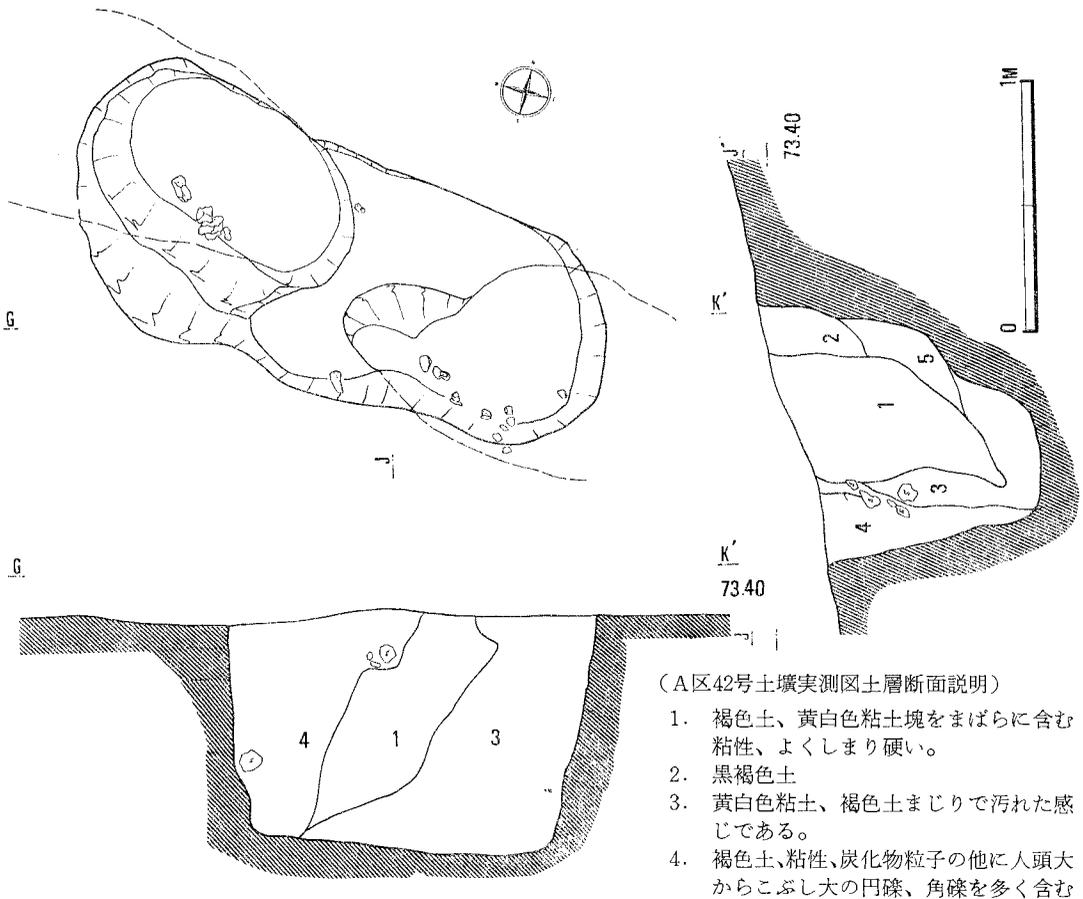
1. 黒褐色土
2. 暗褐色土、ローム粒子を含む



(A区43号土坑実測図土層断面説明)

1. ロームまじりの褐色土
2. 黒色土、粘性
3. ローム粒をまじえた黒色土

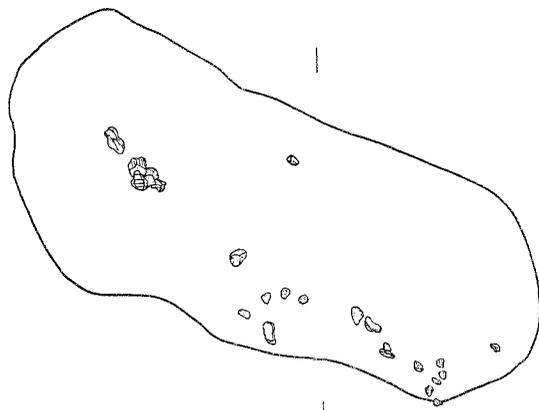
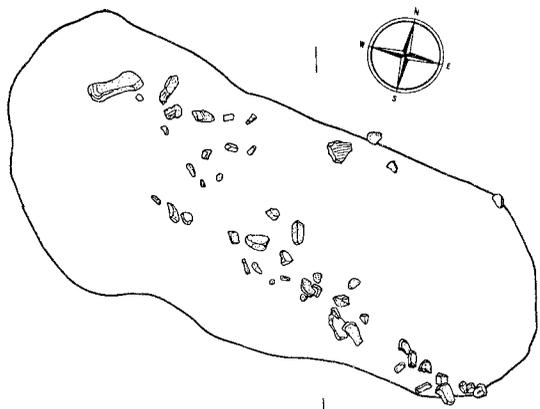
第12図 A43号土坑実測図



(A区42号土坑実測図土層断面説明)

1. 褐色土、黄白色粘土塊をまばらに含む粘性、よくしまり硬い。
2. 黒褐色土
3. 黄白色粘土、褐色土まじりで汚れた感じである。
4. 褐色土、粘性、炭化物粒子の他に人頭大からこぶし大の円礫、角礫を多く含む

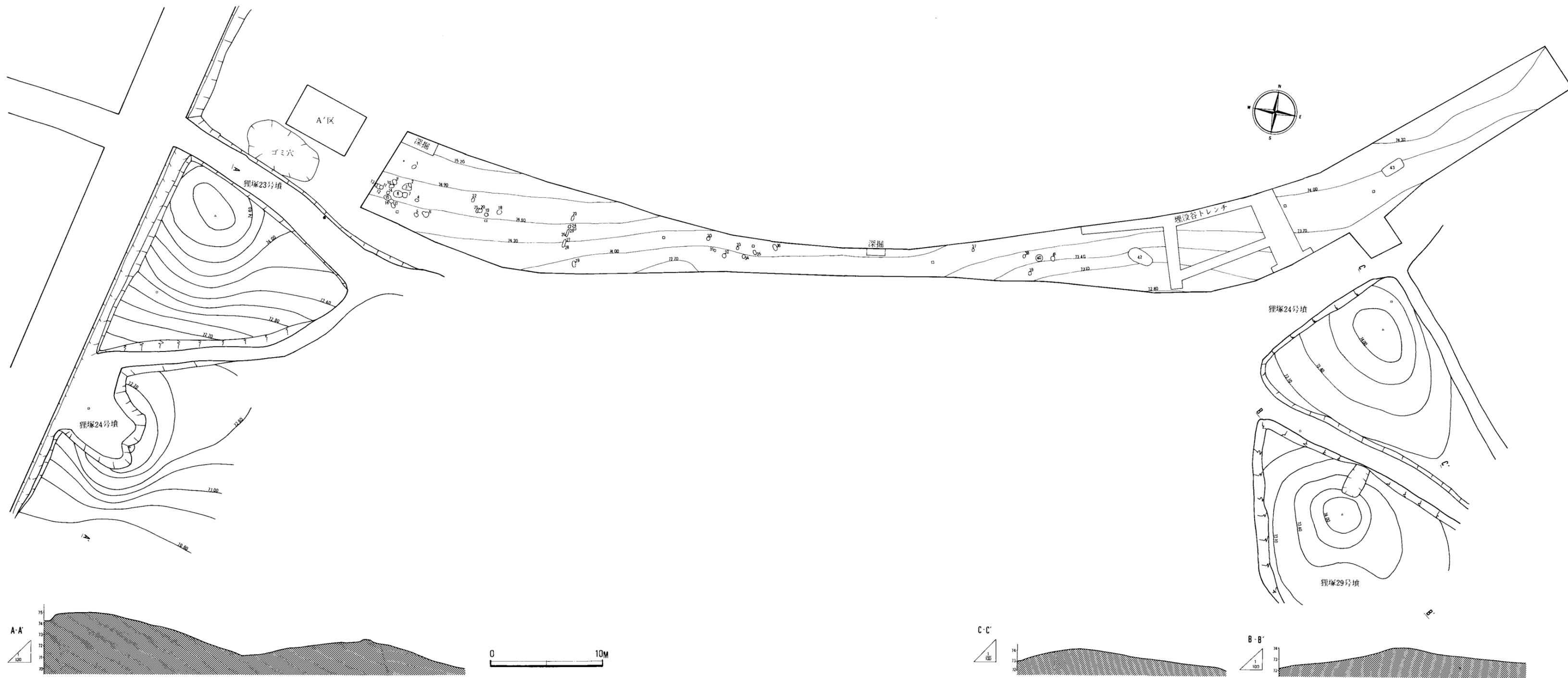
第13図 A42号土坑実測図



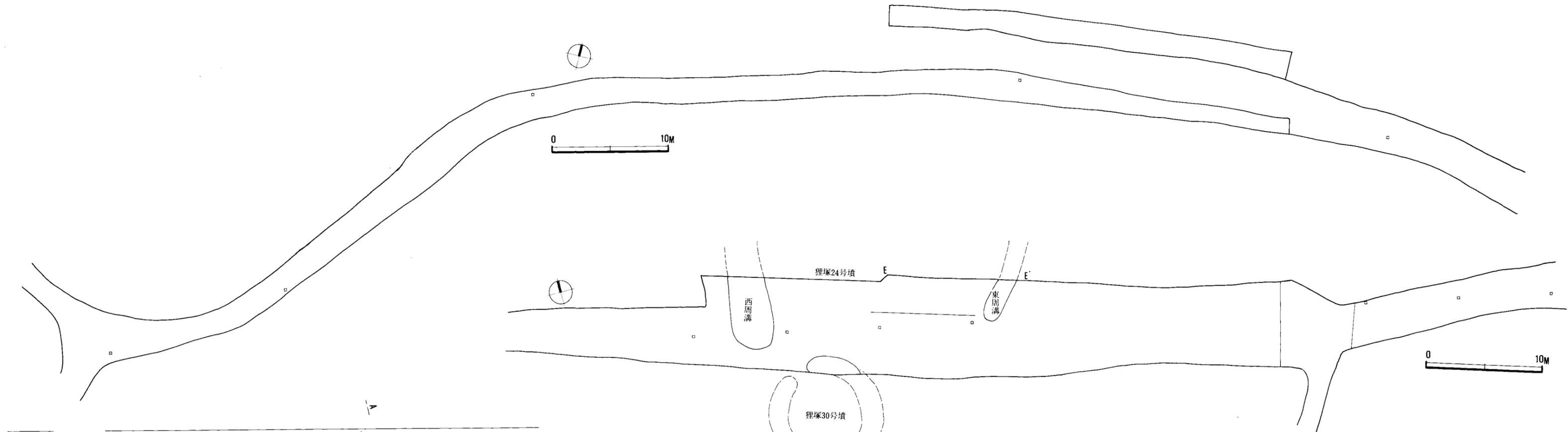
第14図 A42号土壇磔出土状態 (1/30)

第 2 表 土 壙 一 覧

番号	形 状	平 面 規 模 cm	底 面 規 模 cm	遺 存 高	レ ベ ル	備 考
1	不 整 円 形	49 × 32	—	33	75.00	
2	方 形	30 × 20	20 × 14	26	74.70	3を切る
3	楕 円 形	80 × 56	16 × 12	5	74.70	
4	"	40 × 30	28 × 18	50	74.80	
5	"	40 × 30	—	28	74.60	
6	"	70 × 52	40 × 30	11	"	
7	"	50 × 46	—	12	74.80	8を切る
8	"	80 × 68	—	22	"	
9	"	60 × 30	22 × 18	33	"	
10	"	50 × 32	—	30	74.60	
11	"	40 × 30	22 × 18	8	"	12を切る
12	"	—	18 × 18	9	"	13を切る
13	"	—	—	8	"	
14	不 整 円 形	30 × 28	20 × 28	25	"	
15	"	50 × 46	40 × 36	9	74.90	
16	楕 円 形	—	38 × 22	11	"	15、17を切る
17	"	—	36 × 20	19	"	
18	不 整 円 形	40 × 38	36 × 34	9	"	土器出土
19	円 形	40 × 40	36 × 36	10	74.90	
20	不 整 円 形	36 × 32	28 × 22	12	"	21を切る
21	楕 円 形	54 × 36	—	16	"	
22	不 整 円 形	36 × 30	26 × 22	20	74.90	
23	楕 円 形	42 × 28	36 × 18	20	74.70	
24	不 整 円 形	34 × 32	26 × 24	21	"	
25	楕 円 形	40 × 32	36 × 29	8	"	26を切る
26	"	—	—	11	"	
27	"	50 × 40	46 × 35	20	"	28を切る
28	"	—	—	10	"	
29	"	70 × 45	52 × 36	6	74.00	鉄器片出土
30	円 形	50 × 51	42 × 40	16	74.20	
31	不 整 円 形	46 × 39	40 × 32	21	74.00	
32	"	32 × 29	30 × 26	51	"	
33	楕 円 形	46 × 30	32 × 18	40	74.10	
34	"	40 × 32	28 × 21	46	74.00	
35	"	56 × 30	47 × 16	58	74.10	
36	"	50 × 34	24 × 16	62	"	
37	"	40 × 30	36 × 26	29	"	
38	"	36 × 30	35 × 26	30	73.50	
39	方 形	50 × 40	46 × 36	50	73.50	
40	不 整 円 形	60 × 52	50 × 41	40	73.70	
41	"	40 × 38	36 × 30	48	"	
42	楕 円 形	250 × 100	—	100	73.40	磔出土多量
43	長 方 形	200 × 90	190 × 80	18	74.20	

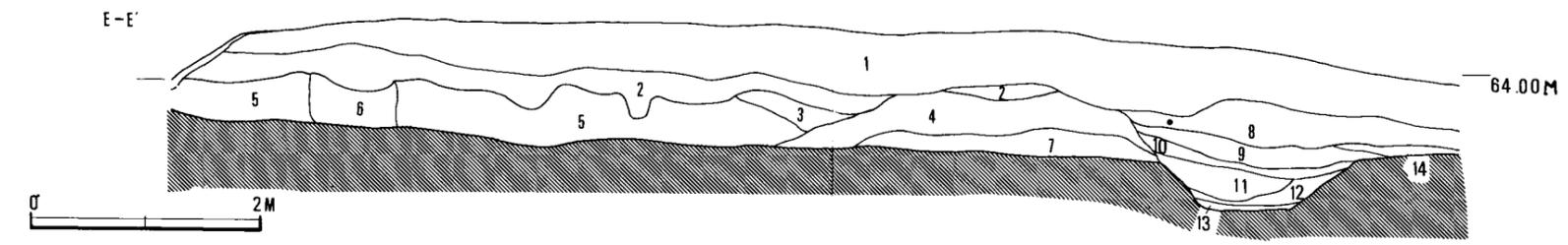
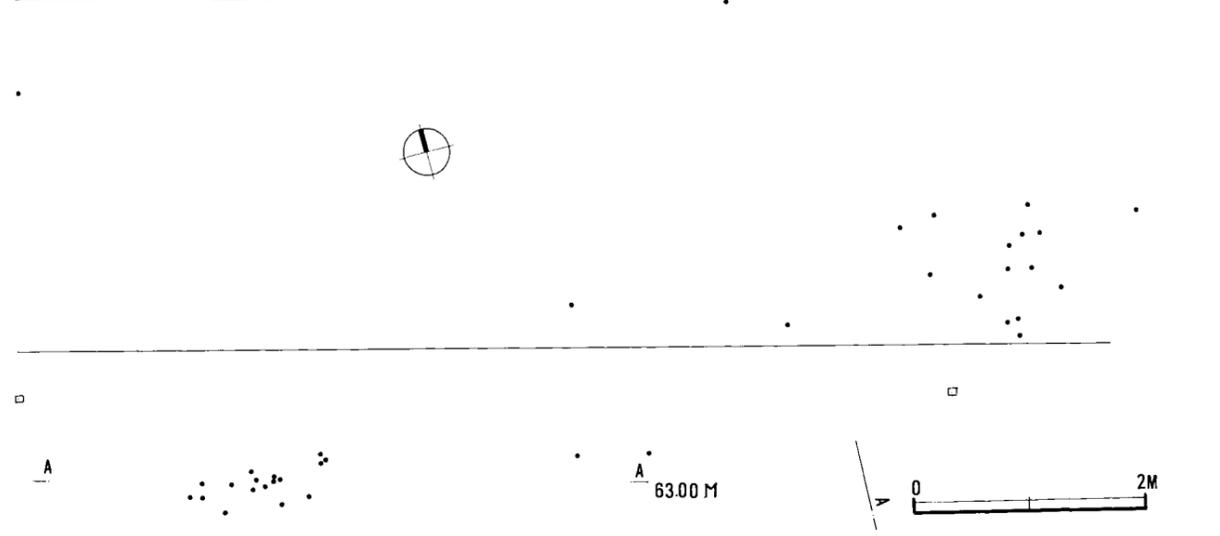


折込図版 塩前遺跡A区遺構分布図

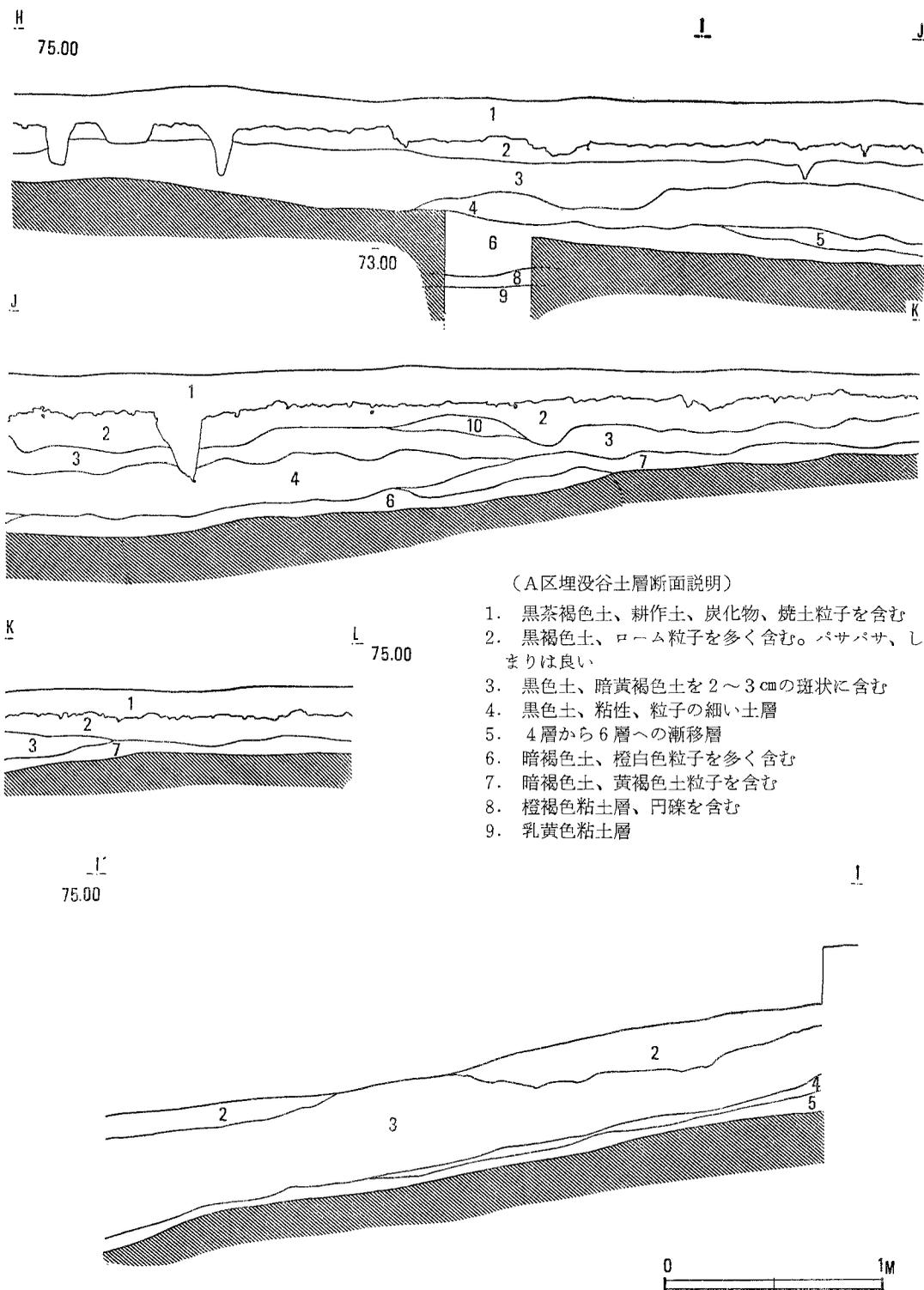


(塩24号墳東側土層断面説明)

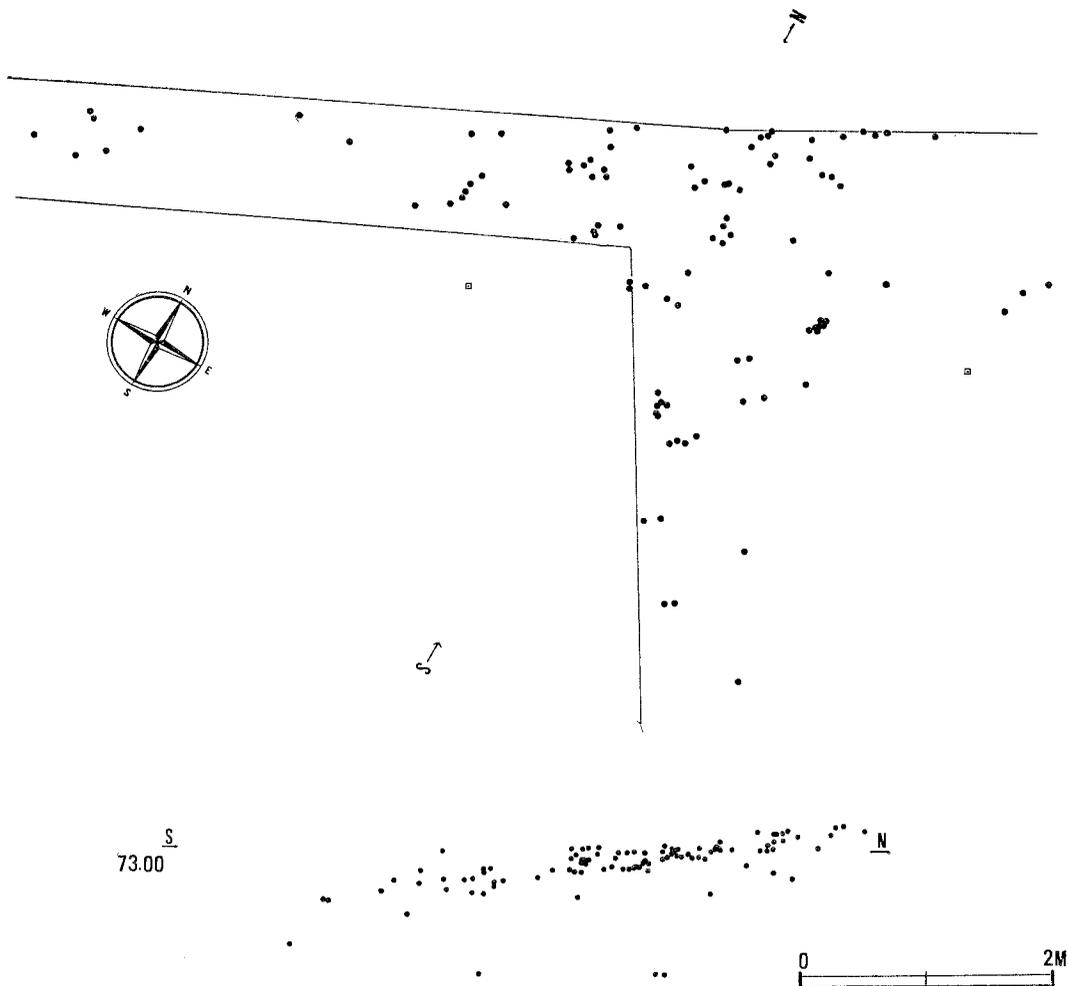
- | | |
|------------------------------|----------------------|
| 1. 褐色土、白色凝灰質岩片を多く含む、耕作土 | 9. 茶褐色土、砂質 |
| 2. 暗褐色土、黒色土粒を含む | 10. 黒色土、暗褐色土粒子を含む、砂質 |
| 3. 暗褐色土、粘性があり、2層とあまり、変らない | 11. 黒色土、砂、炭化物、土器片を含む |
| 4. 暗褐色土、黒色土をまばらに含む | 12. 灰黒色土、砂質 |
| 5. 褐色土、よくしまっている。粘性 | 13. 青灰色砂泥、ローム粒子を少し含む |
| 6. カク乱 | 14. 暗褐色土 |
| 7. 暗褐色土、よくしまっている | |
| 8. 黄褐色土、白色凝灰質粒子を含む、埴輪片を含んでいた | ※ 2~7層墳丘盛土か |



折込図版 塩前遺跡D区トレンチ図



第15図 A区埋没谷断面図 (1/60)



第16図 A区埋没谷遺物出土状態 (1/60)

埋 没 谷

埋 没 谷 (第15図)

A区の中央部やや東寄に検出された。覆土は自然堆積の状態に5層確認できた。黒色土を主体としている。1層は耕作が及んでカク乱が著しく、縄文～奈良・平安時代の遺物の他に近・現代の遺物も混入していた。2～4層は縄文時代の遺物が出土しており、谷東隅部に集中して検出された。埋没谷は全掘しておらず数本のトレンチを入れ、規模を確認した。

埋没谷の規模は、幅18.5m、深さ1.7mを測り、断面形は皿状を呈している。底部は14°～16°で移行するやや急な斜面を有している。調査部分は幅8mなので谷先端部分を明らかにしてはいないが、ほぼN-8°-Wの主軸を持つ。

この埋没谷は狸塚丘陵と諸ヶ谷丘陵を分断する狭長な諸ヶ谷の最奥部に当る。諸ヶ谷には支谷は

認められないが、諸ヶ谷の主軸は N-47°-E を測るので、検出された埋没谷は狸塚丘陵を開析していた小支谷と考えられる。埋没谷が主谷と主軸を変えて発達した原因は、主谷の先端部分に残された狸塚丘陵と諸ヶ谷丘陵を結ぶ橋陵があるためであろう。なおこの橋陵部分には古墳が築造されている。諸ヶ谷は奥部と開口部付近の比高差は約11mある。谷に流れ込んだ雨水は開口部に造られた沼に貯えられている。

遺物の出土状態（第16図）

1層はカク乱層で各時代の遺物が出土している。2～4層は縄文時代の土器、礫、石器、剥片が出土している。谷東隅部に集中して検出された。遺物の大半は礫であり、土器片、石器が次位を占める。これらは約15°の緩い傾斜をもっている3層を中心に上下の層へ分布している。遺物のあり方は谷部分への廃棄と考えられる。おそらくこの谷部は当時の遺物廃棄の場であったようである。当然集落は近接しており、本遺跡も斜面上位の台地上がそうであったと推定される。

狸塚30号墳の調査（第20図、23図版）

本古墳は調査区域の南限にかかり、大部分は区域外に延びている。現状は桑畑となり、墳丘は全く確認できなかった。24号墳に近接しており、同様に周溝はブリッジを残し、全周しない。ブリッジは西側を向く。墳形は円墳と考えられ、直径はほぼ10mを測るようだ。

周溝は断面箱形を呈し、底部は平坦になっている。上面幅は約2m、深さは0.8mを測る。遺物は底部から上層まで流れ込んでおり、大半が破片であった。

古 墳 跡

狸塚24号墳の調査（第17図 図版24、25）

この古墳は、狸塚丘陵の下位斜面の微高地上（海拔高63m）に立地している。隣接して29号墳、30号墳跡が検出された。現状は、墳丘の東半は削平され桑畑となり、南側には盗掘杭が侵食しており、破損度の高い古墳であった。調査は道路拡幅にかかる推定周溝部分と墳丘南裾部分を行った。また盗掘杭部分も調査し、事後土盛補修した。調査終了後、工事が実施され調査部分は消滅した。

検出された遺構は東側と西側の周溝、古墳時代和泉期の住居跡がある。また南側には、調査区外に延びる30号墳跡周溝部分が検出された。

墳丘を分断する根切溝は最深部で約2mを測るが、主体部等の施設は認められなかった。主体部は墳丘の西半に遺存していると思われる。

墳形は、残存墳丘の形状、周溝の配置から円墳と考えられる。直形は24mを測り、高さは約3mを測る。側面形は、ほぼ円錐状を呈している。

墳丘構築土（封土）には、暗褐色土ロームを用い、黒色土や黄褐色土を挟んでいる。土中には縄文土器片を含んでいた。また墳丘構築土中位には、石室構築材の調整砕片と思われる白色凝灰質砂岩の薄層が認められた。表層からは須恵器の細片が3個体分出土しており、東側周溝の出土破片と接合している。通例の副葬品とは異っており祭儀的な用途に用いられたのであろう。

周 溝（第18、19図 図版13、14）

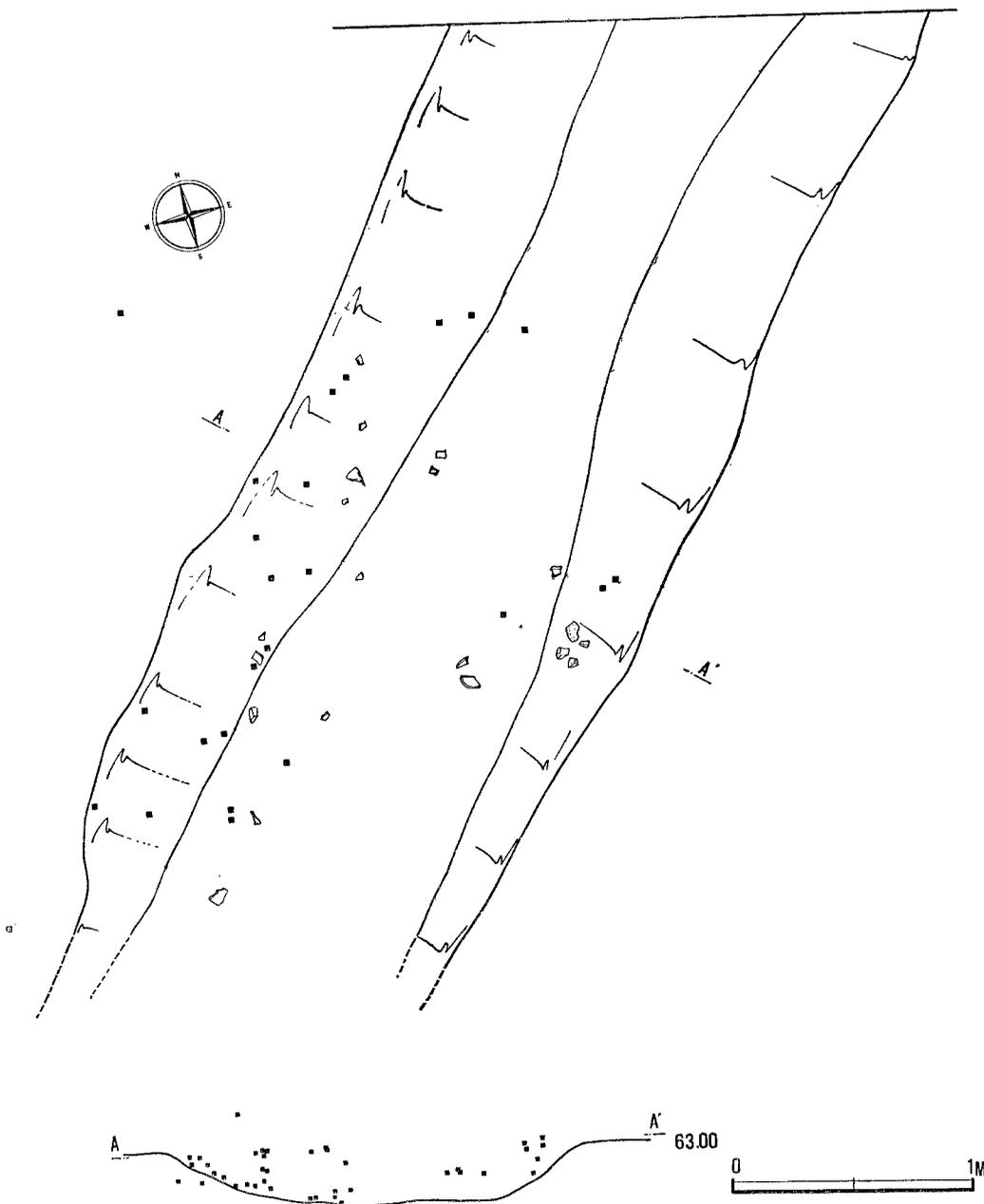
墳丘の東側と西側に検出された。道路下には水道が埋設され調査部分より除いた。

東側部分は削平のため深さ20cm前後しか残っていなかったが、切り通壁面に周溝の断面が確認された。上面幅は2m、底部幅0.8mを測り、箱薬研形を呈している。残存部は南へ4.5m延びたところで消滅してしまうが、本来はさらに南へ延び、たち上がるものと思われる。覆土中から、多く遺物が出土した。

西側部分は良く遺存していた。形態は東側と異り、不整形な薬研形を呈している。幅3m、深さ1.1mを測る。覆土の堆積は自然状態を示し、6～9層中より遺物が出土している。この周溝は南側部分を7.5m検出した。やや直線気味である。この周溝は南端部分がたち上がってしまい、南側にブリッジを残していることが確認できた。たち上がりは40°ほどの緩かな傾斜を持つ。東側と西側の周溝底部高度は東62.8m、西61.9mと約1mの高度差がある。墳丘の構築面は周溝、墳丘下住居跡等の知見から63.00～63.50mであるから、西側の周溝は、相当深く掘削されていることになる。北側部分では緩やかな凹みで観察される。周溝は丘陵より古墳を切り離すように掘削される。

狸塚29号墳（第17図 図版25）

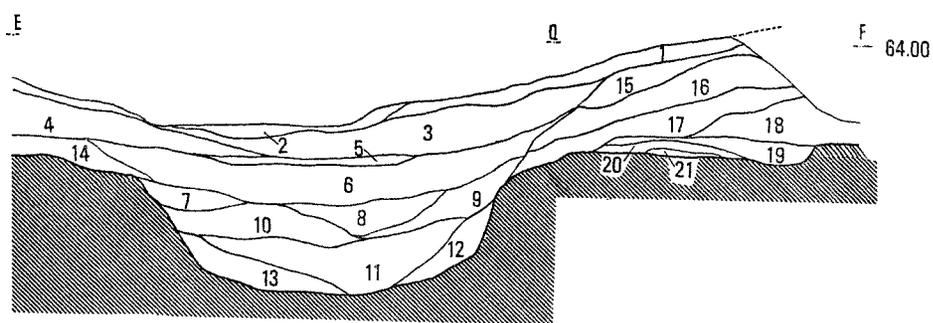
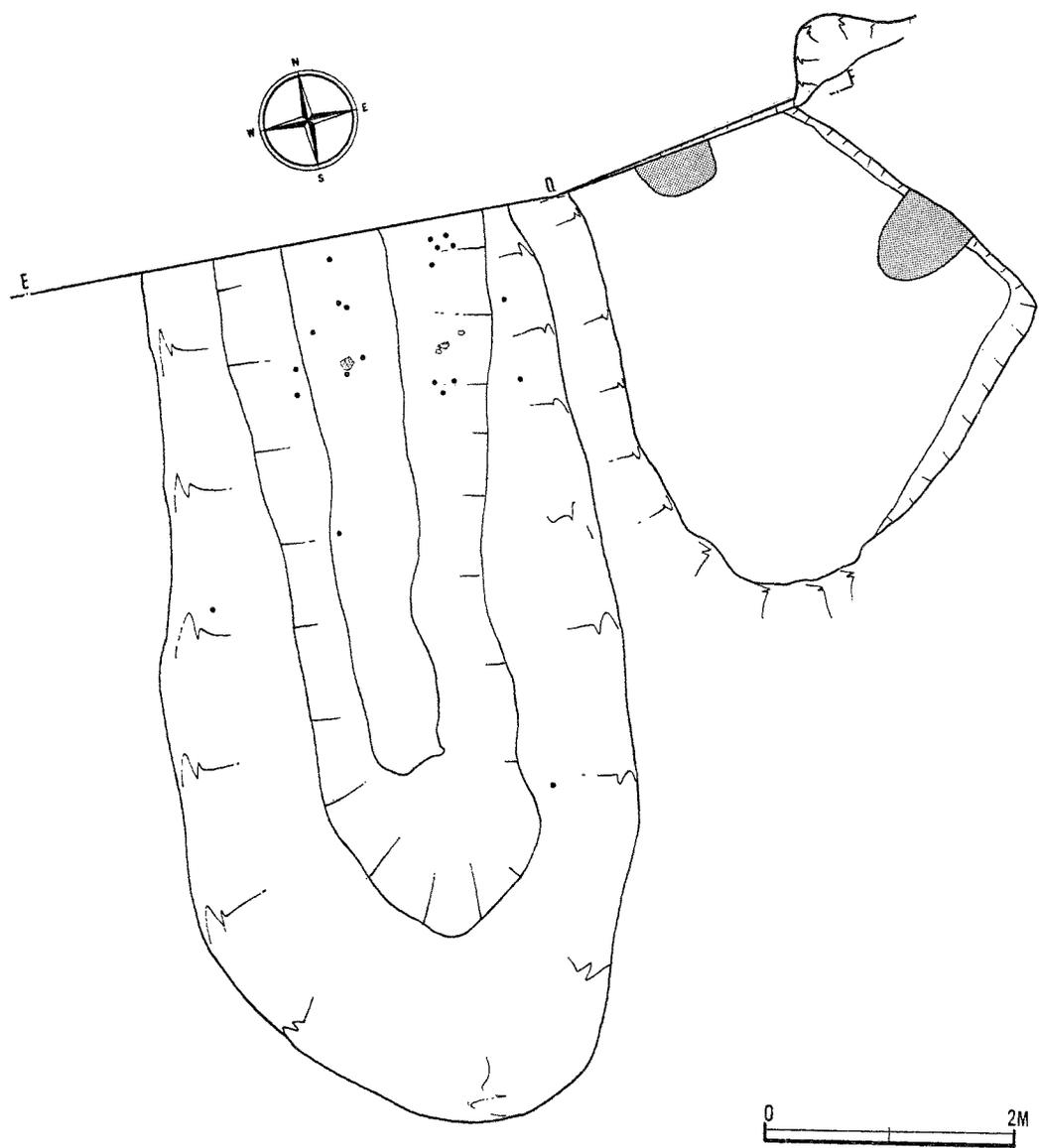
24号墳の北東5mに、自然地形とは明らかに異なる古墳状の隆起が認められた。ほぼ円形を呈し、直径は10mを測る。古墳と推定し、狸塚29号墳とした。山林中であるため、保存状態は良好である。



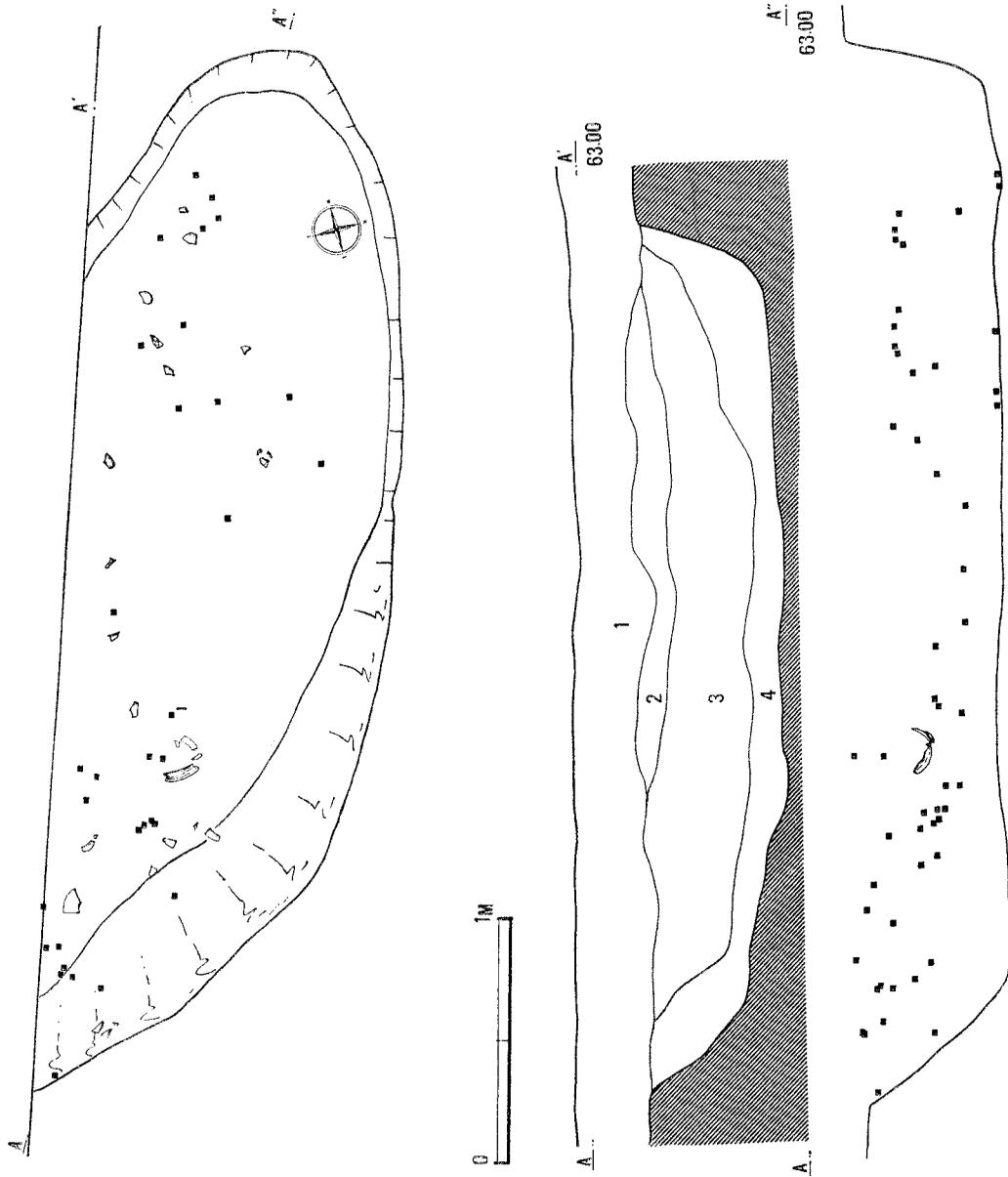
第18図 狸塚24号東側周溝実測図 (1/30)

(狸塚24号墳西側周溝土層断面説明)

- | | |
|------------------------------------|-------------------------------------|
| 1. 腐食土、軟質 | 11. 黒色土、黄色土粗粒を多く含み全体的に明るい。粘性 |
| 2. 腐食土、小径の部分で踏み堅められ硬い | 12. 暗褐色土、砂質、やや青味がかかる。 |
| 3. 暗黄褐色土、白色凝灰質粒子を含んでいる。しまりは良い。粘性 | 13. 暗褐色土、黄褐色粒を含んでいる。部分的に青色の泥土化している。 |
| 4. 黄褐色土、砂質、炭化物粘子を含む。 | 14. 明褐色土、よくしまっている。 |
| 5. 灰褐色土、薄層であるが硬くしまっている。旧小径と考えられる。 | 15. 暗褐色土 |
| 6. 黒色土、粘性、しまりは良い。 | 16. 褐色土、白色凝灰岩片を含む。 |
| 7. 黒色土、粘性、黒色土を主体とするが黄褐色土を多く含んでいる。 | 17. 暗褐色土、黒色斑部分がある。しまりは良い。 |
| 8. 黒色土、粘性、6層より暗く白色凝灰質粒を密に含む | 18. 褐色土。 |
| 9. 黒褐色土 | 19. 褐色土、焼土、炭化物をわずかに含む。 |
| 10. 黒褐色土、炭化物、白色凝灰質粒子を含む。粘性、しまりは良い。 | 20. 赤褐色土、焼土、粒子を多量に含む。 |
| | 21. 焼土、1号住居跡覆土。 |
| | ○ 6~11層は遺物包含層に当る。 |



第19图 狸塚24号墳西側周溝実測図(1/60)



第20図 狸塚30号墳実測図

(塚狸30号古墳周溝実測図土層断面説明)

- | | |
|---|---|
| <p>1. 暗褐色土、耕作土、バサバサしているが水を吸うと強粘性となる。</p> <p>2. 黒褐色土、粘性、しまり無し、ソフト状。わずかにローム分を含み、全体的に強い黒色を呈する。</p> | <p>3. 黒褐色土、粘性、しまり無し、ソフト状、2層よりローム分を多く含むため明るい。</p> <p>4. 黄褐色土、ローム及びロームブロックが主体であり、黒色分を若干含む、粘性、しまり無し。</p> |
|---|---|

住 居 跡

第1号住居跡（第21図）

この部分は調査区の限界に近く、既に土採りのため墳丘が大きく削平されており、調査は古墳の層序と築造面を確認することを目的としていた。しかし、削平面の直下に2カ所の焼土が検出されまた第23図4の高坏が出土したので、にわかに住居跡の可能性強まった。調査は住居と墳丘の関係を握むため、やや区外に広げた。そこで作成した墳丘断面図が第19図である。住居の全掘は調査区外にさらに延びるため実現できなかった。

本住居跡は狸塚24号墳によって住居の西半部を破壊されている。南側も墳丘の構築に伴って削平されている。遺存部も墳丘構築時にやや削平を受け、地均しされているらしく、壁のたち上がりは15~21cmしか遺存していなかった。遺存部は、住居北東コーナー部を中心とする全体の4分の1程であり、きわめて遺存状態の悪い住居跡であった。

カマドを通る住居跡の主軸方向はN—55°—Eである。北壁は2.5m確認でき、さらに区域外に延びる。カマド部分がやや外側に張り出している。西壁は2.5m残存している。たち上がり50°であるが、当初は垂直に近いものと考えられる。床面はローム土層中に作られ、やや軟質であった。壁溝はめぐらされていない。全体として方形プランを呈するようだ。

柱穴は確実なものは確認できなかったが、4個のピットが検出されており、直径20cm—深さ60cm、直径46cm—深さ20cmのどちらかが柱穴に当るのではないかと考えられる。

貯 蔵 穴

東北コーナー部—①と北壁中央部—②とに検出されている。

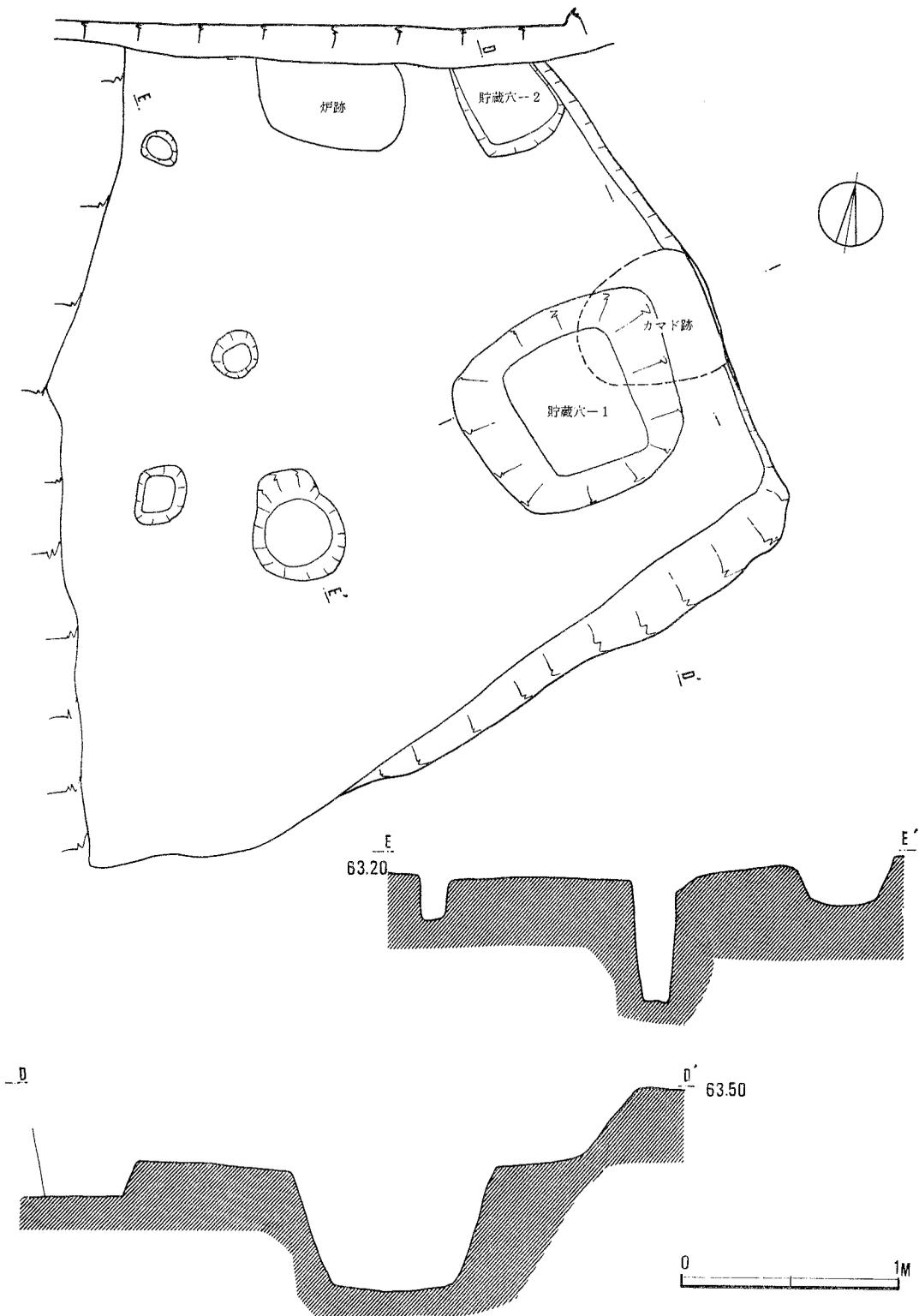
①は住居壁より40cm離れて窺たれており、1×1mの略方形を呈し、深さ60cmを測る。遺物は土器細片が出土したのみであった。覆土は埋設土であった。この貯蔵穴の問題となる点は、カマドとの関係で、両者をクロスさせると、カマドの2分の1程が貯蔵穴上に載ってしまう。貯蔵穴を埋めて、カマドを構築している。なお埋土がしまって凹んだ場所がカマドの前面に当たっている。ここには掻き出した灰の溜った状況が観察された。

②は貯蔵穴というより土器置場という性格を感じさせる浅いピットであった。北側が区域外に延びるので完掘していないが、約50×40cmの長方形を呈し、深さ21cmを測る。この貯蔵穴の南隅に第23図1、5、7の土器が据置かれていた。この土器は本住居廃絶時に伴う確実なものと考えられる。

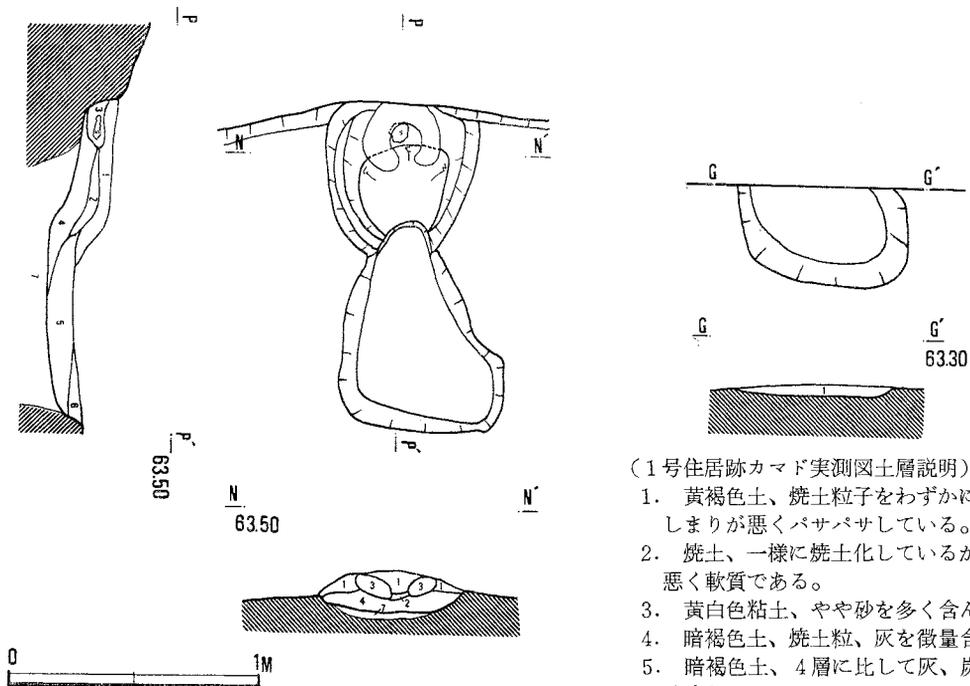
②は①に比して規模が小さく、①と同じ性格の貯蔵穴であったのか問題がある。相互関係は不明であるが、カマドに付属するものであろう。

炉 跡（第22図）

住居跡中央、北壁寄りに検出された。調査区域外に延びるが、約70×50cmの楕円形を呈するようである。断面は皿形を呈し焼土が充満しており、周囲には焼土、灰が分布していた。炉床は強く焼



第21図 第1号住居跡実測図 (1/30)



第22図 第1号住居カマド跡、炉跡実測図

(1号住居跡カマド実測図土層説明)

1. 黄褐色土、焼土粒子をわずかに含む
しまりが悪くバサバサしている。
2. 焼土、一様に焼土化しているがしまりは
悪く軟質である。
3. 黄白色粘土、やや砂を多く含んでいる。
4. 暗褐色土、焼土粒、灰を微量含む
5. 暗褐色土、4層に比して灰、炭化物を多
く含む
6. 1層と同じ
7. 茶褐色土、貯蔵穴覆土、しまりが良く、
若干の土器片を含む

(1号住居跡炉実測図土層説明)

1. 焼土、強く焼土化している。

土化しており、かなり使用が頻繁であったようである。この炉に近接して貯蔵穴②がある。

カマド跡 (第22図)

北壁の東寄りに構築されていた。遺存状態は悪い。全体に楕円形を呈しており、長さ70cm、幅60cmを測る。住居壁にカマド先端部がようやく接しているが、煙道は検出されていない。煙道は未発達であったと考えられる。

袖部分はわずかに確認され、右側は長さ54cm、幅10cmを、左側は長さ56cm、幅16cmを測る。U字形の途切れる形を呈している。遺存高は6cmしかなく、あまり焼けていない。構築土は暗褐色土を用いてつくられている。火床は皿状を呈すがやや平坦である。あまり焼けていない。火床先端部に白色粘土が環状に施設されている。この粘土もあまり焼けていない。環状の中心よりややズレた位置に扁平礫が置かれてあった。この粘土は煙道部に使用されたものであろうか。

カマド前面には浅く、細長い凹みが残る。これは貯蔵穴①の上位にある。長さ90cm、幅70cmを測る。カマドより掻出した灰、焼土、炭化物が認められる。

このカマドは、やや削平されているが、あまり焼土化しておらず頻繁な使用を感じさせない。これらの諸状況は、このカマドが未発達であることなど、初源期的なカマドであることを推定させる。

第1号住居跡の出土遺物

本住居跡出土遺物のうち主なものは、甕—2個、高坏—4個、埴—1個、甌—1個である。この他に縄文、弥生、土師器細片が検出されているが、いずれもわずかであった。遺物はすべて土器であって、石製品等は検出されていない。

これらの土器の中で完形となるものは、甕—1個、高坏—1個、埴—1個、甌—1個である。住居跡の遺存状態を考えると、意外なほど量、器種が豊富であった。時期はすべて和泉期の範疇に入るものと考えられる。ただ埴類は1片も出土していない。

遺存状態について各器種毎に見ることにしたい。

甕 (第23図—1)は体部下半を欠失しているが上半部は完存している。体下半部を除いた状態で使用されたりしく、貯蔵穴②に正立位の状態で見つけていた。

(第23図—6)は土圧で押しつぶされてはいたが完形品である。貯蔵穴②とカマドの間の壁際に横転した状態で床面にはりついていた。

高坏 (第23図—2)は4分の1程の破片で、覆土上層から出土した。(第23図—3)は坏底部が完存する他、口縁の $\frac{1}{2}$ を欠失している。覆土上層より出土している。(第23図—4)は脚が完存している。覆土上層から出土している。住居跡発見の契機となった土器で、立位の状態で見つけた。2、3、4は互いに接合する土器がなかった。これらの高坏と異って9の高坏は完形に復し得た唯一の例である。坏部、脚部、脚裾部と分断され十数片の破片となって検出された。脚裾は床上に置かれた状態を示していた。他の部分片はあまり散乱していない。東方に倒れた状態で見つけた。坏部は上を向いており、内底部はほとんど剥落していた。(雨ざらし状態であったのか)

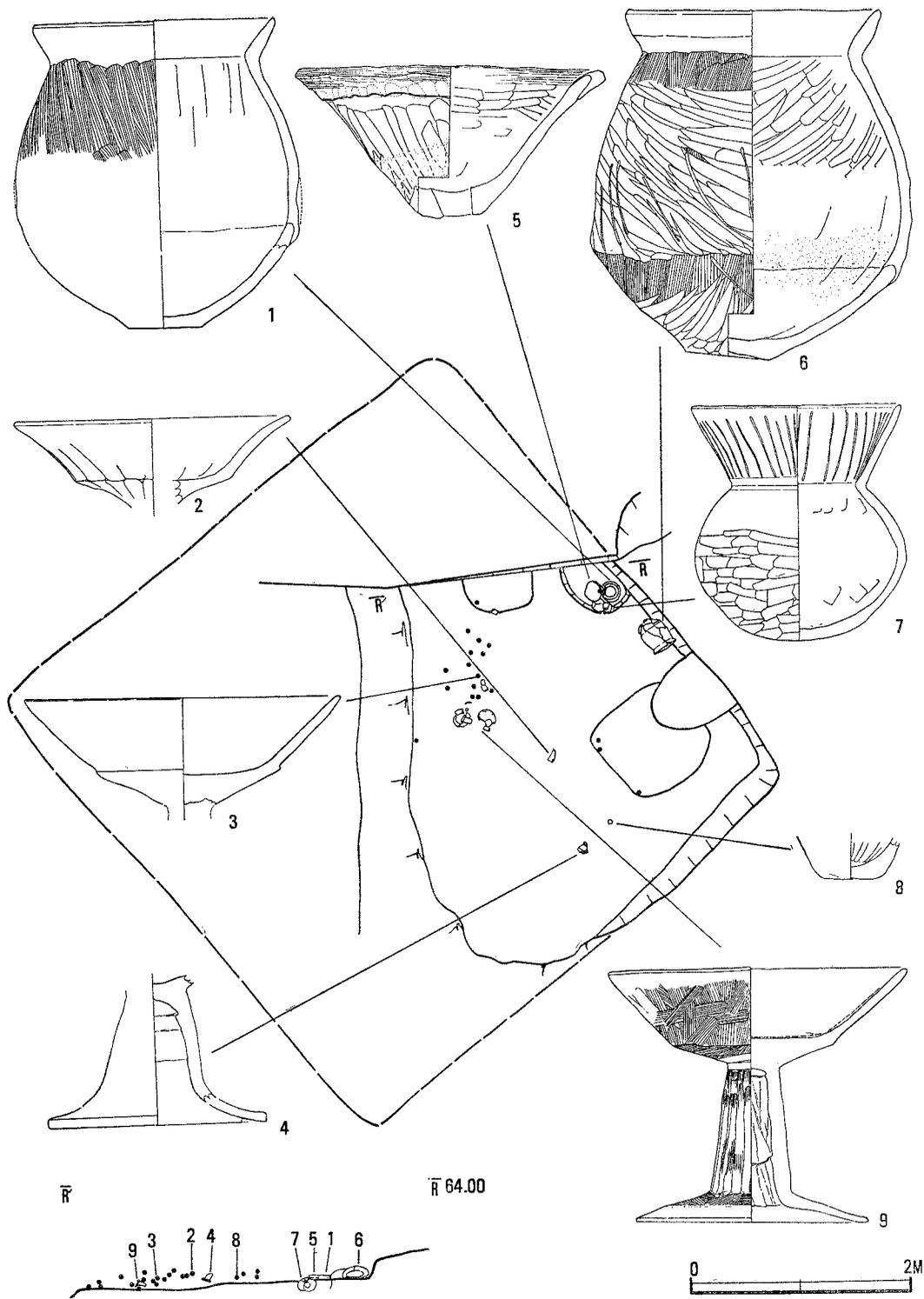
埴 (第23図—7)は口縁を一部欠失するが完形品である。貯蔵穴②、1の南側に横位で見つけていた。体部はつぶれていなかった。

甌 (第23図—5)は完形品であった。貯蔵穴②、1の西側で見つけていた。

1、5、7の土器は貯蔵穴②に一括して据え置かれた状態で見つけており、本住居廃絶時に、日用状態のまま遺棄されたものと考えられる。この貯蔵穴からは他に土器片等は検出されなかった。

遺物(第24図)

1は復合口縁を呈する壺形土器である。口縁部、 $\frac{1}{2}$ の破片である。口径は16.8cmを測る住居跡覆土中からの出土であった。焼成は良好で褐色をしている。胎土は精選されている。器内外面はよく磨かれている。弥生期の土器であろう。2は完形の高坏で、坏部はやや厚く、外面に稜を持ち、大きく外反する。端部は丸い。脚部は、長い脚柱部をもち、裾部は強く外反し、やや内彎気味となって端部で小さく外反する。口径19.6cm、底径15.2cm、器高16.9cmを測る。体部外面はすべてハケ整形が施され、ハケ目痕が明瞭に残る。または坏内部と体部外面には赤彩が施されるが、脚内面には施されない。脚部内面にはしぼり髷が残り、ヘラによるケズリはされていない。坏部と脚部は変換点で接合される。胎土は多くの砂粒を含むが均質で緻密である。焼成は良く堅緻である。3は坏部の

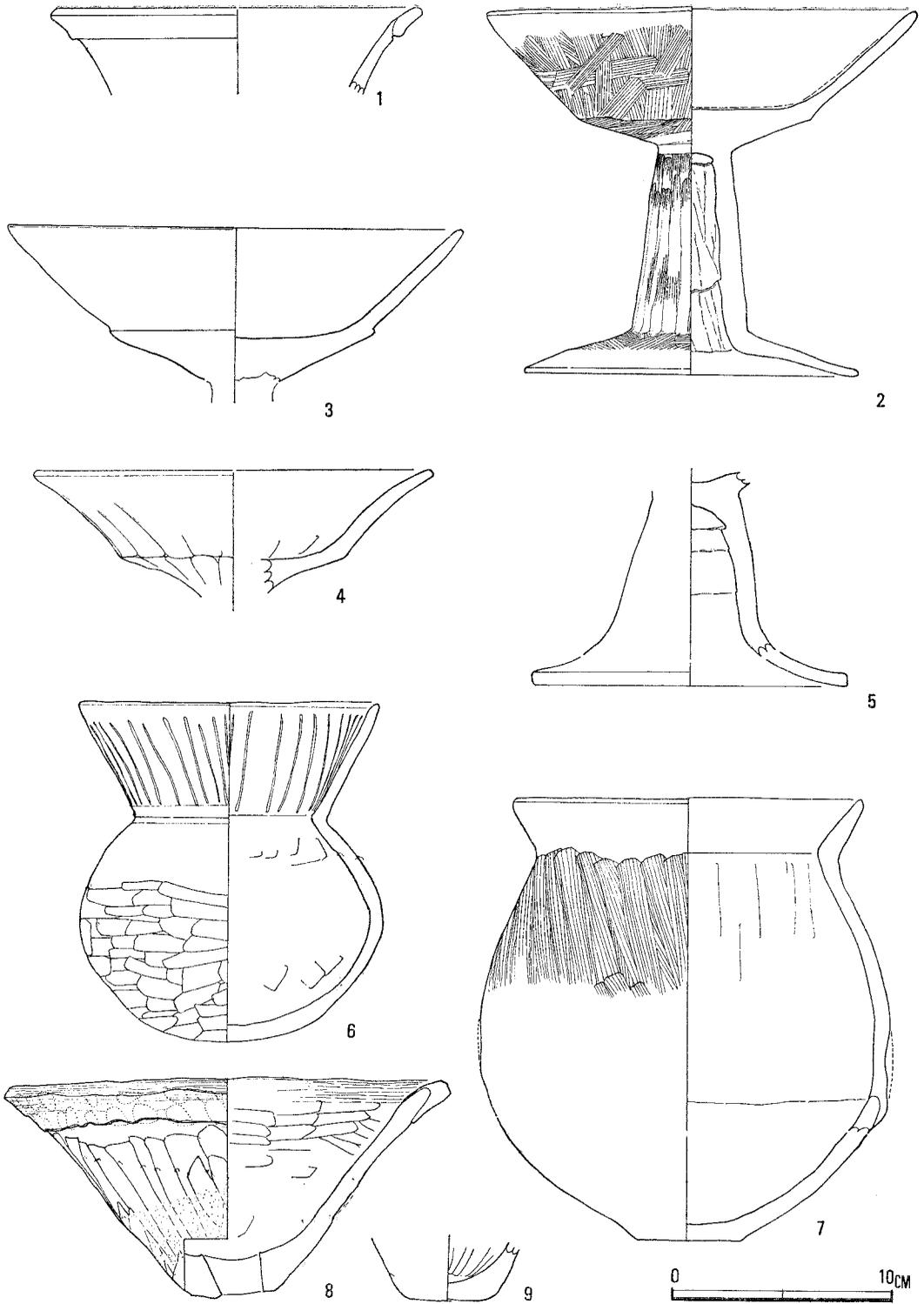


第23图 第1号住居跡遺物出土状態

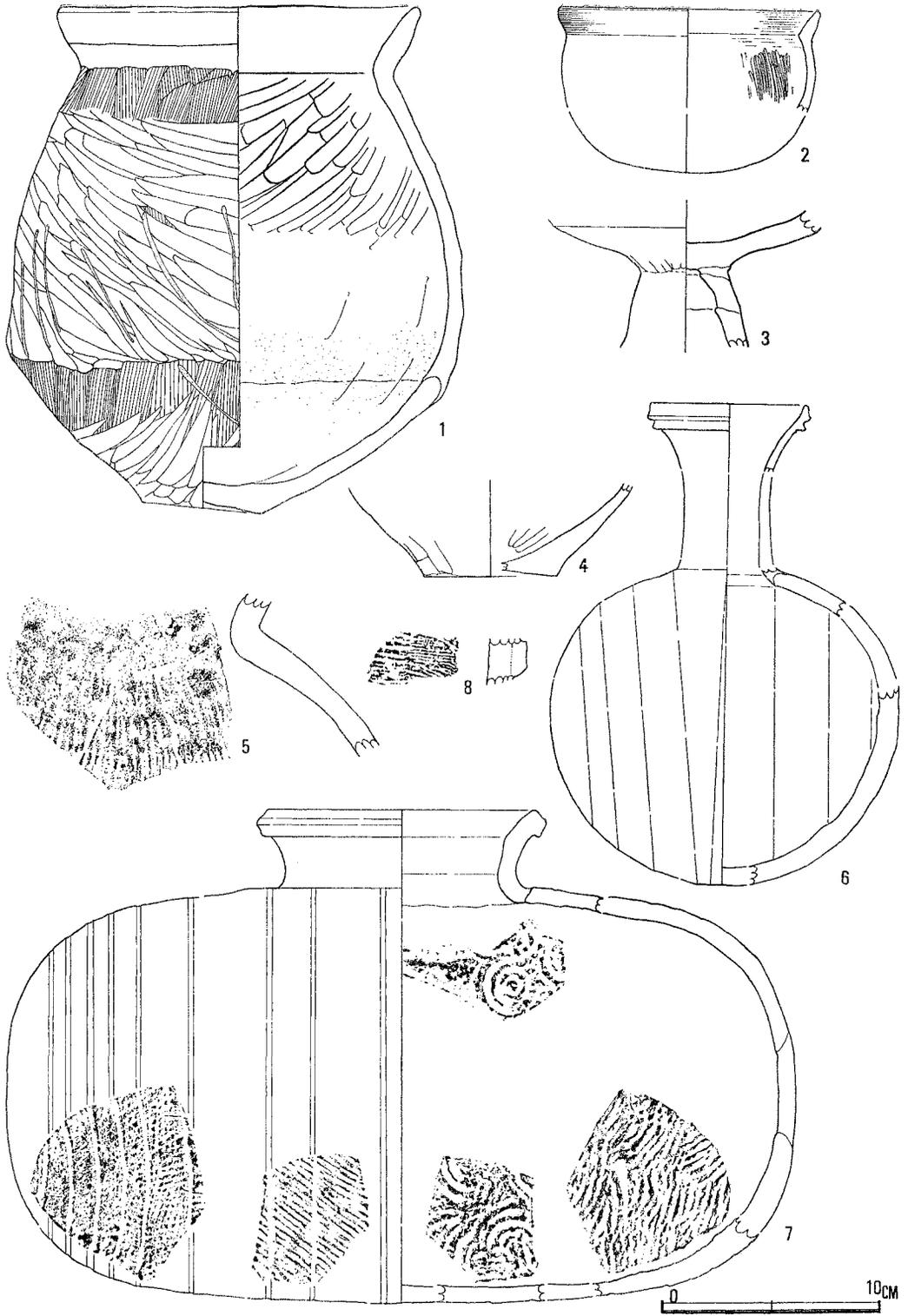
みである。口径は20.8cmを測る。坏部は厚目で外面に緩い段を持ち、大きく外反する。胎土は砂粒を含むが精選される。焼成は不良で軟質、黄褐色をしている。4は、坏部外面に稜を持ち、外彎しながら外反する。口径は18.2cmを測る。外面はヘラケズリ整形後ナデ調整される。ケズリは稜部分に良く残る。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好、褐色をしている。5は脚部のみである。脚部は緩やかに内彎しながら開き、裾部で緩やかに開く。内面には接合痕を明瞭に残している。胎土は精選される。焼成は良好で暗褐色をしている。6は大型の埴である。口径13.8cm、体部径14.0cmと近接し、器高は15.5cmを測る。頸部の屈曲が弱く、口縁は、やや外反する。端部は丸味をもつ。体部はやや扁平気味の球形を呈し丸底である。口縁部は内外面に縦方向の暗文が施されている。体部中位以下はヘラケズリ痕が残る。体部内面は炭化質が付着し暗灰色をしているが、斑状に剝落が進んでいる。胎土は砂粒を多く含むが均質で堅緻である。焼成は良好で、暗黄褐色を呈し、底部に黒斑を有す。

7は底部を打ち欠いて台脚とした甕で口径16.0cm、体部径18.5cmを測る。体部下半に最大径を持つ。口縁は頸部より緩やかに外反する。体部は下半がやや膨む。体部外面はハケ状工具による調整痕を良く残している。内面はよく磨かれており滑沢を有している。また下半に接合痕が見える。体部中位下は器面外周がほとんど剝落している。上位部分もところどころ剝落が認められ、煤の付着も観察される。胎土は細砂を多く含む。焼成は良好で暗赤褐色をしている。

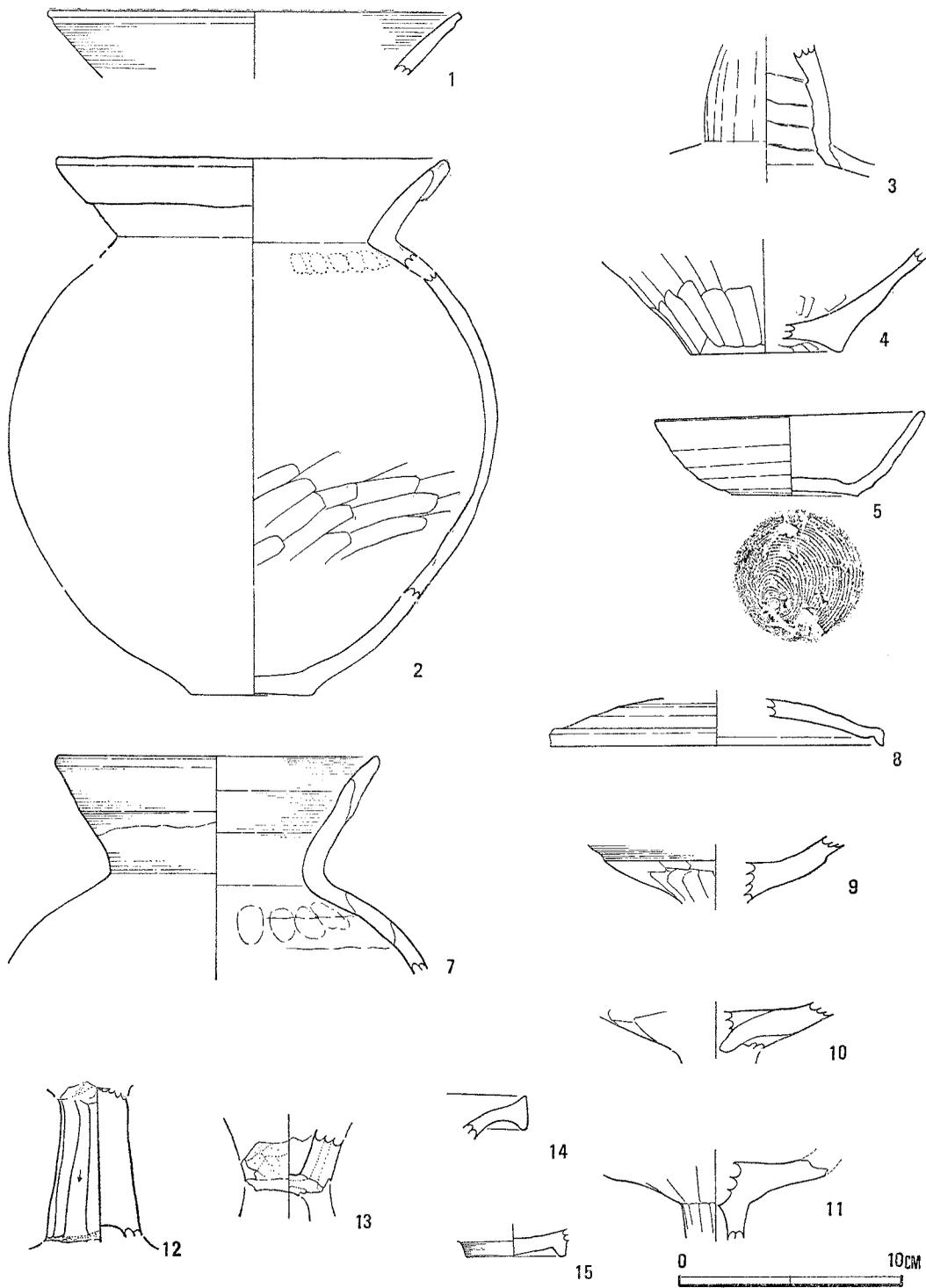
8は完形の甕で、断面形は三角形を呈する。上面形は楕円であり、長径20.4cm、短径19.3cmを測る。器高は10.2cmを測る。口縁は粘土を貼りつけた複合口縁であり、やや外彎する。指圧痕が明瞭に残る。端部は丸味を持った裁頭形をしている。体部は直線的にすぼまる。外面はヘラケズリ整形される。下半外周には甕に懸けた痕と想わる、研磨したような磨滅帯が巡る。底部は一孔が内方に開くように窺たれている。口径は1.9cmを測る。内面は上位にヘラケズリ痕が残るが、他はナデられる。胎土は精選されるがわずかに砂を含む。焼成は良好で黄褐色をしている。一部に黒斑がある。煤はあまり付着していない。9は底部 $\frac{1}{8}$ の小破片で、手捏土器である。胎土は砂粒を含む。焼成は暗褐色を呈すがややもろい。第25図1は完形の甕である。口縁は頸部より外反する。中位で肥厚し、端部は丸味を持つ。口径16.8cm、体部径20.8cm、器高22.8cm、体部径は口径を上まわる。体部は下位が膨らみ、ずっしりした感じである。底部はやや上底を呈している。体部はハケ整形の後にヘラケズリ調整が施され、さらに暗文が描かれている。体部の屈曲部には接合痕が認められる。また器面には炭化物が付着している。体部内面は上半部ヘラケズリ整形され、下半は良くナデられ器面に炭化質の付着が認められる。胎土は精選されるが、微砂を含む。焼成は良好で褐色をしている。



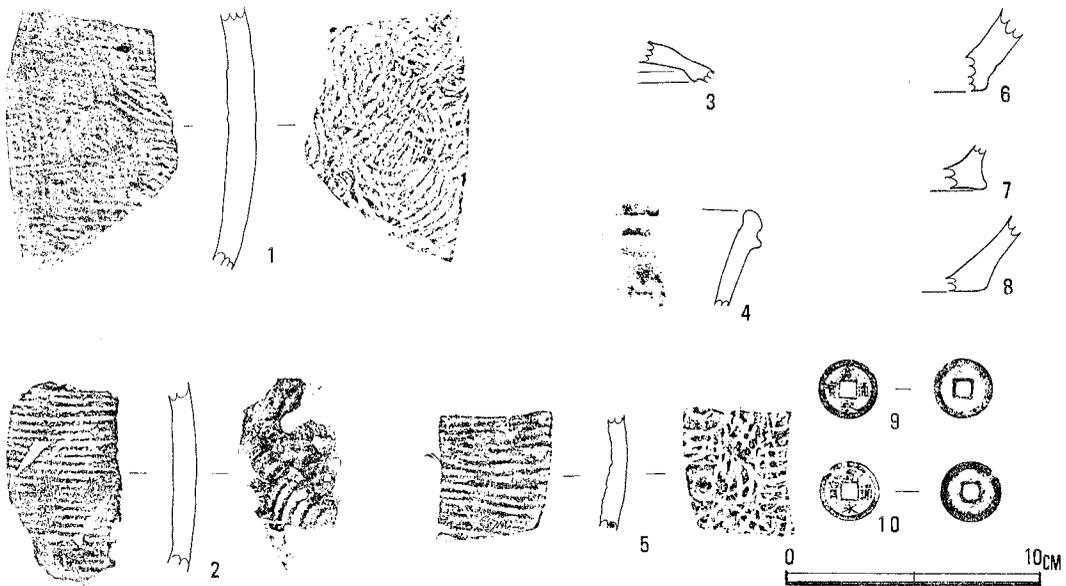
第24图 第1号住居跡出土遺物実測図(1/3)



第25图 第1号住居跡、狹塚24号東西周溝墳丘出土遺物実測図(1/3)



第26図 狸塚30号墳、A18号土壙、覆土出土遺物 (1/3)



第27図 覆土出土、表採遺物実測図(1/3)

狸塚24号墳出土の遺物

墳丘出土の遺物(第25図5、6、7)

5は須恵器大甕の頸部破片である。さらに4片の細片に分かれており、3片が周溝より出土している。外面は平行叩き、頸部と内面はよくナデられる。胎土は小石を含むが緻密である。焼成は良好で青灰色をしている。6は8片の破片より復元した長頸瓶である。口径は7.2cmを測る。口縁は頸部より直立気味に延び、上位で緩やかに外反する。三角形の凸帯がめぐらされ、端部は上方へつまみ出される。体部は扁球形を呈する。胎土は長石を含むが、やや粗粒である。焼成良好で灰褐色をしている。7は6片の破片より復元した横瓶である。口縁部は3分の1を欠失する。墳丘と西側周溝より検出された。口径は12.4cmを測る。頸部より緩やかに外反し、端部が肥厚する。体部は円柱状呈し、外面の平行叩き後18本の圏線が施される。内面は同心円叩きが施される。胎土は小石を含み粗粒である。焼成は良好で黒灰色をしている。

周溝出土の遺物(第25図2～4、8)

西側より出土した遺物は細片で図示できるものはない。墳丘中より出土した須恵器と接合するものがあつた。

東側も破片が多く、図示できるものは少い。2は壺の4分の1片である。口径は13.6cmを測る。わずかに屈曲する頸部より口縁は外反する。体部は外面をナデ、内面をヘラ磨きされる。胎土は微砂を含む焼成は良好で暗褐色をしている。3は坏底部の完存する高坏である。坏部外面には弱い稜を持つ。脚部との接合は明瞭である。脚部は接合部より大きく外反する。内面は粘土紐の接合痕が明瞭に残る。全体的に風化が進み砂粒が浮く。焼成は良好で黄褐色をしている。4は甕の底部破片

である。上底を呈し、胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好で赤褐色をしている。8は円筒埴輪の凸帯部分である。凸帯は、中央のやや凹む台形を呈している。内面には荒いハケ目調整が施される。胎土は小石を含むが緻密である。焼成は良く黄褐色をしている。埴輪片は唯一の出土であった。

狸塚30号墳出土遺物（第26図1～5）

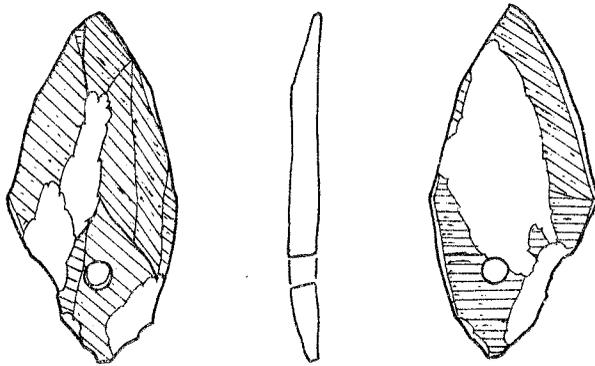
本古墳の出土遺物はすべて周溝からの検出である。1は甕の口縁部片で2分の1残る。口径は18.6cmを測る。口縁端部はややつまみ出される。ヨコナデが明瞭である。胎土は精選されている。焼成は良好で黒色をしている。2は複合口縁の壺で、口縁部は4分の1、体部は2分の1現存する。口径17.4cm、体部径は22.1cmを測る。口縁はくの字状に屈曲する頸部より、緩やかに外反する。端部に幅広い粘土紐を貼りつけて複合口縁としている。接合痕は明瞭である。体部はナデ調整されるが内面にはヘラケズリ痕を残している。胎土はやや砂粒を含んでいる。焼成は良好暗褐色をしている。体部に黒斑を持つ。3は高坏脚部、2分の1破片である。脚部は内彎しながら垂下し、坏部で大きく外反する。外面にヘラ整形痕を残し、内面には粘土紐接合痕が明瞭に残る。胎土は細砂を含むが精選される。焼成は良好で赤褐色をしている。4は甕の底部片である。3分の1片である。ヘラケズリ痕が明瞭に残る。胎土は砂を多く含む。焼成は良好で暗褐色をしている。5は須恵器坏で体部は4分の3を欠失している。口径12.2cm、底径5.7cm、器高3.7cmを測る。坏内面底部周辺は強いナデ痕が残り、体部は緩やかに内彎しながら外反する。口縁端部は丸味を持つ。底部は回転糸切痕を残している。胎土は緻密であるが小石を含んでいる。焼成は良好で焼きしまる。淡灰色をしている。

その他の出土遺物（第26図7～15）

7は、A-18号土壙覆土より出土した。口頸部2分の1の破片であった。口径は14.2cmを測る。口縁は頸部より大きく外反する。中位でやや肥厚するが、ここは接合部に当る。端部はやや器厚を減じ、つまみ出されたようである。体部はナデ肩を呈している。口縁部は接合痕とヨコナデが明瞭である。胎土は砂粒を多く含むが緻密である。焼成は良好で黄褐色をしている。8はA区より表採した須恵器蓋で3分の1の破片であった。口径は14.8cmを測る。端部がやや下外方へつまみ出される。胎土は緻密、砂をわずかに含む。淡灰色をしている。9はA区覆土より出土した高坏3分の1破片である。坏部外面に緩い段を持つ。胎土は砂粒を含む。焼成は良好で褐色をしている。10は狸塚24号墳丘封土より検出された高坏で4分の1破片であった。外面には、ヘラケズリ痕が残る。また接合痕が明瞭であった。胎土は砂をわずかに含んでいる。焼成は良好で赤褐色をしている。11はD区2Tより出土した高坏で2分の1破片であった。坏底部は円盤状の粘土板を用い口縁部を接合している。脚部は坏部に貼りつけているようであるが明瞭でない。器面はやや荒れているが、ヘラケズリ痕が認められる。胎土は砂粒を含む。焼成は良好で褐色をしている。12は盤の脚部であろう。縦に2分していた。中実で、外面はヘラケズリ痕が明瞭に残る。胎土は砂を含むが緻密であった。焼成は良好であり、黄褐色をしている。13は底部付近と思われるが器形ははっきりしない。器面は剥落が著しい。断面は内外層が紫紅色を、中層は白灰色をしている。胎土は微砂を含み、緻密である。14は調査区外表採の灰釉陶器である。胎土は白灰色で細砂を含んでいる。15は調査区外表採

の陶磁器で底部のみであった。高台部は削り出しており、内面は朽葉色の釉が施されている。胎土は乳白色を呈し精選され堅緻である。第27図1はD区2 Tより出土した須恵器甕破片である。外面は平行刻目の工具による叩きが重複して行なわれ^(註)る。内面も外面に相当する同心円の当て具痕が残る。胎土は中粒の砂を多く含んでいる。焼成は良好で黒灰色をしている。2はD区7 Tより出土した。内面の当て具痕はナデ消されている。胎土は中粒の砂、小石を含む、焼成は良好で青灰色をしている。3～9は調査区より表採された遺物である。3は、退化したかえりを持つ須恵器蓋である。4は口縁に鈍い凸帯を持つ小型器種の口縁部である。胎土は精選されており、焼成は良好淡青灰色をしている。5は4に近似した胎土と焼成をしている体部破片である。6～8は土師器底部破片である。どれも4分の1以下の小破片であった。9、10は寛永通宝である。10は狸塚24号墳周溝上位より検出された。

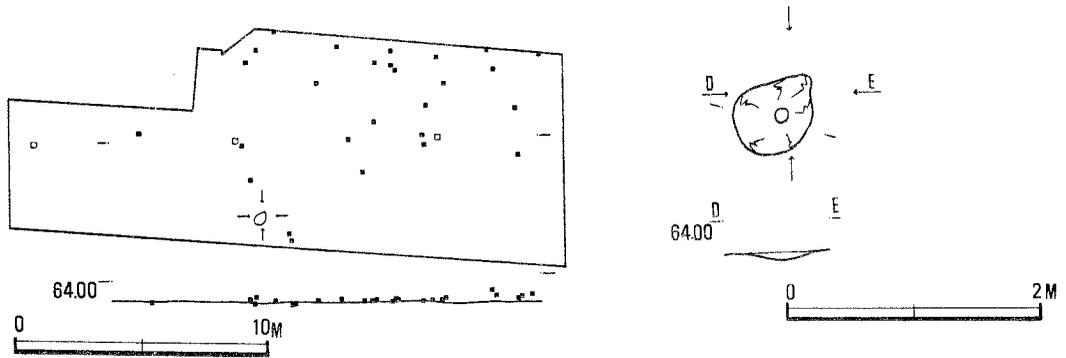
註 以下文中の番号は本図（第27図）のもの



第28図 A区出土遺物実測図(1/1)

石製模造品（第28図）

この剣形石製模造品はA区東隅、狸塚25号墳に近接して検出された。濃緑色の滑石を用いており、整形剝離が表裏面に、研磨が及ぶことなく残っている。左側下方の側面がやや破損する他、形態を良く残している。表側だけを創出面としている。研磨は荒い砥石を用いて行なわれており、表側の稜線の創出には8回以上研磨面を移動している。そして周囲を10面、裏面を2面研磨している長さ4.6cm、幅2.2cm、厚さ0.4cmを測る。



第29図 D区縄文土器出土状態(1/300) 炉跡実測図(1/60)

D区出土の縄文土器(第29図)

D区杭7～9付近に散布する。土器は早期擦糸文土器を主体とし条痕文土器等が混在していた。調査以前より同区から表採されていた。狸塚24号墳の造営、周辺の開墾と状況はあまり良くない。出土土器はすべて細片で接合例はない。これらの土器の出土状態は古墳の築造や後世のカク乱を考慮にしても土器廃棄時の状況に近いと考えられる。

土器廃棄の状況は、A～Eのパターンに分類されており本遺跡のあり方はパターンEに相当される。それは、「遺跡内において、とくに限られた場所または範囲から集中的に出土するというのではなく、どこはなしに土器片が散発的に発見されるような場所を便宜的に一括する。草創期、早期の開地遺跡は殆んどこのパターンである。」と述べられている。

また炉跡が検出されているが、覆土が薄いため、擦糸文土器期のものが判定できない。

註 小林達雄、1974『縄文世界における土器の廃棄について』「国史学 第93号」

縄文土器(第30、31、32図)

第I群土器(1～51)

a類(1)

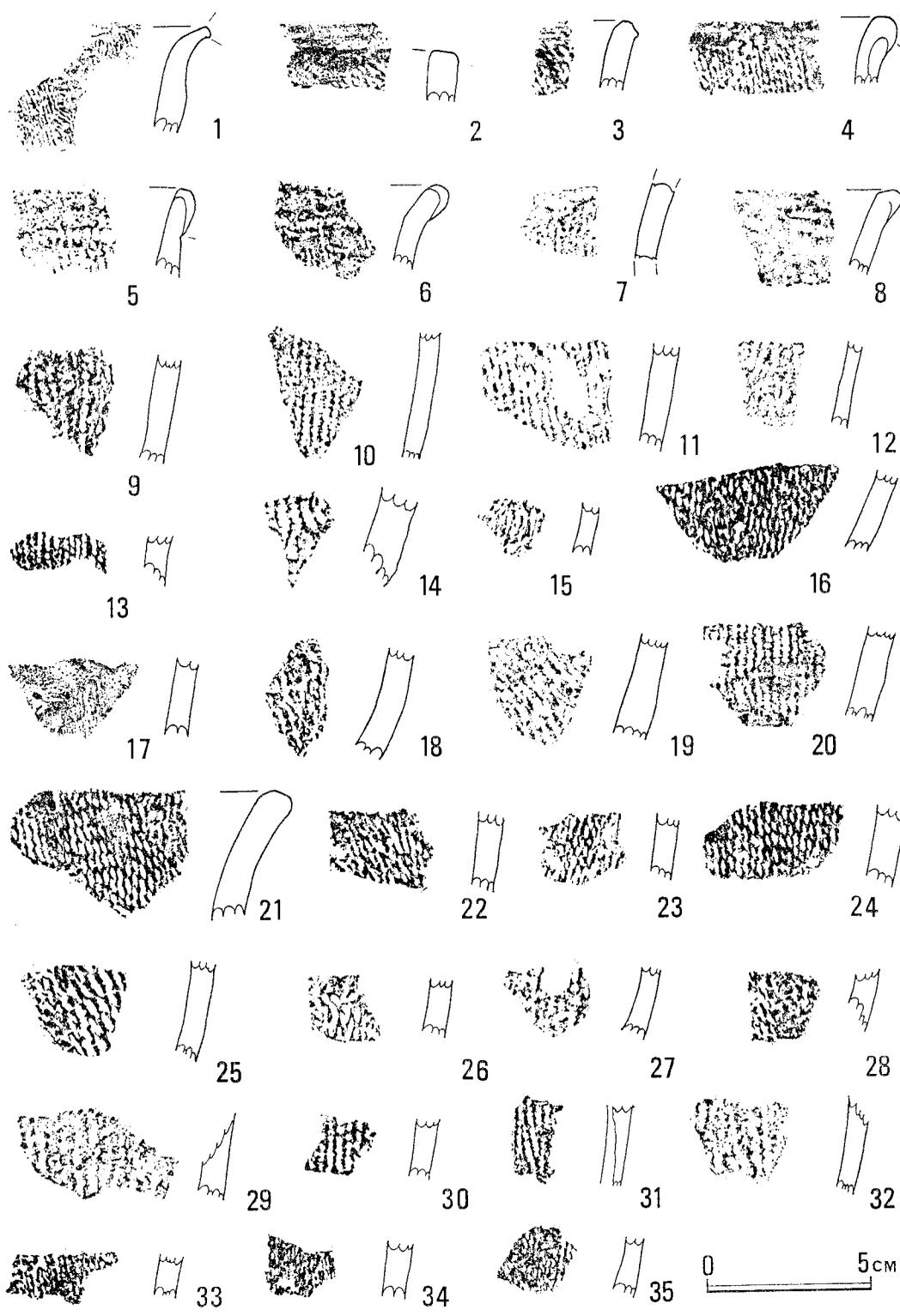
1は、口縁部破片である。体部から口縁部へ器厚を減じ、大きく外反している。体部の厚さは8ミリを測る。口唇はやや肥厚している。口唇部と口唇部以下は擦糸文が施文される。擦糸文は交差し合っており、施文されない部分もある。原体はRの擦糸文を軸に右巻きにしている。擦糸は細く1～1.5ミリ程である。焼成良好で暗褐色をしている。胎土は1～2ミリの小石を含む。

b類(2～20)

2は、口縁部破片である。口唇は裁頭形を呈しているが、角がとれて丸味を持っている。器厚は8ミリを測る。口縁より緩やかに外反している。口唇直下より擦糸文が施文される。原体はRの擦糸を軸に右巻きにしている。焼成は良好で暗褐色をしている。胎土は細砂を多く含む。3は口縁部破片である。口唇は丸味を持っている。器厚は7ミリを測る。口縁直下より擦糸文が施文される。原

体はRの捺糸を軸に左巻きにしている。焼成は良好で赤褐色をしている。胎土は細砂を含む。4は、口縁部破片である。口唇は肥厚し、丸味を持つ。器厚は8ミリを測る。肥厚部分より捺糸文が施文される。原体はRの捺糸を軸に左巻きにしている。焼成は良好で暗赤褐色をしている。胎土は細砂を多く含む。器面の小剥落が見られるが器内面、外面とも炭化質が付着している。5は、口縁部破片である。器厚は7ミリを測る。口唇部は肥厚するが、その度合はあまり大きくない。端部は平らである。口唇部分は無文となっており、その直下より捺糸文が施文される。この施文の始発部分は強く押圧されており、節がくっきりと陰刻されている。原体はRの捺糸を用いている。焼成は良好で暗褐色をしている。胎土は1～2ミリの砂を多く含む。6は、口縁部破片である。器厚は6ミリを測る。肥厚する部分で外反している。端部は丸味を持っている。肥厚部分は無文でその直下より施文される。5と同様施文の始発部分は強く押圧され、節がくっきりと陰刻されている。また捺糸文は部分的に磨り消されている。原体はRの捺糸を軸に左巻きにしている。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は最大3ミリの小石を含むが細砂を主体としている。7は、口縁部破片であるが口唇部を欠失している。器厚は7ミリを測る。捺糸文が施文される。原体は判然としない。焼成は良好で暗赤褐色をしている。胎土は精選され緻密である。なお下位は接合面で折損している。

8は、口縁部破片である。器厚は6ミリを測る。口唇は肥厚するがその度合はあまり大きくない。口唇は内そぎ状を呈している。器面は良く磨かれており無文のままである。焼成は良好で暗赤褐色をしている。胎土は1ミリ程の砂を含む。9は、底部に近い胴部の破片である。施文様ははっきりしないが捺糸文であろう。原体はLであろう。焼成は良好で暗赤褐色をしている。胎土は0.7～1ミリの細砂を多く含む、外面は細かに剥落している。内面には炭化物が付着している。10は、縄文が施文される。原体は2段の捺糸RLを用いている。焼成は良好で暗赤褐色をしている。胎土は1ミリの砂を含むが精選されている。11は、縄文が施文される。原体は2段の捺糸LRを用いている。焼成は良好で暗黄褐色をしている。胎土は細砂を含む。器面がやや荒れている。12は、器厚4ミリを測り、本群の中ではもっとも薄い。捺糸文が施文される。原体はLの捺糸を用いている。焼成は良好で暗褐色をしている。胎土は細砂を多く含む。13は、器厚7ミリを測る。捺糸文が施文される。原体はRの捺糸を用いている。強く押圧され、節がくっきりと陰刻される。焼成は良好で赤褐色をしている。胎土は小石、細砂を含むが緻密である。14は、縄文が施文される。原体は2段の捺糸LRを用いている。焼成は良好で赤褐色をしている。胎土は1～1.5ミリの砂、長石粒子を多く混じえている。15は、捺糸文が施文される。原体は節が大きく流れて判然としないがLの捺糸であろう。焼成は良好で暗茶褐色をしている。胎土は1ミリ大の砂粒を多く含む。16は、捺糸文が施文される。原体はRの捺糸を用いている。焼成は良好で暗茶褐色をしている。胎土は2～3ミリの小石を混じえ、細砂を多く含む。17は、無文である。焼成は良好で赤褐色をしている。胎土は細砂を多く含む。18は、底部に近い胴部破片である。捺糸文が施される。原体は判然としない。焼成は良好で暗赤褐色をしている。胎土は長石粒子等の細砂を多く含む。器面の粗れが著るしい。19は、底部に近い胴部破片である。捺糸文が施される。原体はLの捺糸であろう。焼成は良好で茶褐色をしている。胎土は細砂を含む。内面は良く磨かれており炭化質が付着している。20は、底部に近い胴部破片であ



第30图 繩文土器実測图 (1)

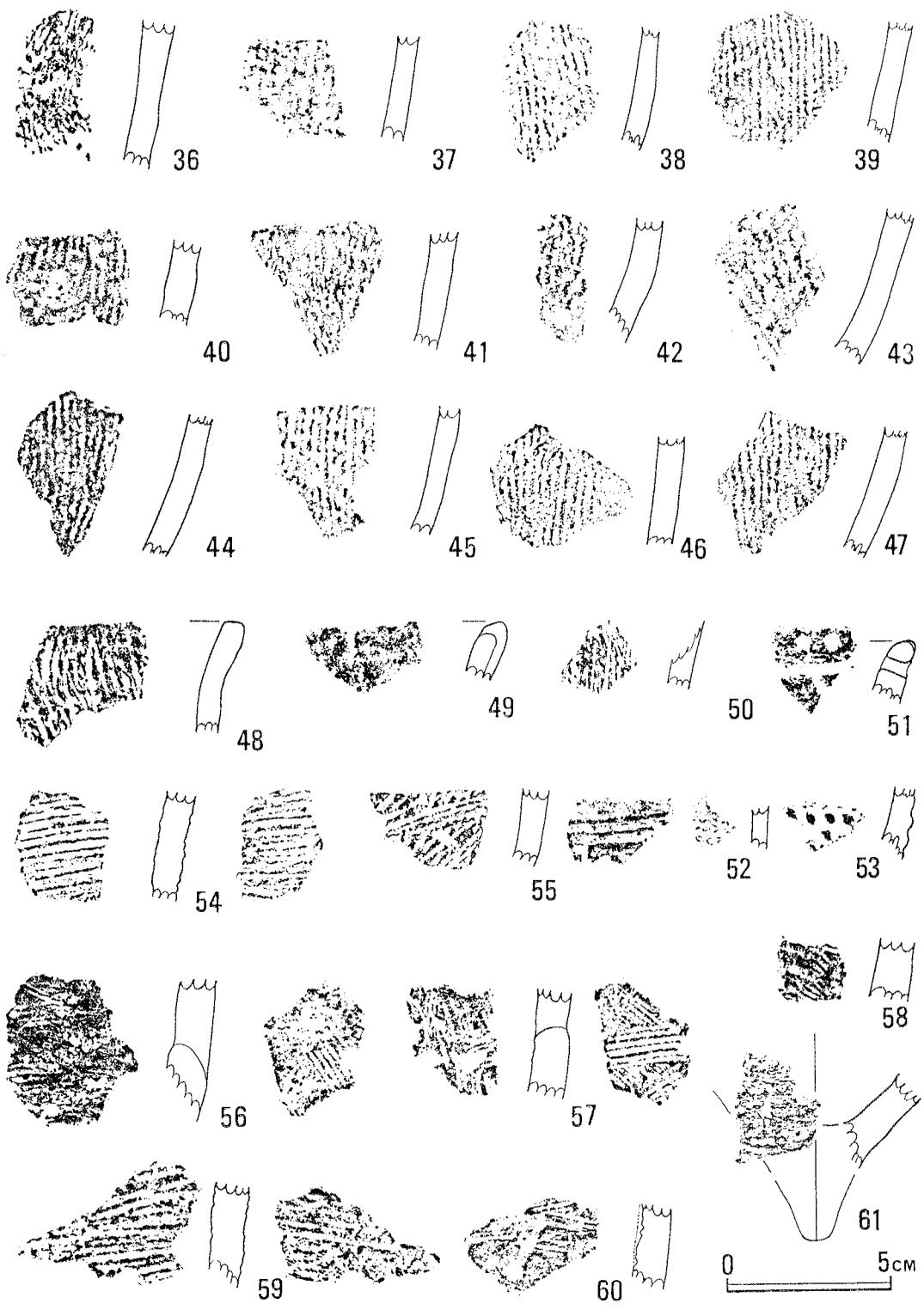
る。縄文が施文される。原体は2段の撚糸RLを用いている。施文の中継点に明瞭に残る。焼成は良好で暗茶褐色をしている。胎土は本群中ではもっとも精選されている。内面は良く磨かれている。下位は接合面で折損している。

c 類 (21~47)

21は、口縁部の破片である。口縁は緩やかに外反している。口唇は平坦で丸味を持っている。撚糸文が施文される。原体はRのやや太い撚糸を軸に左巻きにしている。押圧は強く、節がくっきりと陰刻される。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は緻密であるが2~3ミリの小石、砂を多く含む。外面には炭化物が付着している。22は、撚糸文が施文される。原体はRの撚糸を用いている。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は2~3ミリの小石を混じえ、細砂、長石粒子を多く含む。23は、撚糸文が施文される。原体はRの撚糸を用いている。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は細砂長石粒子を多量に含む。24は、撚糸文が施文される。原体はRの撚糸を用いている。押圧は強く節はくっきりと陰刻される。焼成は良好で暗黄褐色をしている。胎土は2~3ミリの小石を混じえ、細砂長石粒子を多く含んでいる。25は、撚糸文が施文される。原体はRのやや太い撚糸を用いている。押圧は強く節はくっきりと陰刻される。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は1~2ミリの小石を混じえ、細砂長石粒子を多く含む。内外面とも炭化物が付着している。

26は、撚糸文が施文される。原体はRの撚糸を軸に左巻きにしていることが、施文の中継点よりわかる。焼成は良好で暗黄褐色をしている。胎土は細砂を含む。内面には炭化質が付着している。27は、撚糸文が施文される。原体はLの撚糸であろう。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は細砂長石粒子を含む。28は、撚糸が施文される。原体はRの撚糸を用いている。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は1~2ミリの小石を混じえ、細砂を多く含む。29は、撚糸文が施文される。原体はRの撚糸であろう。焼成は良好で暗褐色をしている。胎土は細砂を含む。

31は、縄文が施文される。原体は判然としない。焼成は良好で灰黒色をしている。胎土は1~2ミリの小石、長石粒子を多く含む。外面には炭化物が付着している。32は、口縁付近の破片である。縄文が施文される。原体はRの撚糸を用いている。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は精選されている。内面は良く磨かれる。33は、撚糸文が施文される。原体はRの撚糸を用いている。以下の34、35と同様1.3~1ミリ前後の細い撚糸を用いている。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は細砂を多く含む。34は、撚糸文が施文される。原体はLの細い撚糸を用いている。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は細砂を多く含む。内面には炭化質が付着している。35は、撚糸文が施文される。原体はRの細い撚糸を用いている。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は1~2ミリの小石を混じえ、長石粒子を多く含む。36は、底部に近い破片である。撚糸文が施文される。原体はRの撚糸を用いている。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は最大8ミリの小石をはじめ砂を多く含む。内面には炭化質が付着している。37は、縄文が施文される。原体は判然としない。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は細砂を多く含む。38は、底部に近い破片である。撚糸文が施文される。原体はRの撚糸を用いている。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は細砂を多く含む。内面には



第31図 縄文土器実測図 (2)

炭化質が付着している。39は、縄文が施文される。原体は2段の撚糸LRを用いている。焼成は良好で暗黄褐色をしている。胎土は精選され微砂を含む。内面には炭化質が付着している。40は、撚糸文が施文される。原体は判然としない。焼成は良好で黄褐色をしており、良く焼きしまる。胎土は精選される。器面の小剥落が著るしい。また上位は接合面で折損している。41は、撚糸文が施文される。原体はRの撚糸を用いている。撚りは弱く押圧も浅い。焼成は良好で赤褐色をしている。胎土は細砂、長石粒子を含む。42は、底部に近い破片である。縄文が施文される。原体は2段の撚糸LRを用いている。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は1～2ミリの小石を含む。外面は炭化物が付着している。内面は良く磨かれている。43は、底部に近い破片である。撚糸文が施文される。原体は判然としない。焼成は良好で黄褐色をしており、良く焼きしまる。胎土は精選され緻密である。器面の小剥落が著るしい。40と同一個体であろう。44は、底部に近い破片である。縄文が施文される。原体は2段の撚糸RLを用いている。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は細砂を含む。内外面とも炭化物が付着している。45は、底部に近い破片である。縄文が施文される。原体は2段の撚糸LRを用いている。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は小石を含むが細砂を主体としている。外面には炭化物が付着している。46は、縄文が施文される。原体は2段の撚糸LRを用いている。焼成は良好で暗黄褐色をしている。胎土は細砂、長石粒子を多量に含む。47は、底部に近い破片である。縄文が施文される。原体は2段の撚糸LRを用いている。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は2～3ミリの小石を混じえる。外面には炭化物が付着している。

d 類 (48～51)

48は、口縁部破片である。やや外反している。器厚は7～8ミリを測る。口唇は平坦で丸味をもつ。施文は口唇直下よりなされる。文様は絡条体を引きづっているようであり、節が大きく流れている。原体はLの撚糸を用いている。焼成は良好で赤褐色をしている。胎土は1～2ミリ前後の砂を多く含む。49は、口縁部の破片である。器厚は9ミリを測る。口唇はやや尖る。無文である。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は細砂を多く含む。なお、接合痕が明瞭である。50は、撚糸文を施文後沈線が施されている。原体はRの撚糸を用いている。焼成は良好で暗黄褐色をしている。胎土は細砂を含む。51は、口縁部の破片である。器厚は9ミリを測る。口唇はやや内削ぎ状を呈した円頭形をしている。口唇には丸棒状工具によるキザミ目が、口辺には口縁に平行する沈線と、この沈線より派生する沈線が施されている。焼成は良好で暗赤褐色をしている。胎土は長石粒子を多量に含む。なお補修孔が貫通している。

第Ⅱ群土器 (52、53)

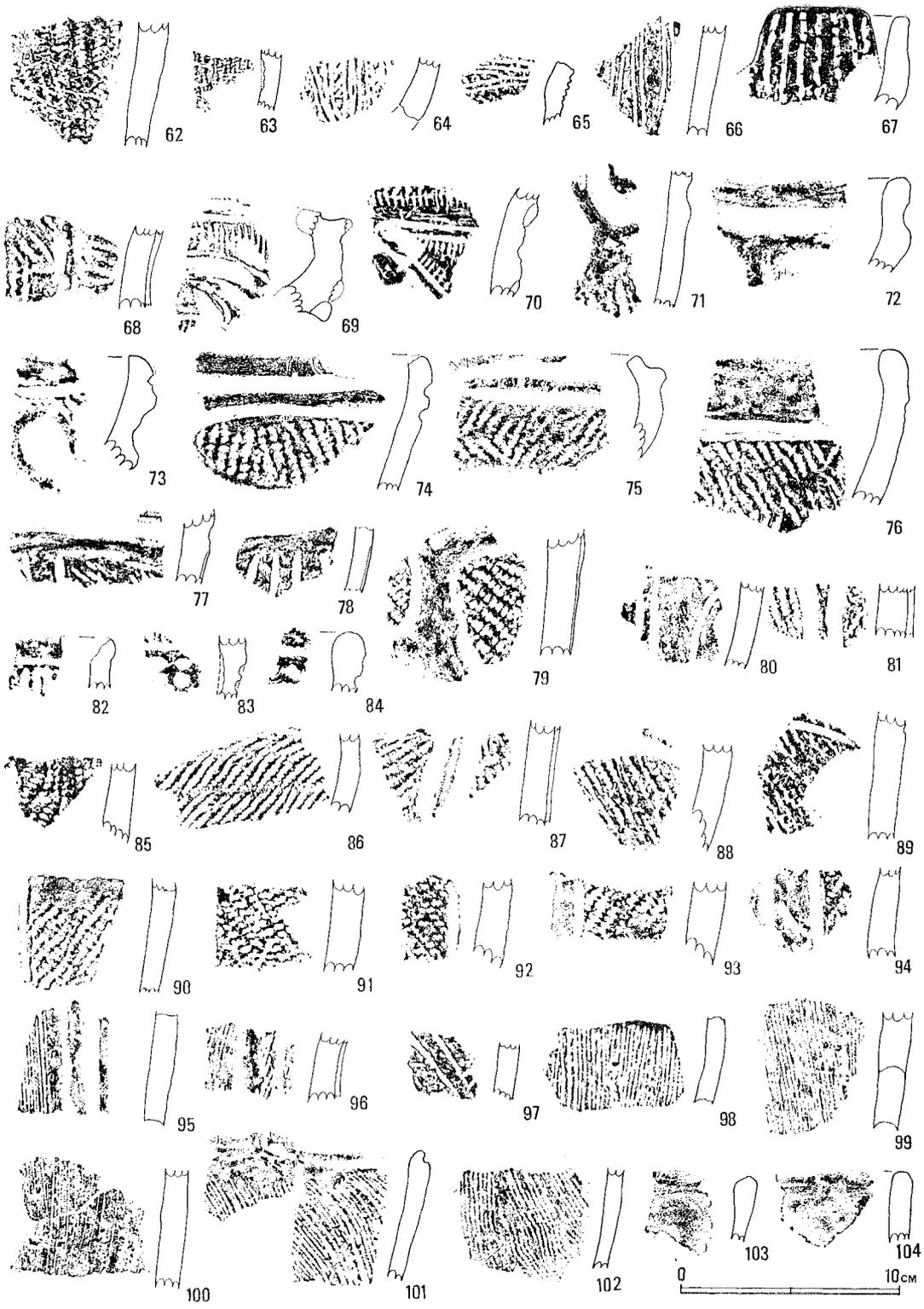
a 類 (52)

小粒の楕円押型文が施される。器厚は薄く4ミリを測る。焼成は良好で赤褐色をしている。胎土は1～2ミリの小石、長石を含む。

b 類 (53)

大粒の楕円押型文が施される。焼成は良好で赤褐色をしている。胎土は精選されている。

第Ⅲ群土器 (54～61)



第32図 縄文土器実測図 (3)

a 類 (54~68)

54は、横位に粗い条痕が施されている。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は長石粒子を多量に含む。55は、やや粗い条痕が施される。焼成は良好で黄褐色をしている。56は、不明瞭な条痕が施される。焼成は良好で暗赤褐色をしている。胎土は2~3ミリの小石を混じえる。内面には炭化質が付着している。57は、内面に6本1単位の条痕が明瞭である。焼成は良好で黄褐色をしている。胎土は細砂、長石粒子を多量に含む。58は、アナダラ類の貝殻背面を利用して条痕を施し、部分的に背面の押圧痕を残している。焼成は良好で赤褐色をしている。胎土は細砂を含む。

b 類 (59~61)

59は、粗い条痕が施される。焼成は良好で赤褐色をしている。胎土は3~4ミリの小石を含むが、細砂、長石粒子を主体としている。また繊維を少量含む。60は、不明瞭な条痕が施される。焼成は良好で赤褐色をしている。胎土は1~2ミリの小石を混じえ、長石粒子、細砂を多く含む。また繊維を少量含む。61は、底部付近の破片である。不明瞭な条痕が施される。焼成は良好で暗褐色をしている。胎土は細砂、長石粒子を、また繊維を少量含む。

第Ⅳ群土器 (62、63)

62~63は、2段の撚糸LRが施文される。両者とも繊維を多く含んでいる。62は黄褐色、63は茶褐色をしている。

第Ⅴ群土器 (64~66)

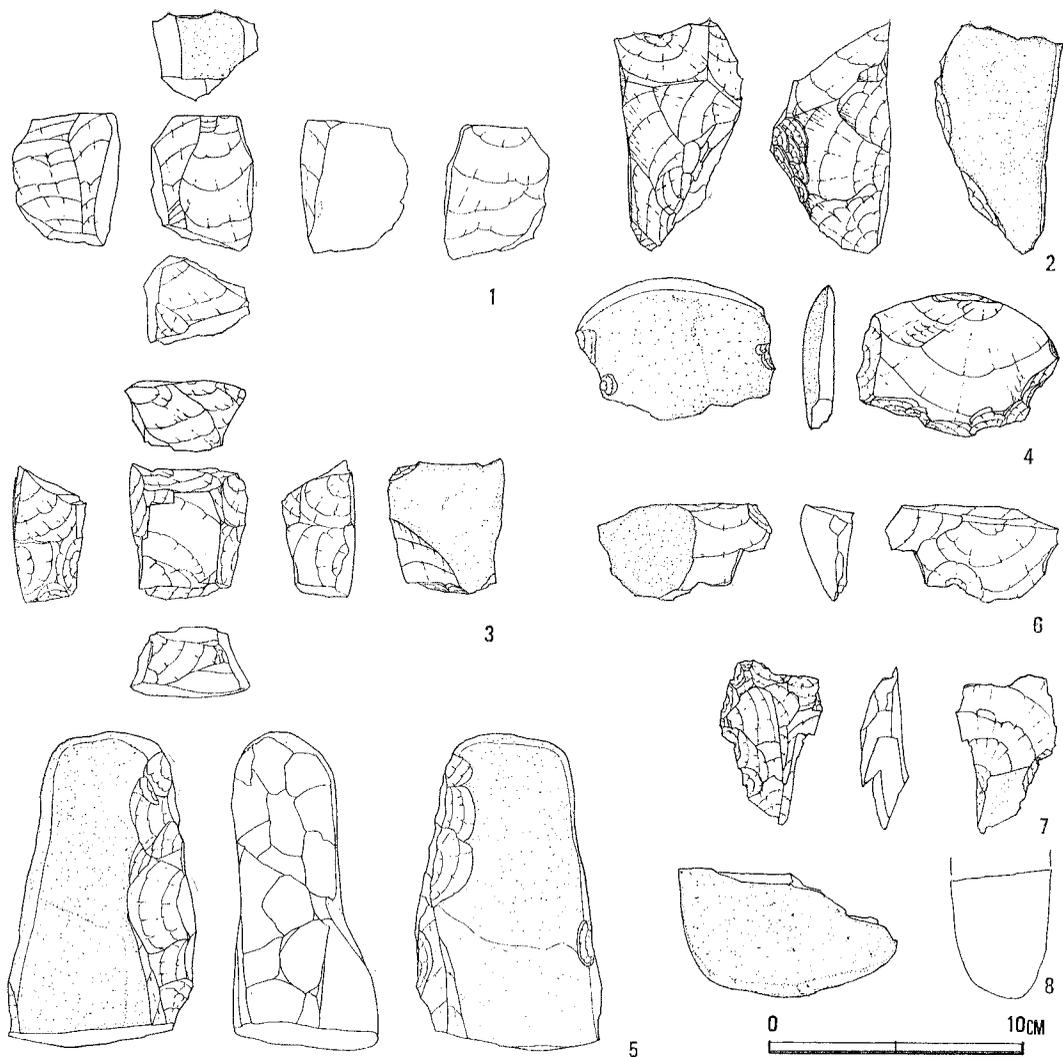
64、65は、撚糸施文後、半裁竹管による沈線が施文される。焼成は良好で赤褐色をしている。64は底部に近い部位である。64、65とも接合面で折損している。

第Ⅵ群土器 (67、68)

67は、口縁部の破片である。連続刺突による文様を施している。焼成は良好で茶褐色をしている。68は、垂下する隆帯を付している。

第Ⅶ群土器 (69、70)

69は、口縁部の破片である。器面の剥落が著るしい。焼成は良好で黄褐色をしている。70は、隆帯により三角形に区画し、この三角形部分に2重に沈線で三角形をえがく、さらにこの間に瓜形文を充填する。焼成は良好で黄褐色をしている。



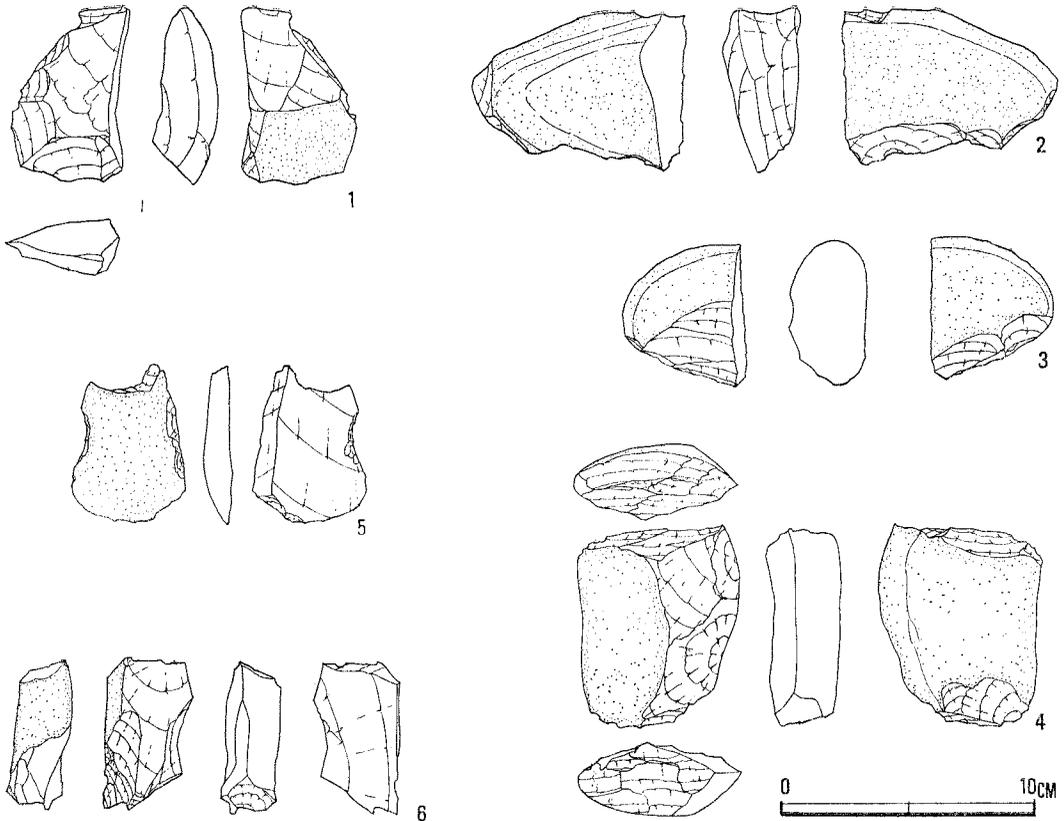
第33図 塩前遺跡出土の石器〔1〕(1/3)

石 器

塩前遺跡からは、完形、破損品を合わせて58個の石器が出土した。その中で41個を図示できた。これらの石器は表採品、覆土中からの検出がほとんどで遺構からの出土も流れ込みの状態を示していた。以下、各器種毎に見ていきたい。

石核 (第33図1～3、第37図1、図版36—2)

検出された石核は全部で5個である。第33図1は三角柱状を呈し、上下両端より打撃を加えている。第34図1も三角柱状を呈しているが剝離は長軸に直交する方向からなされている。第33図2は三角錐状を呈し、側面には自然面を残している。剝離面は任意に創出されている。また剝離後にできた稜を敲打面に転用している。3は直方体状を呈し、背面に自然面を残し、側面を剝離面として

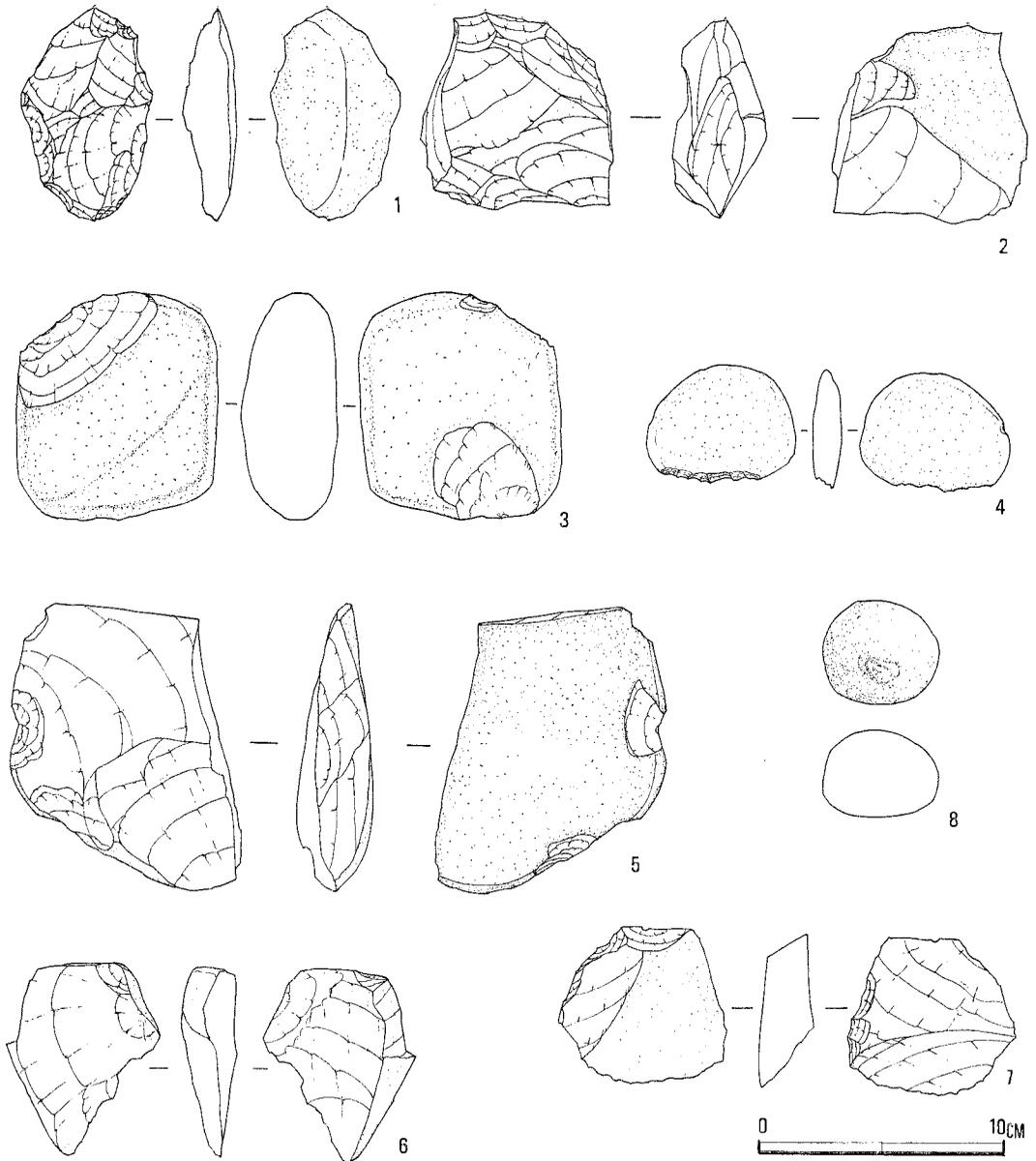


第34図 塩前遺跡出土の石器〔2〕(1/3)

いる。図版36-2は不整形の石核で明確な剝離面はわからない。本遺跡より出土した剝片と同石質の剝片はあるが接合する剝片は無い。

礫器（第33図4、第34図1～5、第35図1～5、第36図3）

礫器は出土石器の中で主体を占める器種であり12個検出された。形態は円礫を調整したもので、自然面を多く残し、片刃を基本としている。第33図4は三辺を調整し刃部になっている。完存品である。第34図1～3は破損品で、2、3は長軸の片面を刃部になっている。破損の原因については使用状態におけるものかどうかわからない。4は両端の摩耗した礫器で、ほとんど平坦になっており、激しい使用を窺わせる。側縁は使用されていない。5は両側縁に調整が施され、打斧の可能性もある。第35図1は下半部周縁に調整が施され刃部をつくっている。2は両側面の欠失した破損品である。3はわずかに剝離の認められる楕円礫で、未成品と思われる。第36図3はほぼ三角形を呈し、二辺を調整し刃部としている。完存品であった。



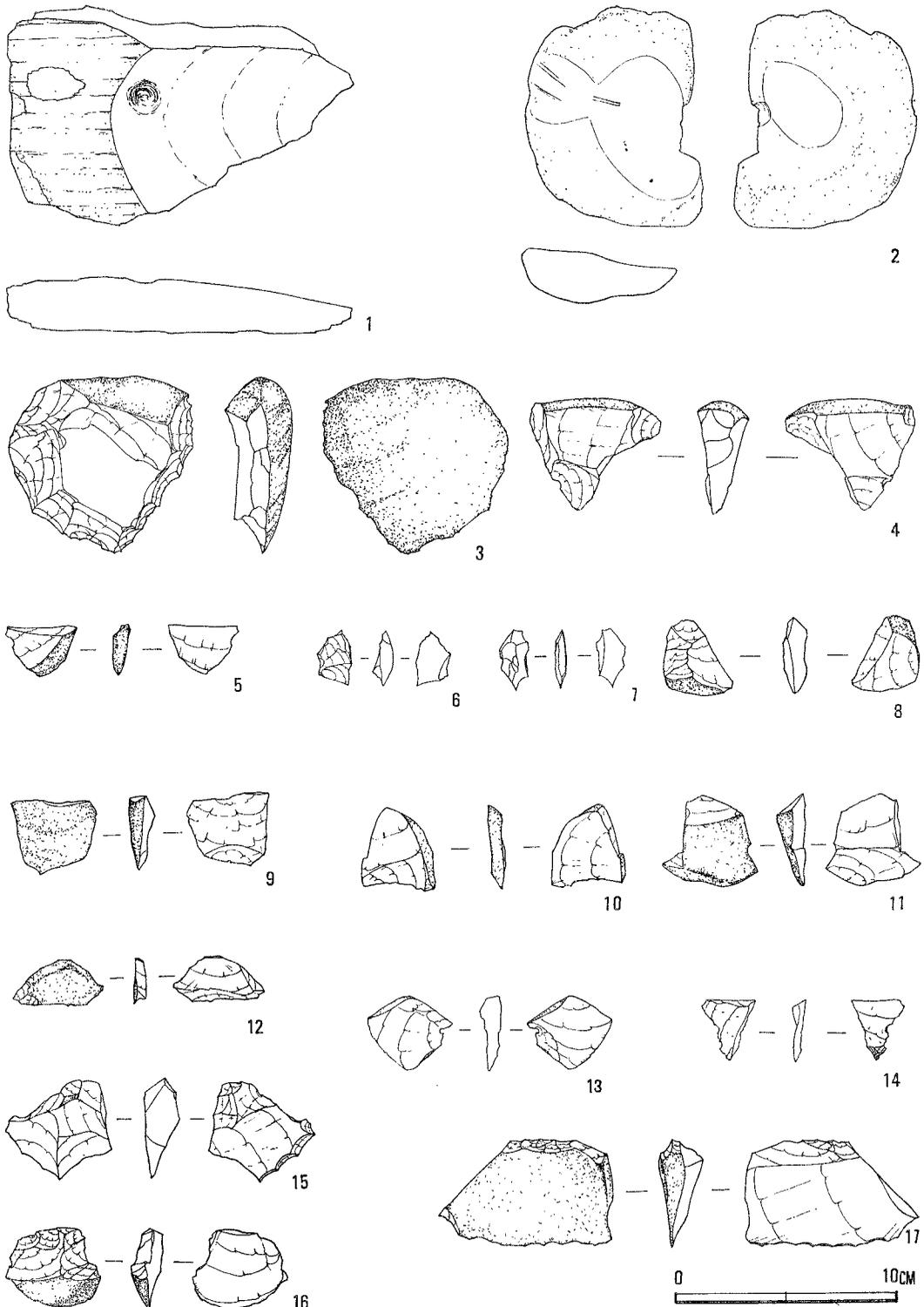
第35図 塩前遺跡出土の石器〔3〕(1/3)

敲石（第33図5）

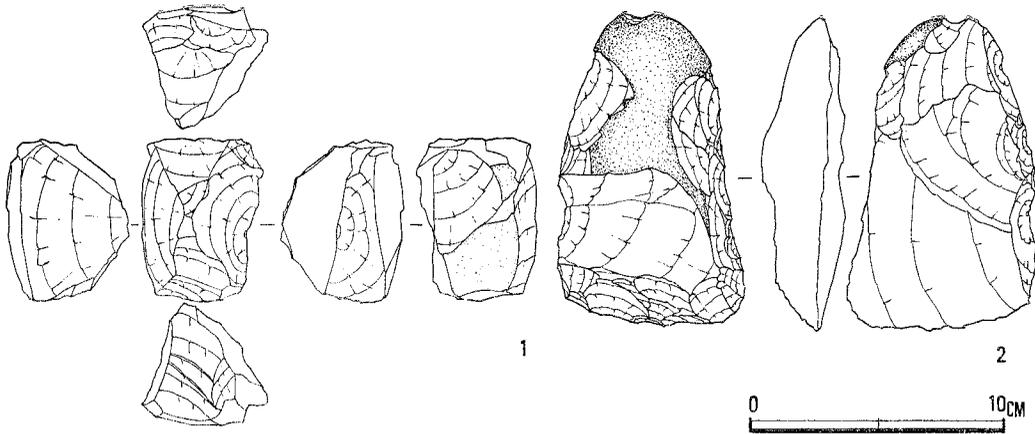
大形で重量のある。しかも握りやすい長楕円の石材を利用している。一方の側面だけを使用しており、下半は欠失している。第34図4も敲石として利用された可能性がある。

磨石（第33図8、第35図8、第36図2）

第33図8は扁平な石材を用いており、使用面は良く研磨される。2分の1を欠失している。第35図8はほぼ球形で全面良く磨かれている。また頂部に敲打痕がある。



第36図 塩前遺跡出土の石器〔4〕(1/3)



第37図 塩前遺跡出土の石器〔5〕(1/3)

第36図2は、表裏面ともほぼ中央部が良く研磨されており皿状に凹む。

石皿（第36図1）

厚さ3.5cmの縁泥片岩を用いている。凹面は良く研磨されている。研磨面の隅には凹点がある。破損品である。

剥片（第33図6、7、第36図6、第35図6、7、第36図4～17）

剥片は、25片検出されているが、剥片同士のまとまりが見られない。大形剥片と小形剥片がありどちらも自然面を残している剥片が多い。第33図6、7、第34図6は礫器を再生した時に剥離されたものと思われる。第35図6、7は大形の剥片である。第36図4～5、8～13、15～17は自然面を残す小剥片である。14は尖端部に微調整が施される。

打製石斧（第37図2）

この石器は調査区外より表採された。楕円礫を大まかに剥離しているが、自然面を除去しきっていない。刃部、側縁は入念に調整される。刃角は60°を測る。

第3表 石器属性表

図番号	写真図版	器種	重量	石質	出土地点
第33図—1	図版—4	石核	100 ^g	貢岩	埋没谷 4 T
2	7	石核	239	ホルンフェルス	埋没谷 1 T
3	3	石核(敲打器)	85	硬質砂質貢岩	埋没谷 1 T
4	2	礫器	60	泥質貢岩	埋没谷 1 T
5	5	敲打器	725	硬質砂岩	埋没谷 4 T
6	4	再生剝片	45	ホルンフェルス	埋没谷 4 T
7	6	再生剝片	41	挂質貢岩	埋没谷 2 T
8	2	磨石器	215	安山岩質軽石	D 2 T
34 —1	1	礫器	75	貢岩	A区覆土
2	6	"	200	安山岩	A'区覆土
3	3	"	105	砂岩	A区覆土
4	5	"	220	チャート	"
5		打斧	40	緑泥片岩	"
6	3	再生剝片	50	センリョク岩	"
35 —1	3	礫器	95	ホルンフェルス	D 2 T
2	4	"	335	硬質貢岩	"
3	1	礫器(未成品)	409	硬質砂岩	"
4	3	礫器	50	粘板岩	D 1 T
5	5	礫器	390	硬質貢岩	D 2 T
6		剝片	85	ホルンフェルス	D 1 T
7	1	剝片	100	硬質貢岩	D 2 T
8	5	磨石器	101	硬質貢岩	D 2 T
36 —1	1	石皿	1305	緑泥片岩	D表採
2	7	磨石器	245	砂岩	D 1 T
3	1	礫器	225	安山岩	D表採
4	2	剝片	30	センリョク岩	D 4 T
5		"	8	安山岩	D表採
6		"	1	黒燿石	"
7		"	2	黒燿石	"
8	14	"	5	ホルンフェルス	"
9	16	"	11	安山岩	"
10	13	"	4	安山岩	"
11	18	"	12	センリョク岩	"
12		"	5	安山岩	"
13		"	8	ホルンフェルス	"
14	10	"	6	黒燿石	"
15	10	"	8	センリョク岩	"
16	12	"	11	安山岩	"
17	7	剝片	25	センリョク岩	D 4 T
37 —1	6	石核	180	ホルンフェルス	24号墳周溝
2	3	打斧	338	"	"
図版36—2	2	石核		黒燿石	表採

第Ⅳ章 結 語

第1節 小 結

塩前遺跡の中心となる時期は古墳時代に当たっている。集落跡である。この集落の背面丘陵上には塩古墳群第Ⅰ群が構築されている。また前面には滑川沖積底地が広がっている。景観的には、集落・墓域・生産基盤と社会生活のポイントとなるものは揃っているように思われる。遺構は土壙43基、古墳跡2・住居跡1軒であり、他に自然の埋没谷があった。遺物は縄文時代早期、中期、古墳時代前期と長期にわたっている。

遺 構

住居跡は和泉期前半の時期で、初源期の形態を持つカマドが構築されている。荒川右岸での該期の集落はあまり例が知られていないので、ひとつ資料を加えることができた。この集落の存在により、塩古墳群の造営者を輩出させる生産基盤を前代より開発し、培っていたことが推定される。また初源期のカマドを持つことは本地域におけるカマド受容について問題となる。現在知られる荒川右岸地域の遺跡では、やや離れるが、吉見町久米田遺跡がある。初源期のカマドを持つこと、土器型(註1)が同一であることなど類似点が見られる。

古墳跡は、狸塚24号墳と同30号墳の周溝部分が検出された。同周溝の出土遺物から、塩古墳群の構成墳の年代が推定される。30号墳は24号墳に先行し、6世紀中頃には築造されている。24号墳は6C末～7C初頃には築造されていると考えられる。両古墳とも周溝の一部を掘り残してブリッジを造っており、主体部方向や墓道の推定を容易にしている。古墳群の群構成や単位群を把握する一助になるだろう。塩古墳群の分布の実態については後章に分けたので参照していただきたい。

遺 物

縄文土器は早期と中期が中心となっている。土器はⅠ～Ⅷ群に分類される。それは以下のとおりである。

- | | | |
|-----|-----------|---------|
| 第Ⅰ群 | 撚糸文系土器群 | |
| a類 | 井草Ⅱ式 | (1) |
| b類 | 夏島式 | (2～20) |
| c類 | 稻荷台式 | (21～47) |
| d類 | その他 | (48～51) |
| 第Ⅱ群 | 回転押型文系土器群 | |
| a類 | 粒の小さいもの | (52) |
| b類 | 粒の大きなもの | (53) |
| 第Ⅲ群 | 条痕文系土器群 | |

a 類	繊維を含まないもの	(54~68)
b 類	繊維を若干含むもの	(59~61)
第Ⅳ群	黒浜式	(62、63)
第Ⅴ群	諸磯式	(64~66)
第Ⅵ群	阿玉台式	(67、68)
第Ⅶ群	勝坂式	(69、70)
第Ⅷ群	加曾利E式	
a 類		(71~94)
b 類	条痕を施すもの	(95~102)
c 類	無文のもの	(103、104)

第Ⅰ群土器は本遺跡周辺ではあまり出土例を見ないがa類に先行する井草Ⅰ式土器は嵐山町寺山遺跡より検出されている。b・c類が出土土器の下半数を占める。d類はa～c類に含められない土器であるが、小形の無文土器の口縁部(49)はa類に伴う可能性がある。捺糸文原体(絡条体)を用いた条痕を施す土器(48)はb類に伴う可能性がある。口唇部にきざみ目を持つ土器(51)は大宮市稲荷原遺跡、美里村東山遺跡に類例が求められそうであるが、本例のように口唇にきざみ目を持つ土器は検出されていない。あるいはこれに後続するかもしれない。胎土は捺糸文系土器に近似しており、三戸式土器よりは古いと思われる。

第Ⅱ群土器は、近辺では、嵐山町越畑城跡、東松山市五領遺跡C区に出土例を見る。越畑城跡の例は田戸下層式に伴うと考えられている。これは大粒の楕円で本遺跡の例とは異なり、五領C区の例に類似する。

第Ⅲ群土器は野島式以降の茅山式系土器群に似る条痕を持つが、繊維の含有量が全く異なっており区別される。町田市田中谷戸遺跡等で子母口式とされる一群に最も近いと考えられるが、山内清男氏のいわれる子母口式とは異なっており、今後課題・検討を残す土器である。

第Ⅳ群以降の前期・中期の土器群は黒浜式以降連続している。加曾利E式に含まれる土器が中心である。石器については、器種・量ともわりあい多く、早期に特有な礫器がある。

住居跡の出土遺物は、弥生時代の壺口縁部を除いてすべて和泉期のものであった。

古墳墳丘及び周溝から出土した遺物では、細片に破砕された須恵器があり、器種としては、甕、横瓶、長頸瓶が確認される。

埴輪片は一片だけだが24号墳周溝より検出された。本古墳周辺からは他に検出されず、本古墳に樹立したものかどうかははっきりしない。上位からの流入を考えると、本古墳の上位丘陵上には塩古墳群の主群が存在している。この主群、狸塚1～21号墳はその内容が、ほとんど明らかにされていない。この一片の埴輪がどこから持たられたか、塩古墳群の構造解明に関わる影響は大きいと思われる。付け加えれば、隣接する嵐山町尾根古墳群では、埴輪を樹立する例が多く、その出土遺物もいくつか知られている。

未解明な部分の多い塩古墳群だが、その主群が保存されていることは幸いである。しかし周辺の

古墳の現状は好しいものではない。塩古墳群の場合、古墳群の構成を把握するには周辺の古墳を含めた広い視野が必要だと感じている。

なお、文末になってしまったが、縄文土器、石器等について、数々の有益な御教示をいただいた石岡憲雄氏、梅沢太久夫氏、植木弘氏には心より感謝をいたします。(新井)

註1 金井塚良一 1978『吉見町史』上巻「第6節 古墳時代の展開・Ⅱ 竪穴住居址の変遷」

註2 高野博光、他 1976『寺山』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第9集

註3 安岡路洋、三友国五郎 1966『稻荷原』大宮市教育委員会

註4 宮崎朝雄、他 1980『甘粕山』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第30集

註5 小野美代子、他 1979『越畑城跡』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第20集

註6 金井塚良一 1960「五領C区の発掘調査」『埼玉考古』第3号

註7 川崎義雄、他 1976『田中谷戸遺跡』町田市田中谷戸遺跡調査会

註8 2体の人物埴輪が採集されている。この2体は武人埴輪、特殊の冠を有する埴輪として嵐山町有形文化財に指定されている。

参 考 文 献

1. 山内清男 1939～41『日本先史土器図譜』
2. 吉田 格 1955「千葉県城ノ台貝塚」『石器時代』第1号（『関東の石器時代』雄山閣 収録）
3. 杉原荘介、芹沢長介 1957『神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚』明治大学文学部研究報告 考古学第2冊
4. 小林達雄、他 1966『多摩ニュータウン遺跡調査報告』Ⅱ
5. 安孫子昭二、他 1967『多摩ニュータウン遺跡調査報告』Ⅳ
6. 小林達雄 1974「縄文世界における土器廃棄について」『国史学』93
7. 土肥孝、他 1975『針ヶ谷北通遺跡』埼玉県遺跡調査会報告 第26集
8. 谷井彪、他 1976『鶴ヶ丘』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第8集
9. 小林達雄、安岡路洋 1979「縄文時代草創期における回転施文縄文への一様相」『埼玉県史研究』第4号
10. 青木秀雄、他 1979『高輪寺遺跡』久喜市教育委員会
11. 青木秀雄 1980「縄文時代早期後半」『卜伝』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第25集
12. 埼玉県 1980『新編 埼玉県史一資料編 I 原始』
13. 谷井彪、他 1980『舟山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告書 第9集
14. 西川博孝 1980「三戸式土器の研究」『古代探叢』滝口宏先生古稀記念考古学論集
15. 宮下健司 1980「土器出現と縄文文化の起源（試論）」『信濃』第32巻 第4号
16. 宮崎朝雄 1981「撚糸土器群の終末と無文土器群」『土曜考古』第3号

第4表 和泉期遺跡一覽(北武蔵地方)

遺跡	所在	遺構			遺物	時期	文献
		住居	炉	カマド			
1	塩前	江南村大字塩字新田	1	○	○	土師器	和泉Ⅱ 梅沢大久夫、新井端「塩前遺跡発掘調査報告書」 江南村教育委員会 1982
2	五領B区	東松山市大字柏崎字五領	5	○		土師器 石製品	和泉Ⅰ、Ⅱ 金井塚良一「五領遺跡一B区の発掘調査」台地研究No.13 1963
3	岩鼻	東松山市大字松山字中原	1	○		土師器	和泉Ⅱ 東松山市 史資料編 第1巻 1981
4	大西A区	東松山市大字宮鼻字大西	1		○	土師器	和泉Ⅱ 同上
5	駒堀	東松山市大字田木字立野	7	○	○	土師器 石製品	和泉Ⅱ 横川好富、他「駒堀」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第4集 1974
6	根平	東松山市大字田木字根平	2	○		土師器	和泉Ⅰ 水村孝行、他「根平」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第27集 1980
7	久米田	吉見町大字久米田字八の耕地	2	○	○	土師器	和泉Ⅰ 金井塚良一 吉見町史 上巻 1978
8	船木	大里村大字冑山字船木	4	○	○	土師器 須恵器 石製品	和泉Ⅰ、Ⅱ 佐藤忠雄「大里村船木遺跡の調査」 第2回遺跡発掘調査報告会発表要旨 1974
9	山田	鶴ヶ島町大字脚折字山田	13	○		土師器 石製品	和泉Ⅰ 玉利秀雄「山田遺跡」 「脚折遺跡群」 鶴ヶ島町教育委員会 1977、1978
10	霞ヶ関	川越市大字的場字福緑塚	3	○		土師器	和泉Ⅰ、Ⅱ 埼玉県史(新編)、資料編一2 1982
11	女堀	川越市大字的場字女堀	4	○		土師器	和泉Ⅰ 増田逸朗、他「川越市女堀遺跡」 埼玉考古 第15号 1976
12	宮	桶川市大字上日出谷字宮	9	○		土師器 石製品	和泉Ⅰ 今泉泰之、他「宮遺跡」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第19集 1978
13	高井	桶川市大字下日出谷字高井	4	○		土師器 石製品	和泉Ⅰ、Ⅱ 吉川国男、他「高井遺跡」 桶川市教育委員会 1969
14	高井北	桶川市大字上日出谷	1	○	○	土師器	和泉Ⅱ 吉川国男、他「高井北遺跡」 桶川市教育委員会 1976
15	生出塚	鴻巣市東3丁目	4	○		土師器	和泉Ⅰ 山崎武、他「生出塚遺跡」 鴻巣市教育委員会 1981
16	高畑	行田市大字忍字高畑	4		○	土師器	和泉Ⅱ 金子真土、他「鴻池、武良内、高畑」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第11集 1969

	遺 跡	所 在	遺 構			遺 物	時 期	文 献
			住居	炉	カマド			
17	鴻 池	行田市大字樋ノ上字鴻池	2	○		土師器	和 泉 I	同 上
18	武良内	行田市大字樋ノ上字武良内	4		○	土師器	和 泉 I、II	同 上
19	弥藤吾 新田	妻沼町弥藤吾新田	1		○	土師器 石製品	和 泉 II	田部井功、他「弥藤吾新田遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査報告 第29集 1976
20	台耕地	花園村大字黒田字竹後	○			土師器	和 泉	鈴木敏昭、他「台耕地遺跡の調査」第12回 遺跡発掘調査報告会要旨 1979
21	新 井	岡部町後榛沢字新井	2	○		土師器	和 泉 I、II	栗原文蔵、他「水窪、新井遺跡の調査」 岡部町教育委員会 1976
22	地神祇 A	岡部町後榛沢字地神祇	11	○	○	土師器	和 泉 I、II	佐藤忠雄、他「後榛沢遺跡群の調査」 岡部町教育委員会 1977
23	大寄B	岡部町後榛沢字大寄	2	○		土師器	和 泉	佐藤忠雄「大寄B、西浦北遺跡」 岡部町教育委員会 1979
24	六反田	岡部町後榛沢字六反田	8	○	○	土師器	和 泉	埼玉県立歴史資料館編「六反田」 岡部町教育委員会 1981
25	東 谷	本庄市大字栗崎字東谷	1		○	土師器	和 泉 I	柿沼幹夫「東谷、前山2号墳、古川端」埼玉県遺跡発掘調査報告書 第16集 1978
26	古川端	本庄市大字栗崎字古川端	6	○	○	土師器	和 泉 II	小久保徹 同 上
27	二本松	本庄市大字西富田字二本松	7	○	○	土師器	和 泉 I、II	本庄市史「資料編」1976
28	西富田	本庄市大字西富田字夏目	5	○	○	土師器 石製品	和 泉 I、II	玉口時雄「埼玉県本庄市西富田遺跡調査報告」 史観 65、67合冊
29	西富田 新田	本庄市大字西富田字新田	14	○		土師器 石製品	和 泉 I、II	菅谷浩之「西富田新田遺跡」 本庄市教育委員会 1972
30	小 島 本 田	本庄市大字小島	2	○		土師器	和 泉 II	本庄市「史資料編」1976
31	東五十子	本庄市大字東五十子城跡	5	○	○	土師器 石製品	和 泉 II	同 上
32	諏 訪 新 田	本庄市寿2～3丁目	3	○		土師器	和 泉 II	同 上

	遺 跡	所 在	遺 構			遺 物	時 期	文 献
			住居	炉	カマド			
33	諏 訪	本庄市大字今井字諏訪	3		○	土師器	和 泉 Ⅱ	小久保徹、他「下田、諏訪」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集 1979
34	笠ヶ谷戸	本庄市大字北堀字笠ヶ谷 戸	12	○	○	土師器 石製品	和 泉 Ⅰ、Ⅱ	「女堀遺跡群発掘調査概報」 本庄市教育委員会 1979
35	後 張	児玉町下浅見下モ田	40	○	○	土師器 石製品 鉄 器	和 泉 Ⅰ、Ⅱ	増田逸朗「児玉町後張遺跡の調査」 第10回遺跡調査報告会要旨 1977
36	枇杷橋	児玉町大字金屋字枇杷橋	1	○		土師器	和 泉 Ⅰ	駒宮史朗「枇杷橋遺跡発掘調査報 告書」埼玉県遺跡調査会報告 第20集 1973
37	塚薙神 社前	美里村字広木字御社	2	○		土師器 須恵器	和 泉 Ⅱ	増田逸朗「塚薙神社前、一本松古 墳発掘調査報告書」埼玉県遺跡調 査会報告第39集 1981
38	北貝戸	美里村大字駒衣字北貝戸	1	○		土師器	和 泉 Ⅰ	「北貝戸遺跡」 美里村教育委員会 1977
39	宮 下	美里村大字南十条	4	○		土師器	和 泉 Ⅰ、Ⅱ	「宮下、樋ノ口遺跡発掘調査概報」 美里村教育委員会 1976
40	樋ノ口	美里村大字南十条	4	○		土師器	和 泉 Ⅰ	同 上
41	如来堂	美里村大字甘粕字如来堂	3	○		土師器 石製品	和 泉 Ⅰ	増田逸朗「甘粕山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第30集 1981
42	畑 中	美里村大字木部字界中	2			土師器	和 泉 Ⅱ	谷井彪、他「畑中遺跡」 美里村畑中遺跡調査会 1979
43	愛 后	上里町大字七本木字愛后 耕地	8	○		土師器	和 泉 Ⅰ	駒宮史郎「本郷東、愛后」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第 7 集 1978
44	東光寺裏	岡部町後榛沢				土師器	和 泉	中島宏、他「伊勢塚・東光寺裏」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第26集 1980
45	倉林後	児玉町金屋字倉林後	1		○	土師器 鉄製品	和 泉 Ⅱ	利根川章彦「倉林後遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 書第 3 集 1981

第2節 古墳群の分布について

埼玉県指定史跡塩古墳群は、大里郡江南村大字塩地内にある。ここは比企丘陵の北縁に当たる。北は平坦な江南台地に連なり、東と西は、狭小な沖積低地が続いている。現在、丘陵上には松、杉が植林され、ナラ、クヌギ等の雑木林も見うけられる。塩古墳群の保存には、こうした林地として活用者が貢献しているようだ。古墳築造当初、丘陵上の木々は伐採され、そこから望める視野は広いものであったに違いない。東は和田川に開析される狭小な沖積低地で、西は滑川に開析される広い沖積低地である。便宜上これらの名称を、東は和田川沖積低地、西を滑川沖積低地と呼びたい。

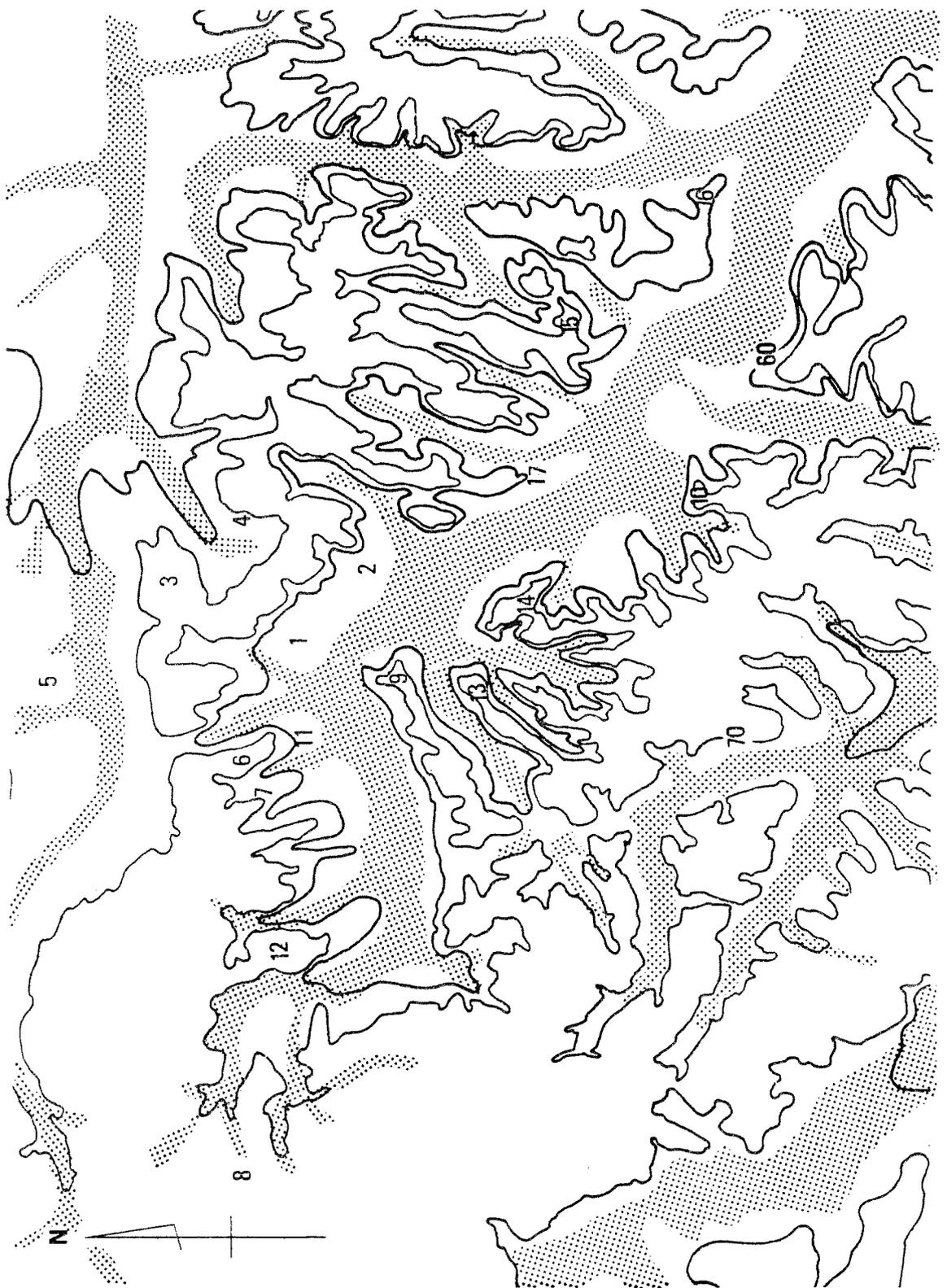
本文では滑川沖積低地周辺を中心に扱うが、これは塩前遺跡が滑川沖積低地に臨むこと、さらに同沖積低地周辺に多数の古墳群が分布しており、塩古墳群もこれらの古墳群のひとつとして、その歴史を考えたいためである。

滑川沖積低地は嵐山町古里より始まり同町勝田、滑川村和泉方面へ延びている。滑川村和泉～菅田には別の狭小な沖積低地があるので、扱う範囲を嵐山町勝田—滑川村和泉を結ぶ線で区限りたい。

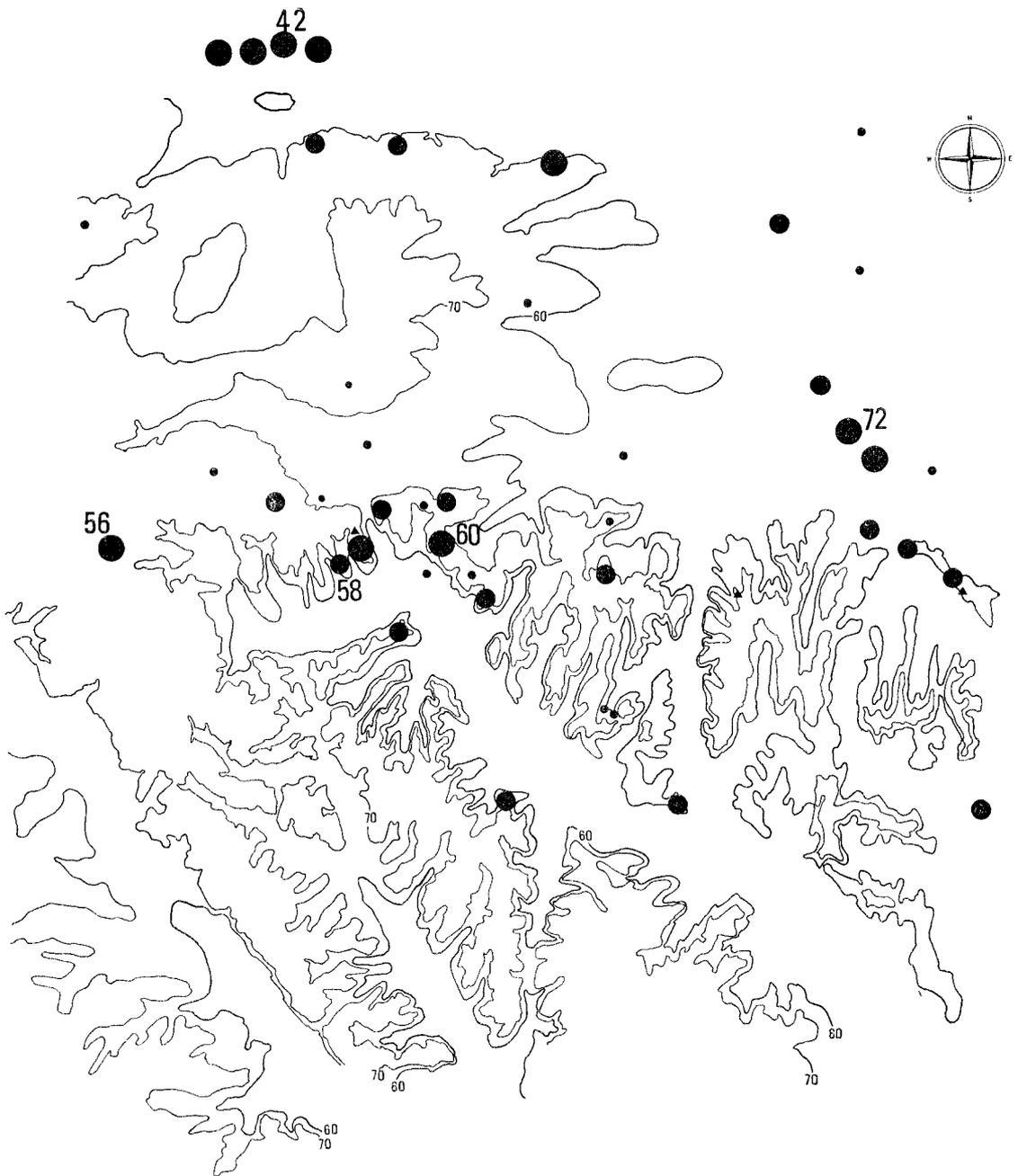
古墳時代以降、滑川沖積低地に接して、いくつもの古墳群、集落跡が形成されている。(第6、38、39図参照) 塩古墳群を造営した集団の生産基盤もこの沖積低地にあったろう。現在まで、古墳群は確認されるが、集落についてはほとんど不明であった。しかし、塩前遺跡の調査で和泉期の住居跡が検出されたことは、今後の周辺地域の集落の実態を解明する契機になると思われる。

古墳群の歴史的把握は生産基盤、集落跡との検討が不可欠であり一方のみの追求では不十分な成果に終ることは否めない。このことから塩古墳群だけでなく、沖積低地を取り囲む、わずか2km圏内に集中して分布する古墳群との相互比較、検討がなされなくては充分ではない。ただ現状では、この滑川沖積低地周辺に分布する中小規模の古墳は、あまり論及されたことがなく資料も少ないので、本文では江南村域の塩古墳群を中心にし、併せて周辺の古墳群を概観することにとどめ、今後の研究の進展に供したい。

まず塩地域の字名を冠し、谷津と古墳の分布する丘陵、丘陵斜面を弁別する。(第40図参照) 谷津は明賀谷、諸ヶ谷、駒込谷、西原谷、正木谷、檜谷がそれであり、それぞれ栗崎、明賀台、諸ヶ谷、狸塚、西原、荒井、丸山の丘陵をつくり出している。これらの丘陵は狭小で沖積地に面する緩やかな傾斜面を持っている。現在、栗崎、丸山を除く丘陵上に古墳の存在が確認されている。集落は遺物の散布するこれらの緩斜面(1～3)に位置すると考えられる。嵐山町側では、江南村との西原谷を界して尾根古墳群が塩古墳群と向い合っている。この谷津を含めて11余の谷津があり、10余の丘陵がつくり出されている。古墳は、駒込(6)、尾根(7)、神山(8)、陣屋(9)、やや南方に下った天神山(10)に所在が確認されている。集落跡は11～14に位置している。滑川村側では3余の谷津と4余の丘陵がつくり出され、松原(15)、山崎(16)の古墳群が確認されている。集落跡は17に位置している。これらの古墳群、集落跡の中で発掘調査が行なわれたのは今回報告する本遺跡の他に無いので、性格、時期、範囲を明確にすることはできない。そのため現地踏査、散布



第38図 沖積低地周辺の開析谷と台地 (1/25000)



第39図 42—鹿島古墳群、56—神山古墳群、58—尾根古墳群、60—塩古墳群、72—野原古墳群

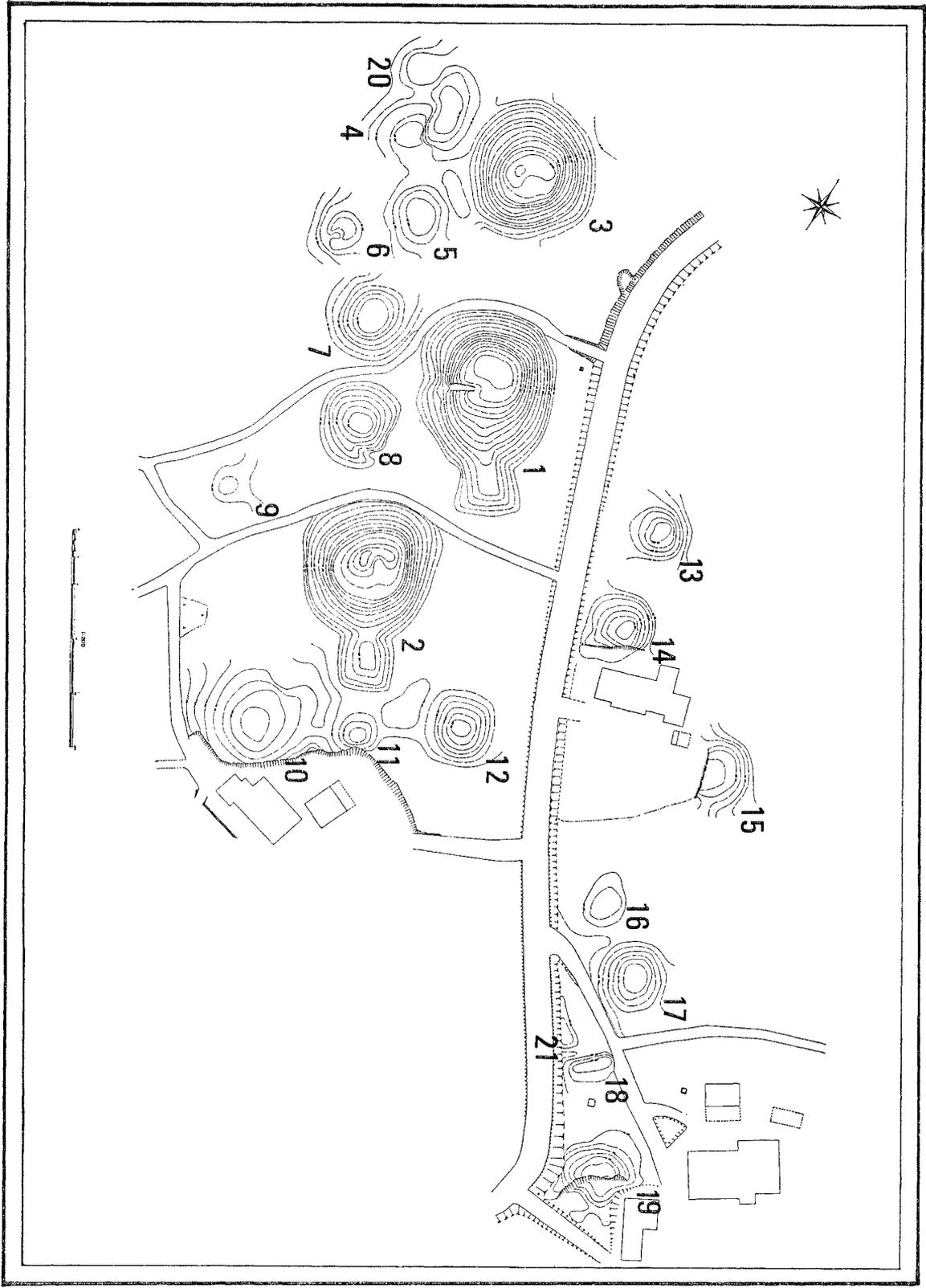
遺物や伝聞に基づいている。

尾根、駒込の古墳は墳形の判明するものはすべて円墳であったが、開墾、盗掘に会い墳形の崩れかけている古墳があった。人物、円筒埴輪、鉄製品等の出土が伝えられている。山林中の古墳は良く保存されている。約78基存在が確認されていた。神山古墳群は滑川沖積低地の最奥部に位置する。
註2

遺跡分布図に示される分布範囲の南半分は削平されており、幾つかの古墳は消滅していると思わ



第40図 塩古墳群分布地域の丘陵と谷津（I～V支群）



第41図 塩古墳群 第1群

れる。山林中に円墳が6基現存している。土師器、埴輪等の遺物が散布している。陣屋古墳群は開析谷による侵食で沖積地に半島状に延びる先端部に所在する。円墳が3基現存している。この古墳群は沖積低地を挟んで塩古墳群と対面している。天神山古墳は円墳が12基確認されている。1基は横穴式石室が開口している。比較的保存状態が良い。集落11は、従来より知られている。12は、踏査で遺物の散布が認められた。13は、道路切通し断面に住居址プランが見られる。14は、遺物の散布が認められる。松原古墳群は円墳2基が現存しているという。山崎古墳群は沖積地に張り出す半島の先端に位置している。円墳2基が現存しているという。集落17は、縄文時代、古墳時代の遺物が散布している。

以上の現地踏査の印象から古墳群の造営される立地は、谷津で界される丘陵頂部付近であること、それはほぼ沖積低地を望む位置にあり、頂部でも他の丘陵によって隠れ、視界のきかない所には存在していないようであった。また集落は古墳の存在する同一丘陵の突端に位置するようである。集落は沖積低地に直面している。これらの古墳群と各集落跡をすぐに同一集団の所産とすることは難しいが強い関係が窺えそうである。

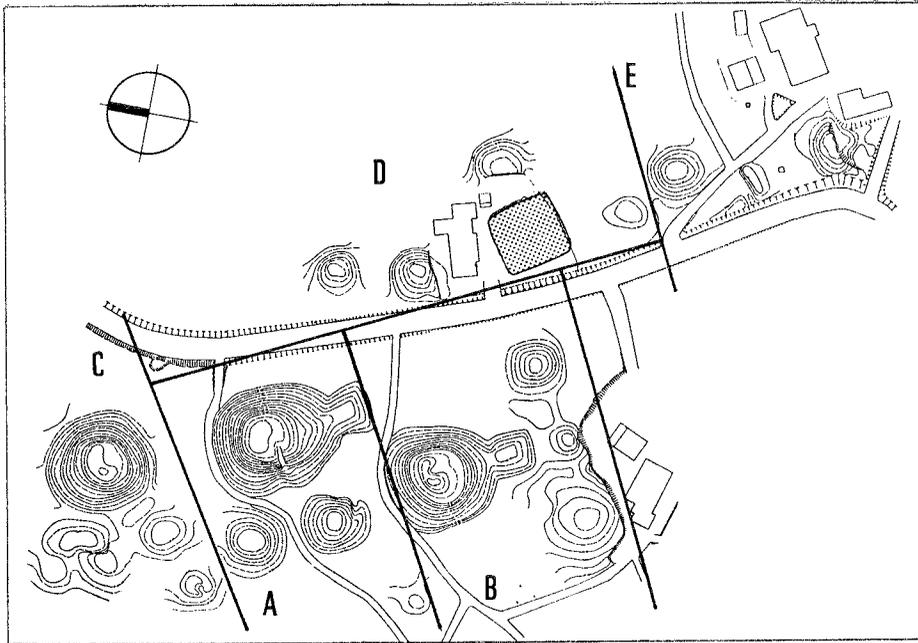
また、これらの中小古墳群は、測量図、分布図等の基礎的資料がほとんど得られていないので、今後の調査の充実が望まれる。

次に塩古墳の分布を見ることにする。塩古墳群の立地する丘陵と谷津は前述のとおりである。これらの古墳群をその分布の状態により狸塚群を主群とした支群に分け、さらに古墳のまとまりの最小単位を推定した。(第41、42図参照)

註3
第1群(狸塚群) 31基 8単位

本群は帆立貝型の前方後円墳2基、大形円墳1基、小形円墳27基が確認される。この中で1~21、31号墳までが丘頂部に集中する。丘頂部は南北に延びる平坦面をしており、両端が微高地となっている。古墳築造面のラインは海拔高度78~80mである。前方後円墳の全長は1号墳が40m、2号墳が36mで、主軸は1号墳N-31°-W・2号墳N-30°-Wである。両古墳は周囲に凹部が見られ、周溝が巡ると予想される。保存状態は良好である。3号墳は円墳で直径25mを測り周溝をもつ。以上の3基の古墳は本群の主墳的な位置を占めると考えられ、単位群の核と考えて良い。これらの他に、もうひとつ核となる古墳が存在したと考えられるが現存していない。1960年の古墳調査報告書には(第43図16)、「方墳は、底面の一边は各16メートル、高さ2メートル、一边の稜は真南を指さず、北20度西となり、この地方にある他の方墳とは異っている。」と記録されている。この方墳と先の3基の古墳を含めて他の古墳に抜んでる大型の古墳が4基あることになり、他の小円墳がこれらの大型古墳を核とする単位群に分けることができるようだ。

グループ	中核となる古墳	従属する古墳
A	1号墳(前方後円墳)	7、8、9号墳
B	2号墳(前方後円墳)	10、11、12号墳
C	3号墳(円墳)	4、5、6、20号墳
D	?号墳(方墳)	13、14、15、16号墳
E	? (消滅)	17、18、19、21、31号墳



第42図 第1群、単位群の細別

単位群Eは、現在では主墳が見当たらない。しかし従属すると考えられる古墳が海拔高度80m周辺に位置しており、南側の桑畑には古墳跡（22号）がある。これらの古墳の中央部、古墳の築造に適した平坦面は宅地となっている。ここに古墳の存在を推定できそうである。

A～Eの単位群は、主墳に従属する小円墳群のまとまりで、小首長墓の系列の中に築造されたと考えられる。

22～30号墳は、丘頂部ではなく緩斜面や、地形の変換点に位置する。22、25号墳は径12mの近接した円墳で狸塚丘陵と諸ヶ谷丘陵の接続部、正木谷と諸ヶ谷の鞍部に位置している。保存状態は道路によって墳裾が削られ、小盗掘も見られるが良好である。23、26号墳は丘陵南側斜面に位置する。道路や盗掘により墳形を損じているが円墳と考えられる。24、27号墳は3号墳に匹敵する規模を持ち単位群の主墳となる。24号墳は東半部が大きく削平され半壊の状態であるが西半は良く残る。推定直径は24mを測る円墳である。周溝は南側をブリッジに残し全周していることが推定された。近接する29号墳は保存状態は良い円墳で径10mを測る。30号墳は周溝のみであったが、径12mを測る円墳であろう。27、28号墳は畑地に開墾されてしまい、わずかな高まりと石室構築材の散乱によって確認された。30号墳のように地上からは全く窺い知ることのできなかつた古墳跡があるので、同様の古墳の存在がなお周辺に予想される。以上の分布と相互関係の係よりF～Iのグループに分けることができる。

グループ	中核となる古墳	従属する古墳
F		22、25号墳
G		23、26号墳
H	24号墳 円墳	29、30号墳
I	27号墳 円墳	28号墳

第Ⅱ群（荒井支群）16基 単位10以上

荒井、塩西の丘陵斜面に分布している。現在15基の古墳が確認されている。板井地区へ抜ける道路より西側は山林のまま残されているので古墳の保存は良好で大小12基の古墳が確認されている。1～12号墳は実測図は無く、ブッシュのためグルーピングできなかったが5～6のグループに分けられるようである。12号墳は盗掘のためか、横穴式石室が崩壊した状態で露出している。石室は白色凝灰質砂岩の切石で構築されている。他の古墳は保存状態は良好である。13号墳は開発により消滅してしまった。鉄器の出土が伝えられている。15号は公民館と民地に狭まれ半壊している。^{註6}八幡神社より常安寺へかけての荒井、塩西の緩斜面は他に多くの古墳が存在していたことが伝えられている。現在確認できる古墳だけでグルーピングすることはできないが、4グループ以上はあったろう。

グループ	中核となる古墳	従属する古墳
A～F	2、5、8、12号墳（円墳）	1、3、4、7、9、10、11号墳（円墳）
G～J～	13号墳、他（？）	14、15、16号墳（円墳）

第Ⅲ群（西原支群）4基 単位2以上

西原一駒込の丘陵頂部、裾部に4基確認される。南方の緩斜面はゴルフ場造営工事の際削平され同時に多数分布していた古墳はほとんど消滅したという。丘頂部に1基円墳が残る。1号墳は径10mの円墳で道路による削平、小盗掘が見られる。2号墳は保存良好である。3号墳は行政的には嵐山町側に入るが地形的には西原の丘陵斜面に位置する。3号墳は桑畑に開墾され、白色凝灰質砂岩の切石を使った横穴式石室が残存している。墳丘東半は埼玉県立飼犬指導センター敷地に削平されている。

第Ⅲ群は谷津を隔てて、いわゆる尾根古墳群と向き合っている。また両古墳群の和田川を隔てた北方0.5kmには、直径30m余の大円墳が6基集中する立野古墳群とも向き合っていて興味深い。

グループ	中核となる古墳	従属する古墳 ^{註7}
A	1号墳（円墳）	2、3号墳（円墳）
B～	4号墳、他（円墳）	

第Ⅳ群（諸ヶ谷支群）2基 1単位

諸ヶ谷丘陵頂部に2基確認される。西側へ延びる斜面にも予想されるが確認していない。さらに下位の緩斜面には集落跡が存在する。2基とも径8m程の円墳で保存状態は良いがブッシュで観察しにくい。

グループ	構成墳
A	1、2号墳 円墳

第V群（明賀台支群）6基 2単位

明賀台丘陵の西へ延びる高度75mラインに位置している。みな円墳であり、2、3、4号墳は、径10～12mの規模をもつ。3、4号墳は道路と開墾により多少削り採られている。1、5、6号墳は、径6～8mとやや規模が小さいが保存は良い。A、Bの2単位群に分ることができる。

グループ	構成墳
A	1、2、3、4号墳（円墳）
B	5、6号墳（円墳）

以上長々と、塩古墳群と周辺古墳の現状を見分し、分布の実態を見た。特に塩古墳群については大きく5の群域と以上のグループを明らかにできることを述べた。未解明な部分は多々あるが今後の課題としたい。

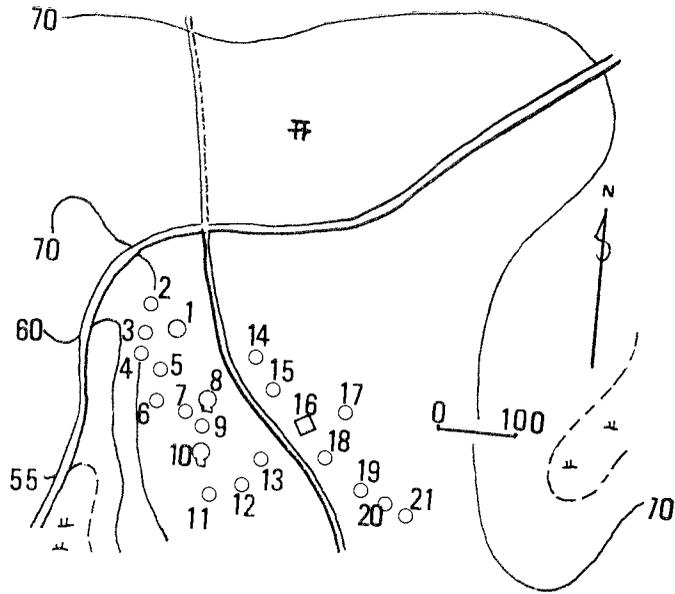
従来、塩古墳群といえば、本文中で扱った第I群のグループA～Eを中心とする地区だけであった。これは帆立貝型の前方後円墳が存在していたので早くから注目されたのだろう。しかし、これが、災いしたのか、集辺に群在する古墳は、草木に埋れ、開発に姿を消してしまっていた。今回の調査を契機に踏査した結果、前述のように同一丘陵、連続する丘陵に多くの古墳が存在していることを確認できた。前方後円墳の存在する地域が史跡指定された。1960年頃から周辺の古墳が注目されていけば、もっと塩群集墳の様相が明らかになっていたと思う。規模や内容物の点で劣るとはいえ、これらの資料に扱われなかった古墳を含めてこそ、より発展的な古墳群の検討ができると思う。小規模であることや副葬品に見るものがないということは、地域史を構成する資料として、決して不足の資料ではない。これらの、いわば、無名の古墳を消滅させないためにも、保護と研究の理論整備が急務だと感じる。

（新井）

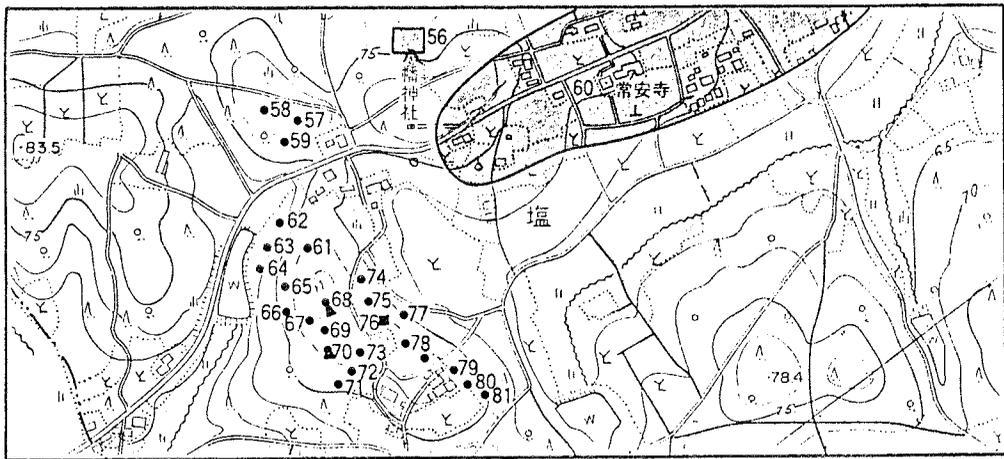
参 考

滑川沖積低地周辺の古墳（現存のもの）

古墳群の名称	基 数	墳 形 等
塩（狸塚）	3 0	前方後円墳、円墳
（荒井）	1 5	円 墳
（西原）	4	”
（諸ヶ谷）	2	”
（明賀台）	6	”
尾 根	1 0 数基	” 埴輪
神 山	3	” 埴輪
陣 屋	3	”
天神山	1 2	”
松 原	2	”
山 崎	2	”



第43図 塩古墳群分布図（小沢国平—1963）



第44図 塩古墳群分布図 埼玉県遺跡地図より

註1 これらの古墳は、1965年の古墳調査報告書以来、古里吉田古墳群という名称で扱われてきた。これは、各古墳の正確な分布域を考慮しない便宜的な呼称のように考えられるので、本文では古里吉田古墳群とは呼ばず、一丘陵に集中して存在する古墳を群とし、字地名を冠して呼ぶことにした。しかし、これらの古墳群が、相互に政治的背景、生産基盤等によって関連づけることができれば、個々の古墳群を包括する名称で呼んでも良いと思う。

参考文献

1. 埼玉県教育委員会 1962『埼玉県遺跡地名表』
2. 埼玉県教育委員会 1965『古墳調査報告書第8編比企地区』
3. 滑川村総合調査団 1959『滑川村総合調査報告書・福田地区篇』
4. 金井塚良一 1975「比企地方の古墳群の形成」『吉見百穴墓群の研究』
5. 塩野 博 1980「埼玉の古墳」『埼玉の文化財 第20号』
6. 中島利治 1981「比企地方の古墳群」『歴史手帖 第9巻5号』

註2 1962年調査時、古里吉田地域に分布する古墳群は、神山—3基、藤塚—1基、二塚—2基、³⁰⁹上土橋—5基、尾根—11基、岩根沢—27基、駒込—27基、陣屋—6基、合計82基が確認されている。このうち尾根古墳群域に含めるのは、尾根、岩根沢、駒込の65基である。1965年の調査では尾根、岩根沢、駒込に78基の存在が確認されている。1969年にはこの78基が県選定重要遺跡に指定されている。1975年の調査（県遺跡地名表）では尾根、岩根沢、駒込に11基しか記載されていない。これはどうしたことか、現地踏査では10数基しか確認できなかった。現状の把握がしっかりなされていないことが大きな原因になっているようだ。分布図等の測量図の整備が望まれる。

註3 水野正好氏は、群集墳の構造（造営主体者の階層、社会的地位、相互の関係など）を把握するために、群集墳の最小のまとまりに注目し、これを単位群とした。単位群は墓前域、墓道、等高線、微地形の変化等の観察による古墳のまとまりや、石室主体部構造、特殊遺物の検討から2～3基の単位が認定されたとした。そしてこれらの群集群を形成する個々の単位は、集落の検討より導き出された住居群の単位に表わされる単位集団（世帯共同体）が造営主体者に当たるとのではないかと指摘された。造営主体者の発展については石部正志氏によって考察され、さらに白石太一郎氏、広瀬和雄氏によって進められている。そして群集墳は世帯共同体首長層（家父長層）の造墓によるものであること。墓域が意識されていることそして墓域は世帯共同体首長層を越えた権力層により賜与された可能性があること。さらに墓域の賜与については、いくつかの集団が共同で墓域を使用した可能性のあることなどが指摘された。

群集墳の研究は各地で積極的に進められており、静岡県では群集墳のあり方を群集、散在、独立の3類型に分け、たとえば散在型の群集墳では、沖積平野の後背丘陵や小丘陵や尾根上に単位群が散在して立地し全体で群集墳として扱えられると観察された。

本文中では単位群の主群と従属墳とに分けてグルーピングした。塩古墳群は前方後円墳、大型円墳、方墳と首長の系列墓と首長の系譜を引く家父長世帯共同体が派生支丘に造墓を行った

群集墳と推定される。

参考文献

1. 石部正志 1975『古墳文化論—群小古墳の展開を中心に—』「日本史を学ぶⅠ（原始・古代）」
2. 水野正好 1975『群集墳の構造と性格』「古代史発掘 第6巻」
3. 広瀬和雄 1978『群集墳論序説』「古代研究 15」
4. 白石太一郎 1981『群集墳の諸問題』「歴史公論 No.63」
5. 静岡県考古学会 1981『群集墳と横穴』「静岡県考古学会シンポジウムⅢ」
6. 雨宮龍太郎 1977『群集墳社会の政治—宗教過程—一家父長家族説の検討に基づく一試論』「埼玉考古 第17号」
7. 森浩一 1975『群集墳と古墳の終末』「日本歴史 2」

註4 註3参照

註5 A～Eは、首長墓と共同体成員の、F～Iや、Ⅱ～V群は、これらの首長墓を祖先とする有力家父長層の造墓の結果であると考えられる。

註6 この古墳は1979年頃、開墾された。

註7 立野古墳群は、直径40m、高さ3mの7号墳を最大に、ほぼ同規模の円墳が8基、直径10mの円墳が2基確認されている。小規古墳はほとんど見当らず、時代、被葬者の性格等が注意される。

その他参考文献

- 埼玉県教育委員会 1960「古墳調査報告書 第4編 大里郡・熊谷市・深谷市・古墳調査」
- 小沢国平 1963『塩古墳群』「埼玉県指定文化財調査報告 第3集」埼玉県教育委員会
- 埼玉県教育委員会「埼玉県遺跡地名表」
- 菅谷浩之、金子章 1980『長沖古墳群』児玉町文化財調査報告書 第1集
- 同上 1980『広木大町古墳群』埼玉県遺跡調査会報告 第40集
- 増田逸朗、他 1977『塚本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第10集

第5表 塩古墳群一覽

(1982.1. 現)

群	図版 番号	遺跡地区 対照番号	遺跡名	所在地	種類	概要	備考
I	1	65-68	塩古墳群 狸塚1号墳	江南村 大字塩字狸塚	古墳	前方後円墳(帆立貝型)主軸長40m	盗掘杭
	2	65-70	狸塚2号墳	"	"	前方後円墳(帆立貝型)主軸長36m	
	3	65-61	狸塚3号墳	"	"	円墳径25m	
	4	65-63	狸塚4号墳	"	"	" 径12m	
	5	65-64	狸塚5号墳	"	"	" 径12m	
	6	65-65	狸塚6号墳	"	"	" 径10m	盗掘杭
	7	65-67	狸塚7号墳	"	"	" 径17m	盗掘杭
	8	65-69	狸塚8号墳	"	"	" 径18m	盗掘杭
	9	65-66	(狸塚9号墳)	"	古墳状隆起	" 径6m	
	10	65-71	狸塚10号墳	"	古墳	" 径21m	
	11	65-72	狸塚11号墳	"	"	" 径8m	
	12	65-73	狸塚12号墳	"	"	" 径12m	
	13	65-74	狸塚13号墳	"	"	" 径13m	
	14	65-75	狸塚14号墳	"	"	" 径13m	墳裾削平
	15	65-77	狸塚15号墳	"	"	" 径12m	"
	16	65-78	狸塚16号墳	"	"	" 径6m	
	17	65-欠	狸塚17号墳	"	"	" 径12m	
	18	65-79	狸塚18号墳	"	"	"	3/4削平
	19	65-80	狸塚19号墳	"	"	円墳径12m	1/2削平
	20	65-81	狸塚20号墳	"	"	" 径6m	
	21	65-62	狸塚21号墳	"	"	"	3/4削平
	22	65-133	狸塚22号墳	大字塩字諸ヶ谷	"	円墳径12m	盗掘杭
	23	65-134	狸塚23号墳	大字塩字新田	"	" 径12m	墳裾削平
	24	65-135	狸塚24号墳	大字塩字狸塚	"	" 径24m	1/2削平
	25	65-137	(狸塚25号墳)	大字塩字正木	古墳状隆起	径12m	墳裾削平
	26	65-138	狸塚26号墳	大字塩字新田	古墳	円墳径12m	盗掘杭、 半壊
	27	65-139	狸塚27号墳	"	"	" 径30m	開墾削平 石材露出
	28	65-140	狸塚28号墳	"	"	" 径4m	"
	29	65-141	(狸塚29号墳)	大字塩字狸塚	古墳状隆起	円形径10m	
	30	65-142	狸塚30号墳	大字塩字新田	古墳跡	円墳径12m	墳丘削平
	31	65-76	狸塚31号墳	大字塩字狸塚	"	方墳	
	32		狸塚32号墳	"			消滅

群	図版 番号	遺跡地図 対照番号	遺跡名	所在地	種類	概要	備考		
II	1	65—57	(荒井1号墳)	大字塩字荒井	古墳状隆起	円形 径6m	墓地削平 1/2		
	2	65—58	(荒井2号墳)	〃	〃	円形 径10m			
	3	65—59	荒井3号墳	〃	古墳	円墳 径15m			
	4	65—181	(荒井8号墳)	〃	古墳状隆起	円形 径15m			
	5	65—180	荒井7号墳	〃	古墳	円墳 径12m			
	6	65—184	荒井11号墳	〃	〃	〃 径16m			
	7	65—185	荒井12号墳	〃	〃	〃 径10m			
	8	65—186	荒井13号墳	〃	〃	〃 径18m			
	9	65—187	荒井14号墳	〃	〃	〃 径18m			
	10	65—183	荒井10号墳	〃	〃	〃 径12m			
	11	65—182	荒井9号墳	〃	〃	〃 径10m			
	12	65—188	荒井15号墳	〃	〃	〃 径15m		崩壊、石 室露出 消滅	
	13		荒井16号墳	〃	〃	円墳?			
		14	65—143	荒井4号墳	大字塩字台	〃		円墳 径4m	半壊
		15	65—166	荒井5号墳	大字塩字塩西	〃		〃 径6m	
		16	65—167	荒井6号墳	大字塩字塩前	〃		〃 径6m	
III	1	65—155	西原1号墳	大字塩字西原	古墳	円墳 径12m	盗掘杭、 墳裾削平		
	2	65—177	(西原2号墳)	〃	古墳状隆起	円形 径6m			
	3	65—178	西原3号墳	〃	古墳	円墳 径10m		削平、石 室露出	
	4	65—179	西原4号墳	〃	〃	〃 径12m			
IV	1	65—156	諸ヶ谷1号墳	大字塩字諸ヶ谷	古墳	円墳 径8m	盗掘杭		
	2	65—157	諸ヶ谷2号墳	〃	〃	〃 径10m			
V	1	65—158	(明賀台1号墳)	大字塩字明賀台	古墳状隆起	円形 径4m	1/4削平 墳裾削平		
	2	65—159	明賀台2号墳	〃	古墳	円墳 径10m			
	3	65—160	明賀台3号墳	〃	〃	〃 径10m			
	4	65—161	明賀台4号墳	大字塩字諸ヶ谷	〃	〃 径10m			
	5	65—162	明賀台5号墳	〃	〃	〃 径6m			
	6	65—163	明賀台6号墳	〃	〃	〃 径4m			
	1	65—52	立野古墳群 1号墳	大字板井字金山	古墳	円墳 径10m	盗掘杭		
	2	65—53	2号墳	〃	〃	〃 径15m			
	3	65—189	3号墳	〃	〃	〃 径8m			
	4	65—190	4号墳	〃	〃	〃 径8m			

群	図版 番号	遺跡地区 対照番号	遺跡名	所在地	種類	概要	備考
	5	65— 54	5号墳	大字板井字金山	古墳	円墳 径10m 高さ2.5m	
	6	65—191	6号墳	〃	〃	〃 径15m 高さ1.5m	
	7	65—192	7号墳	〃	〃	〃 径40m 高さ 3 m	墳裾削平
	8	65—193	8号墳	〃	〃	〃 径30m 高さ2.5m	〃
	9	65—194	9号墳	〃	〃	〃 径30m 高さ2.5m	盗掘杭
	10	65—195	10号墳	〃	〃	〃 径20m 高さ 2 m	

古墳測量図

狸塚 1 号 墳
狸塚 2 号 墳
狸塚 3 号 墳
狸塚 5 ~ 8 号 墳
狸塚 13、14 号 墳
狸塚 27 号 墳
狸塚 24、29 号 墳

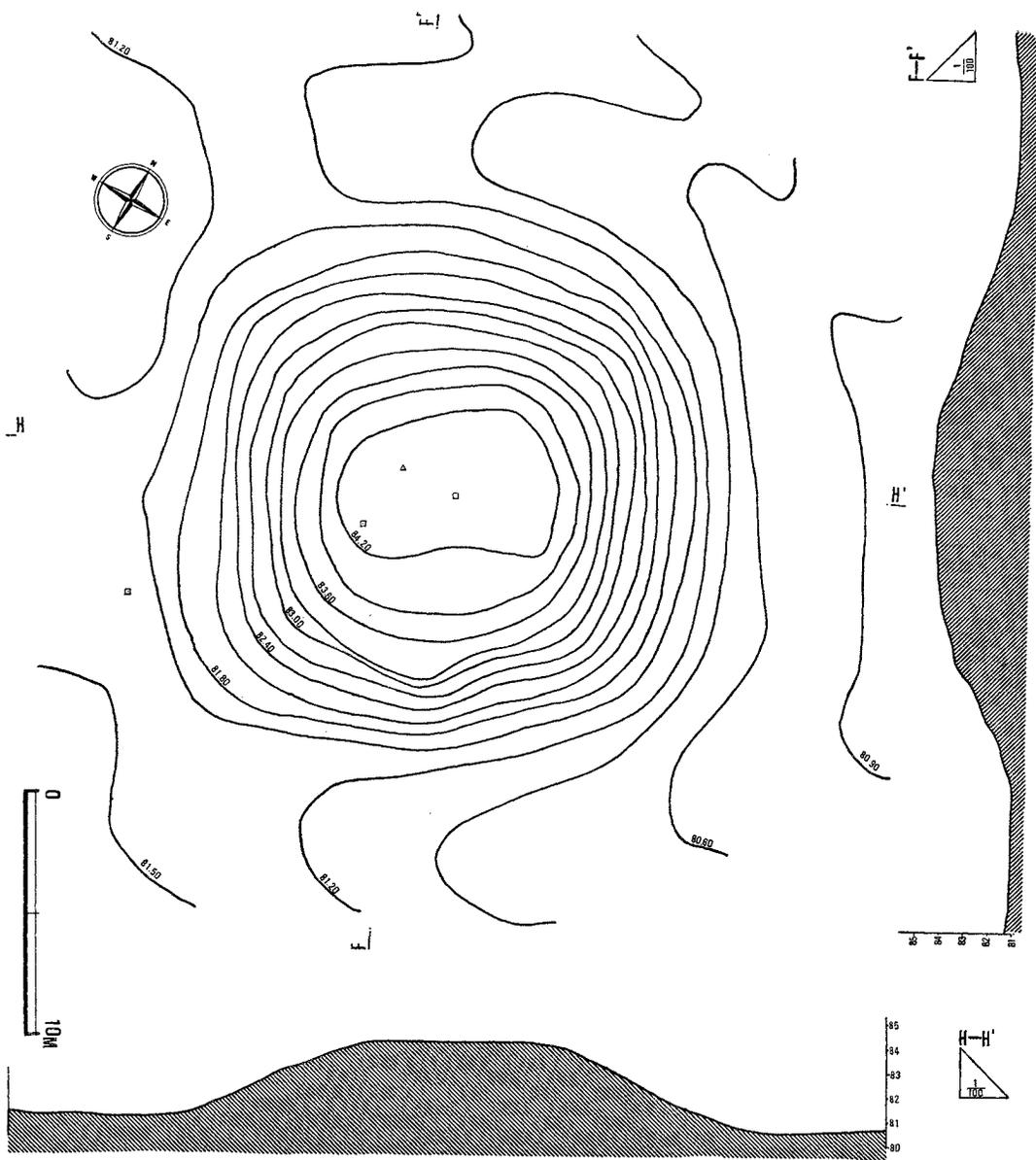
Contour Line	3 0 cm
Scale	1/300
Direction	磁 北
△ 印	最高位
□ 印	測量杭



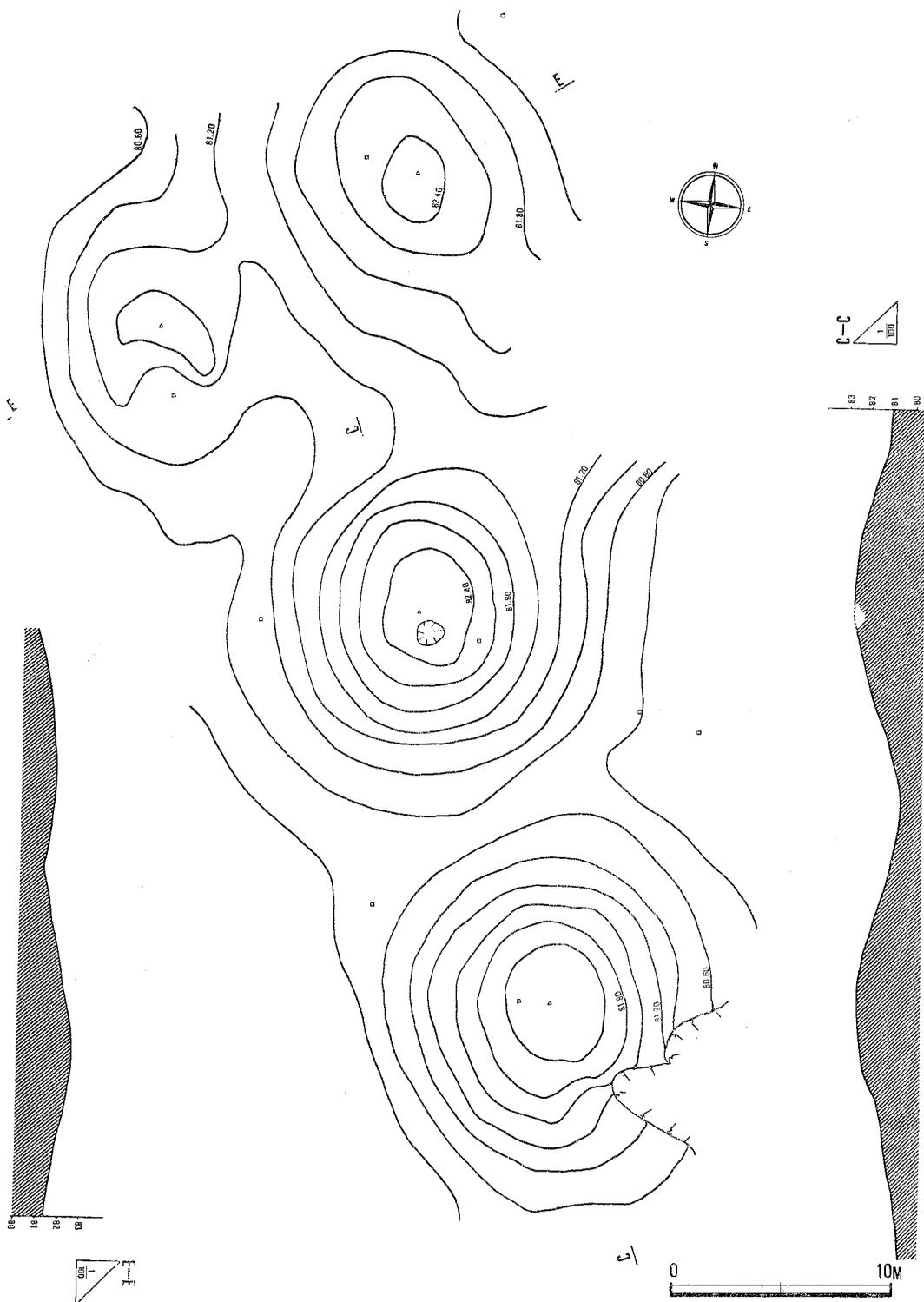
第45図 狸塚1号墳 (1/300)



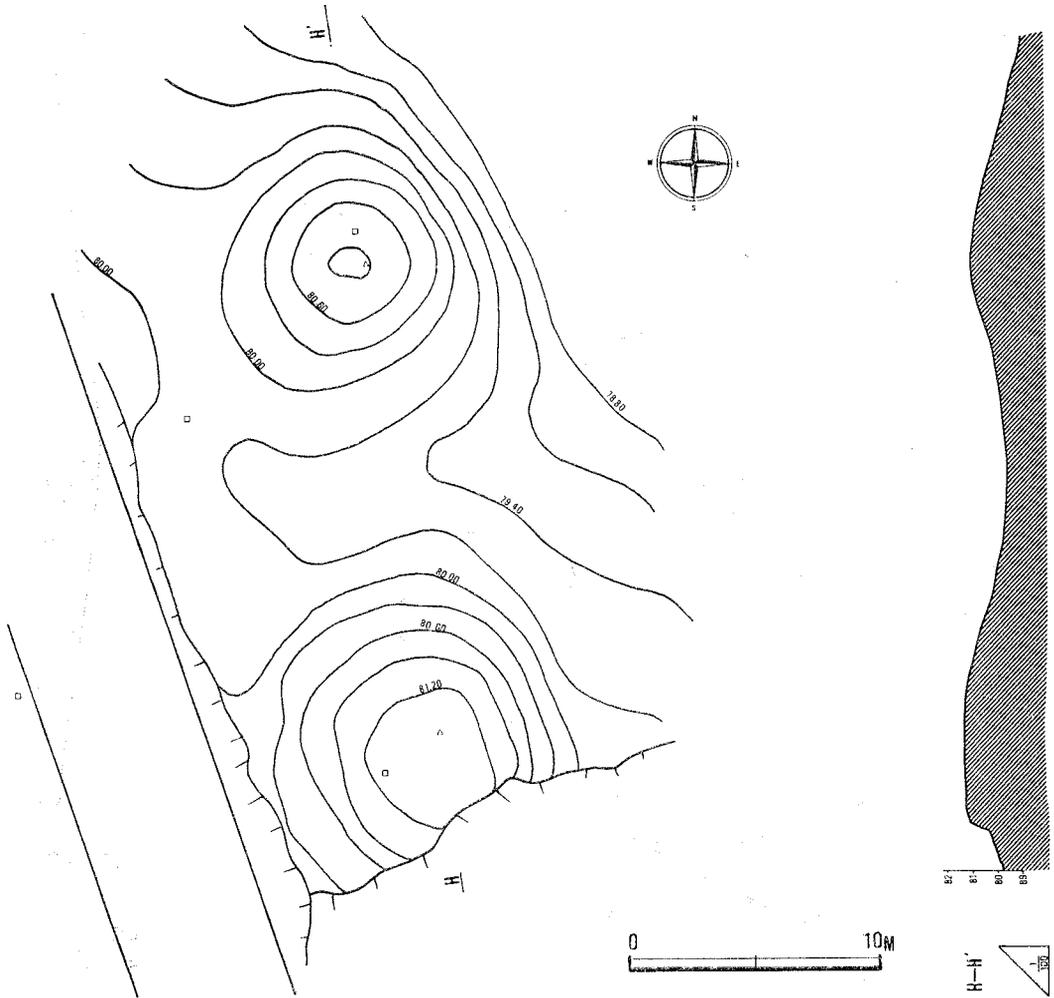
第46图 狸塚2号墳 (1/300)



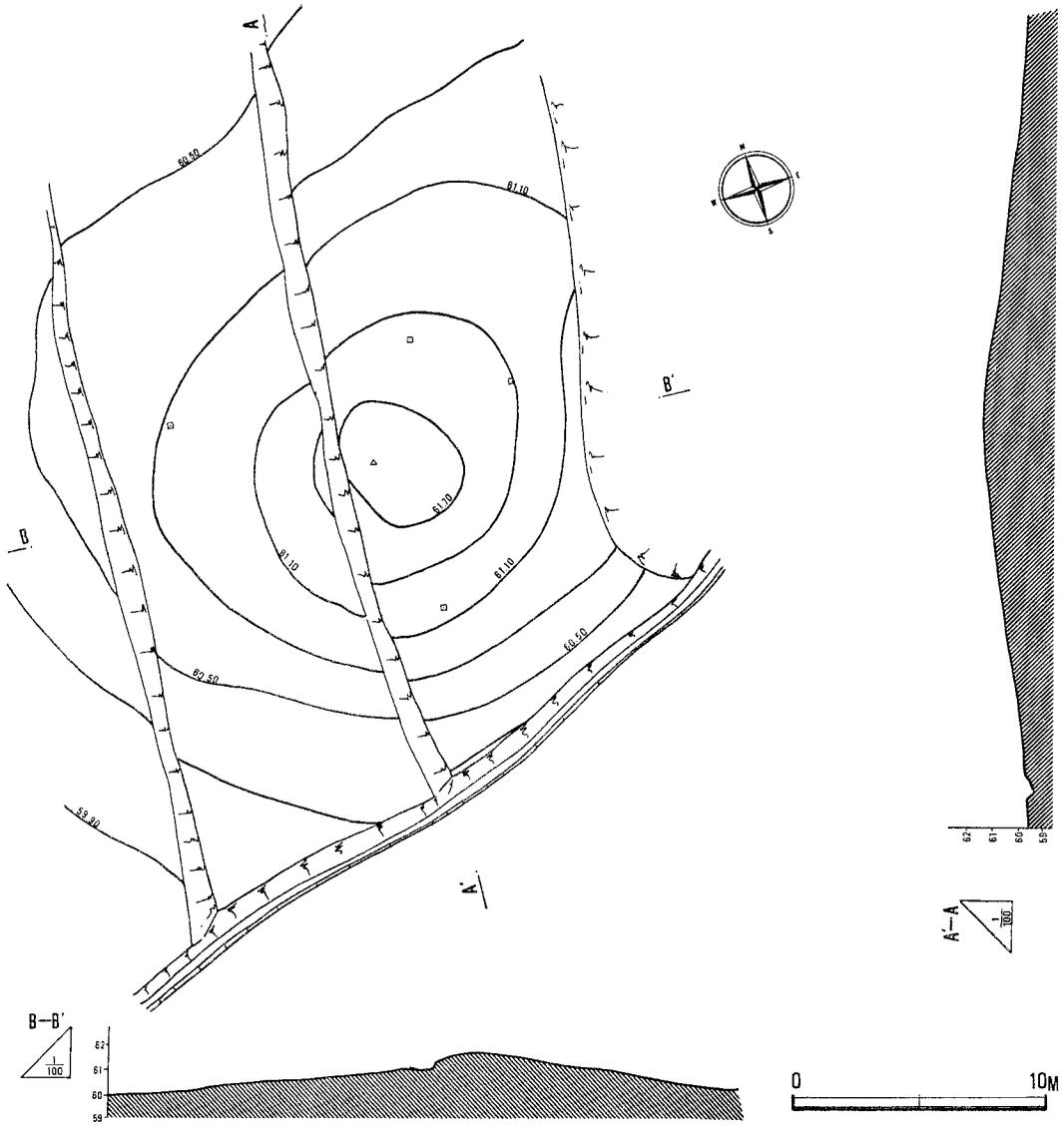
第47図 狸塚3号墳 (1/300)



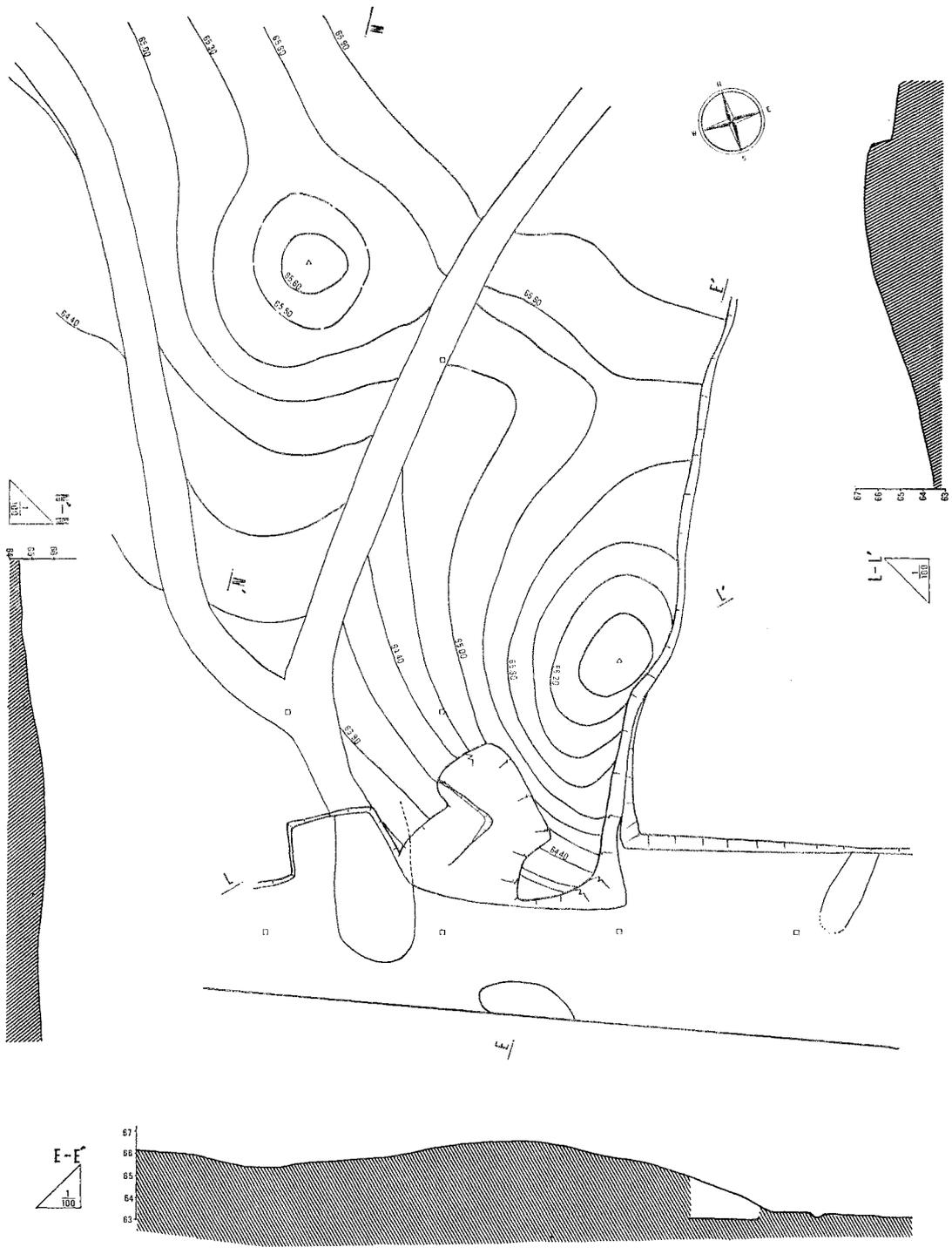
第48図 狸塚5、6、7、8号墳 (1/300)



第49図 狸塚13、14号墳 (1/300)



第50图 狸塚27号墳 (1/300)



第51図 狸塚24号、29号墳 (1/300)

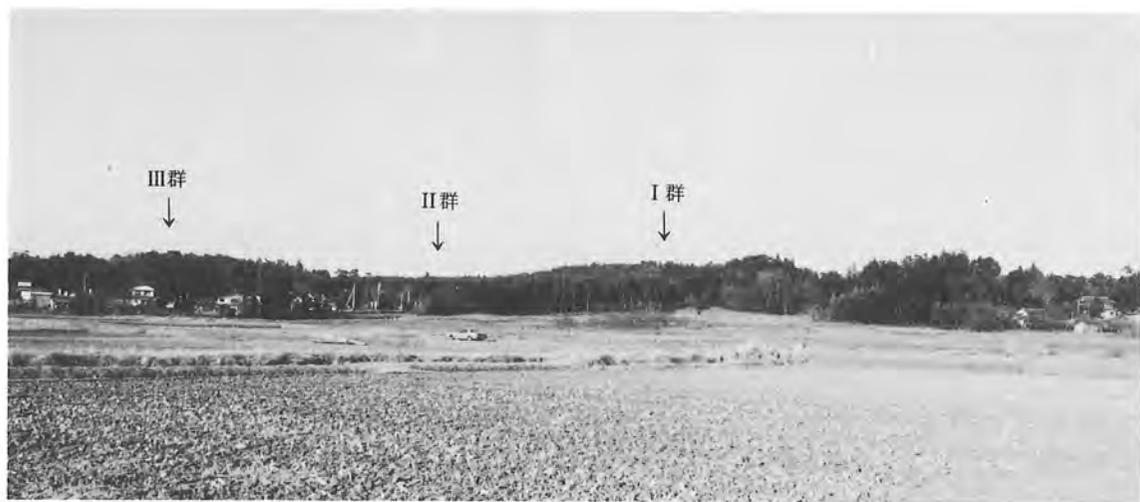


折込図版 塩古墳群分布図

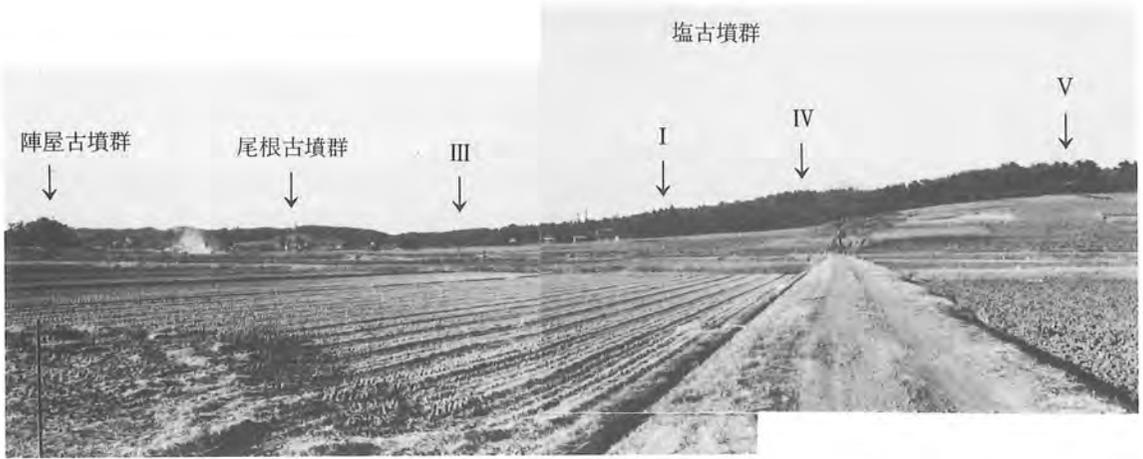
圖 版



塩前遺跡 現状 1981. 12



陣屋古墳群より塩古墳群を望む 1981. 12



滑川沖積低地を望む古墳群の分布



塩古墳群 明賀台4号墳 (V-4)

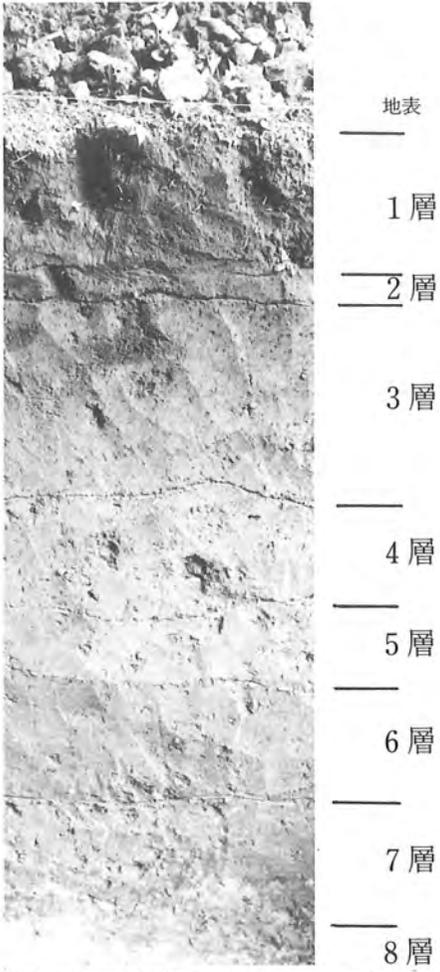


調査風景



調査風景

A区西端部深掘 土层断面



A—18号土城遺物出土狀況



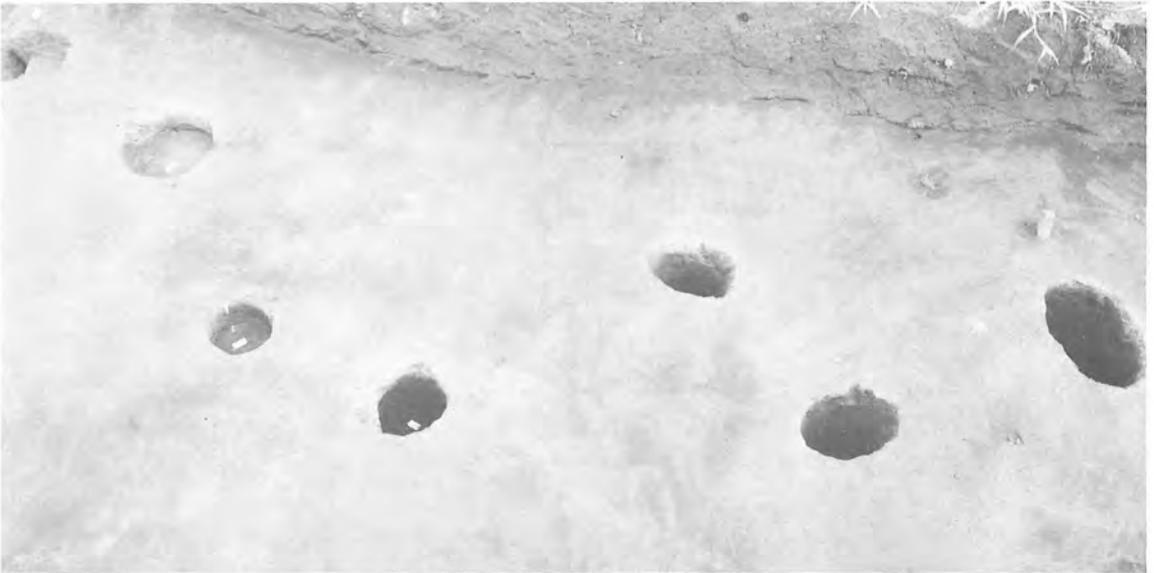
A区西端部



A区西半部



A区土塘群



A区土塘群



A-38~41号土坑

A区全景
中・西半部
下・東半部





A区土坑群



A区土坑群



A 42号土壙、上・確認状態、下・完掘状態





A区 東端部



A-43号土坑



B区 現状、調査前



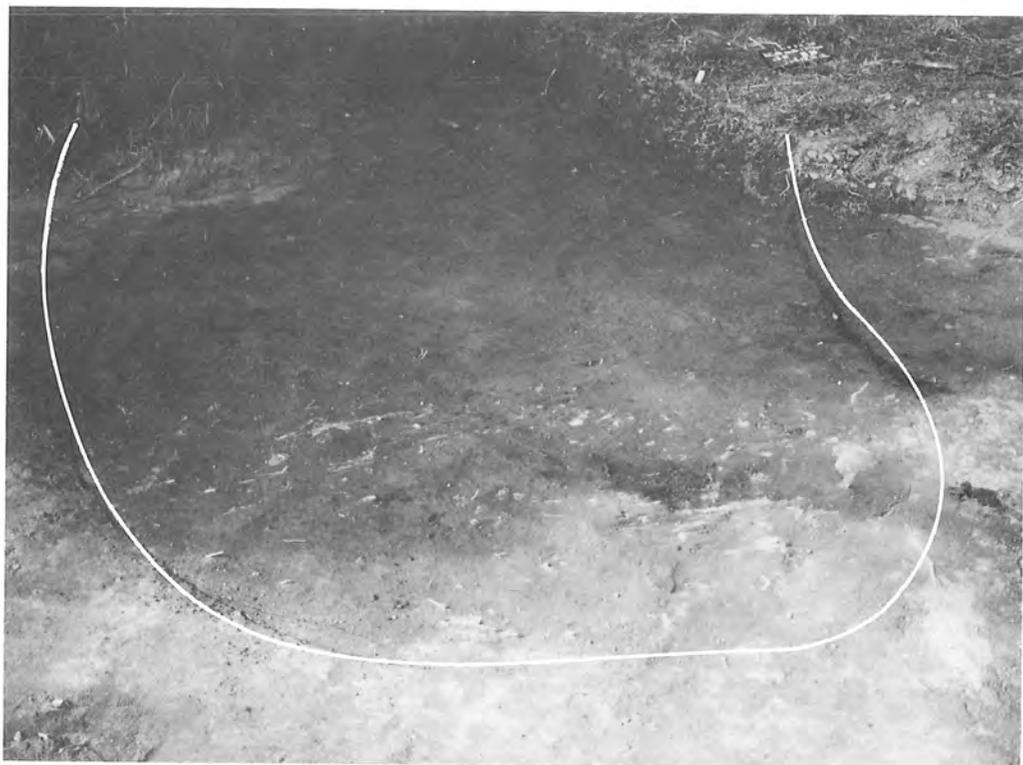
B区トレンチ



B区 トレンチ



B区 トレンチ



狸塚24号墳西側周溝範囲確認状態



同 完掘状態



上 狸塚24号墳周溝土層断面

左. 完掘状態

右. 遺物出土状態





狸塚24号墳
東側周溝遺物
出土状態





狸塚24号墳
西側周溝遺物
出土状態



同周溝断面





狸塚24号墳発掘風景



狸塚24号墳西側周溝・第1号住居跡完掘状態



狸塚24号墳丘下住居跡（塩前第1号住居跡）確認状態



同 発掘風景



第1号住居跡遺物出土状態（南より）



同（東より）



No. 2



No. 2



No. 5



↓ No. 1



狸塚24号墳丘下
住居跡（塩前第1号）
遺物出土状態

No. 8 →

No. 6 →

No. 7 →

番号は第24、25図の
実測図と同。





1号住居 カマド跡



1号住居 炉跡



狸塚30号墳周溝



同 完掘



同 遺物出土状態



狸塚24号墳 西より



同墳 北より (東半の墳丘は大きく削半されている)



上. 狸塚24号墳（北東より），中. 同墳（南より），下. 狸塚29号墳





上. 狸塚27号墳

中. 同 石材露出

下. 狸塚28号墳





狸塚3号墳 東より



狸塚2号墳 後円部



狸塚25号墳



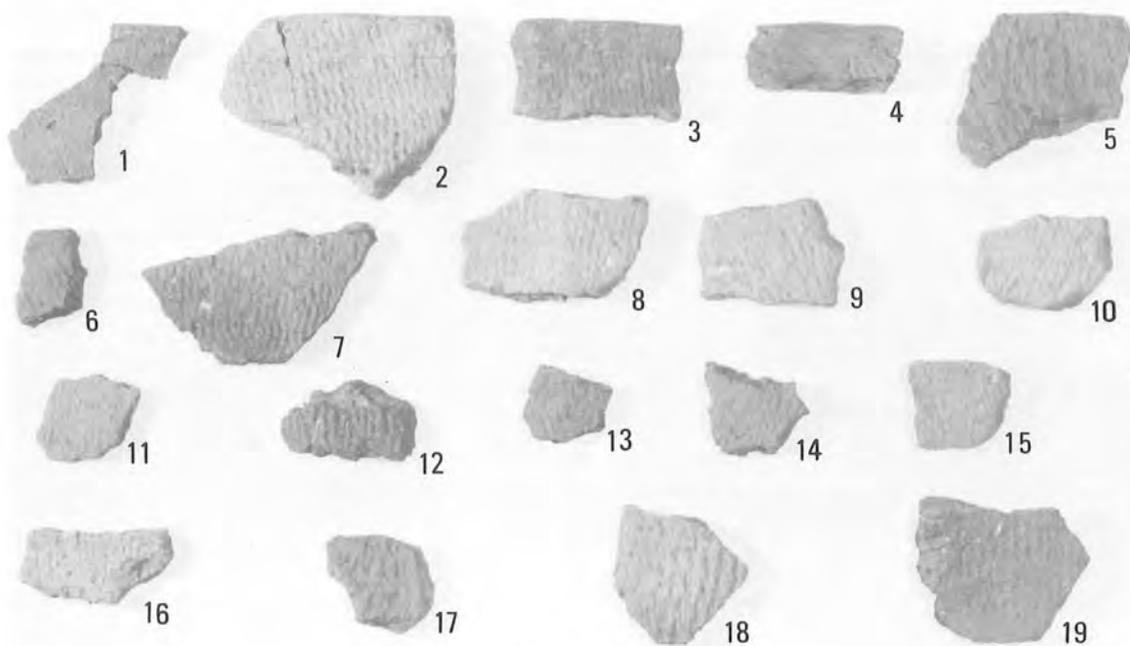
狸塚22号墳



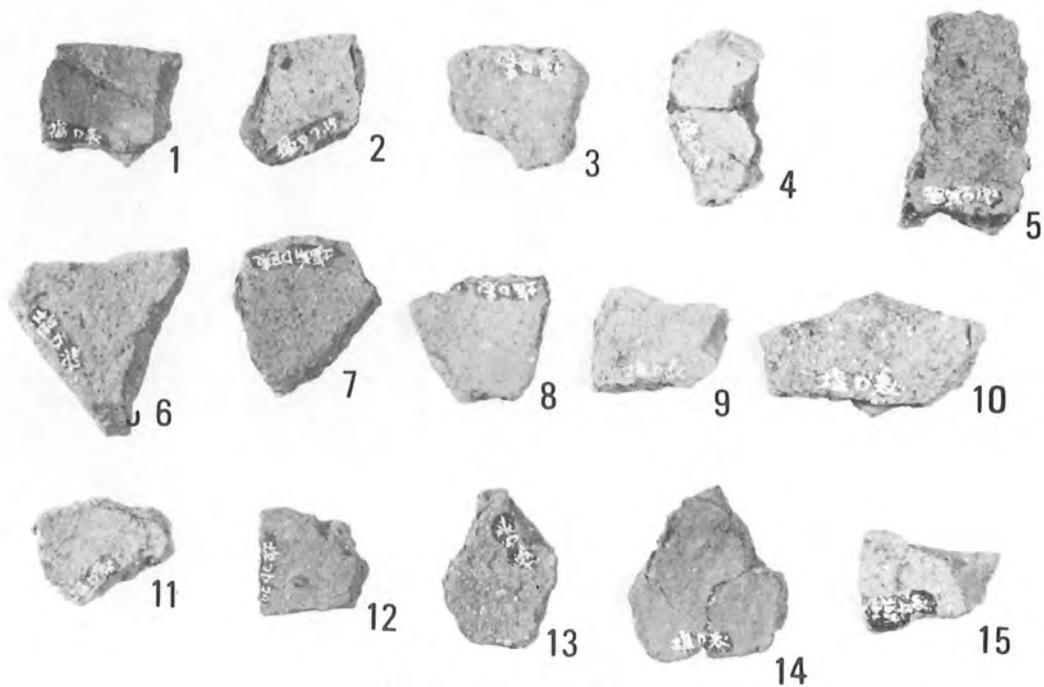
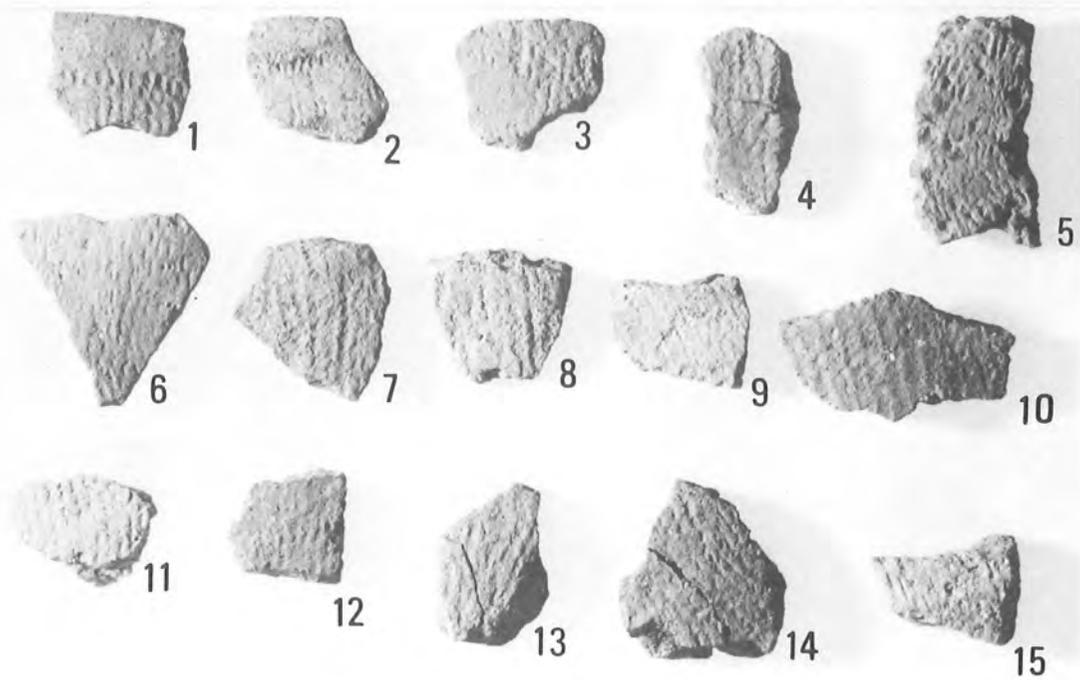
狸塚23号墳



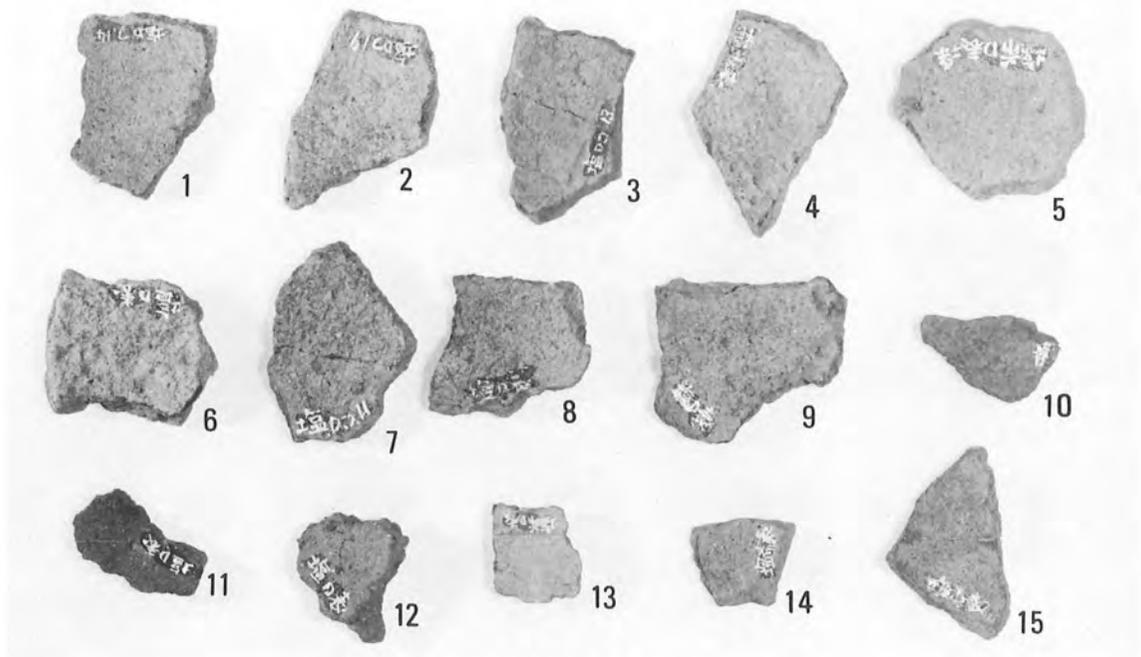
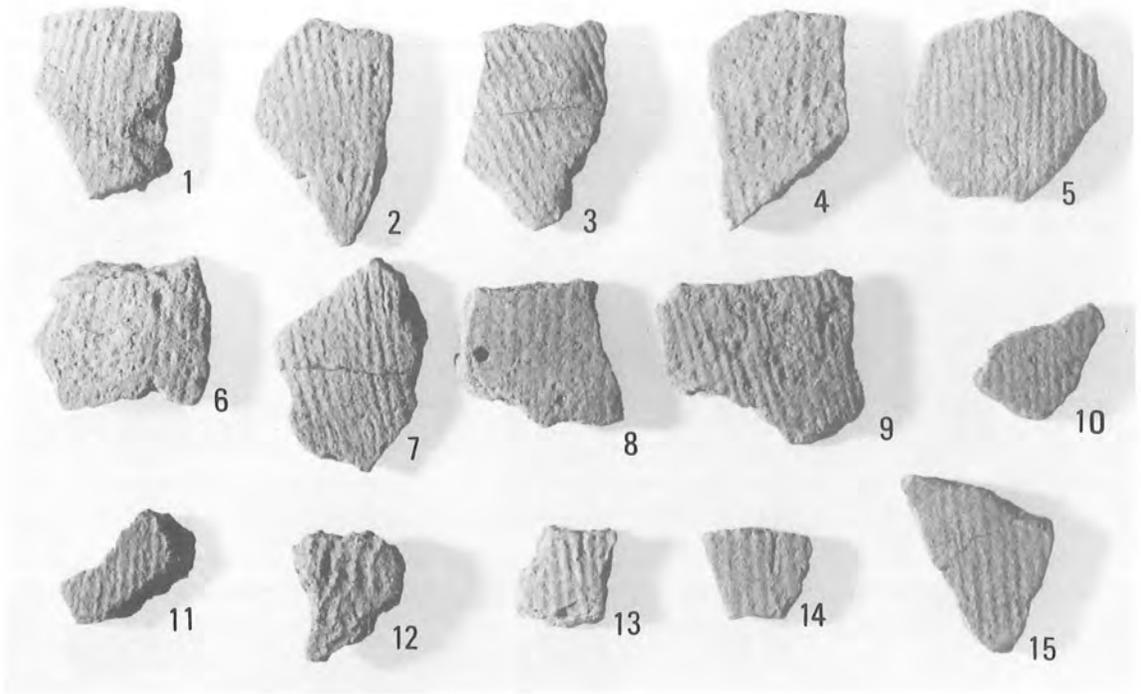
狸塚26号墳



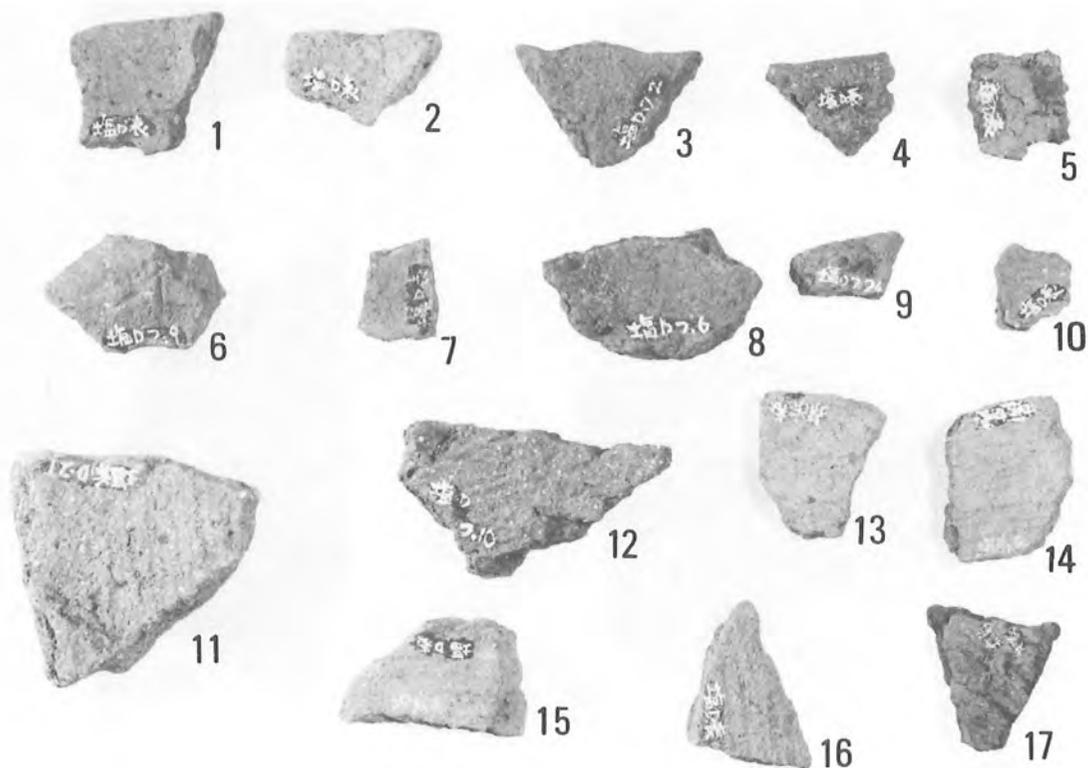
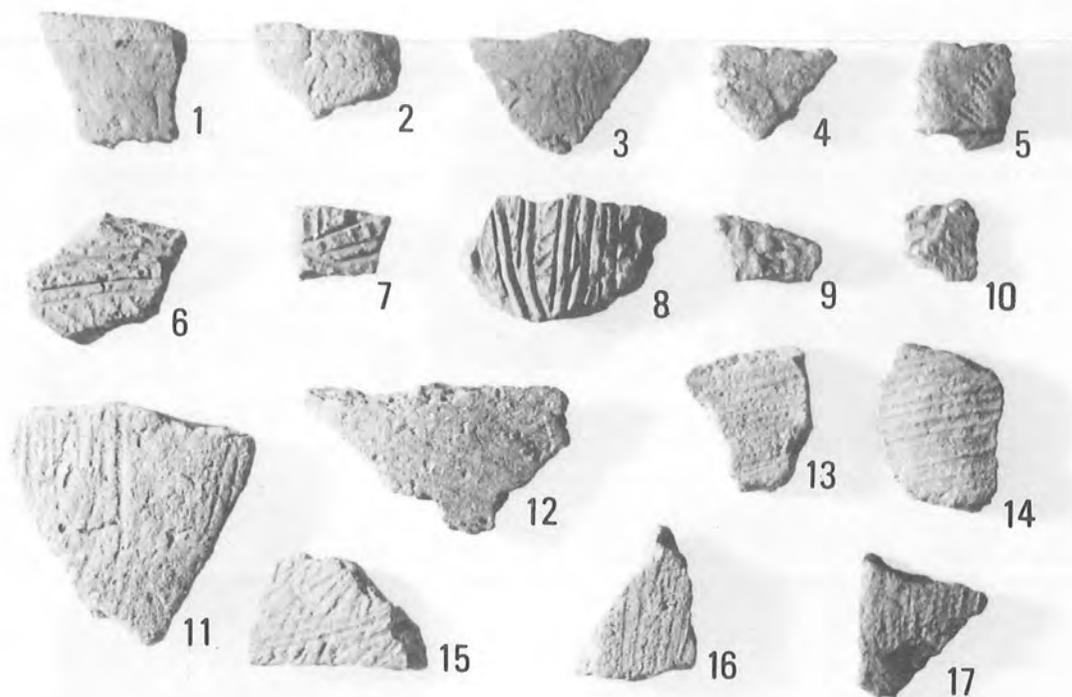
D区出土縄文土器 上・1/2 下・1/1



D区出土縄文土器（表・裏）



D区出土縄文土器（表・裏）



D区出土縄文土器（表・裏）



1



2



3



4



5



6



7



1



2



3



4



5



6



1



1



2



3



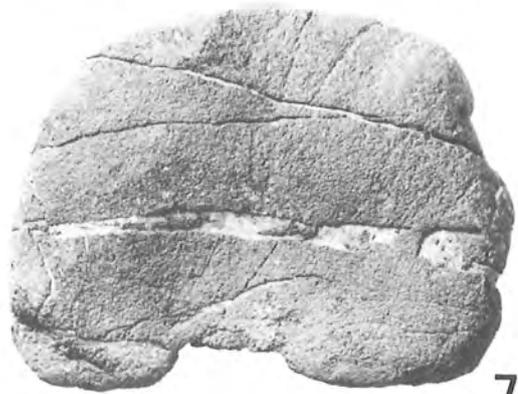
4



5



6



7

石器 (3)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



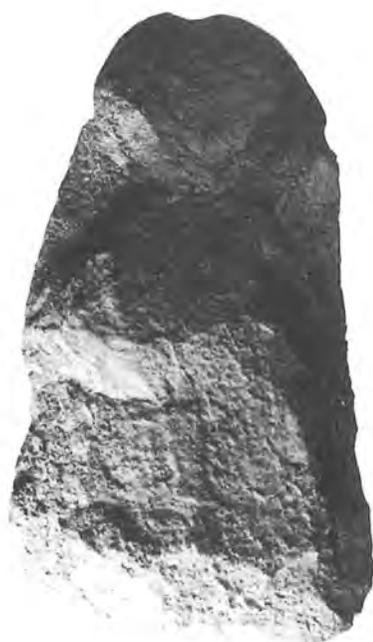
17

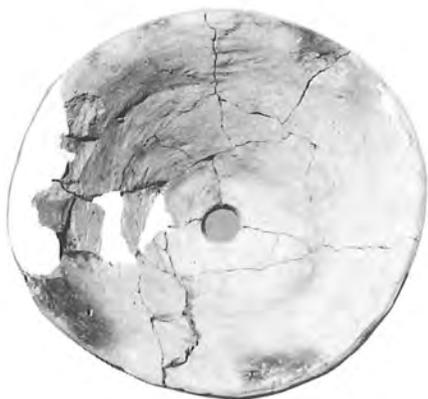


18



19





第1号住居跡出土遺物



A区表採

1



D-7T出土

2



D区表採

3

昭和57年3月25日 印刷

昭和57年3月31日 発行

江南村文化財調査報告 第3集

塩前遺跡発掘調査報告書

——塩古墳群と集落の調査——

編集・発行 埼玉県大里郡江南村教育委員会

印刷 熊谷ビジネスリサーチ